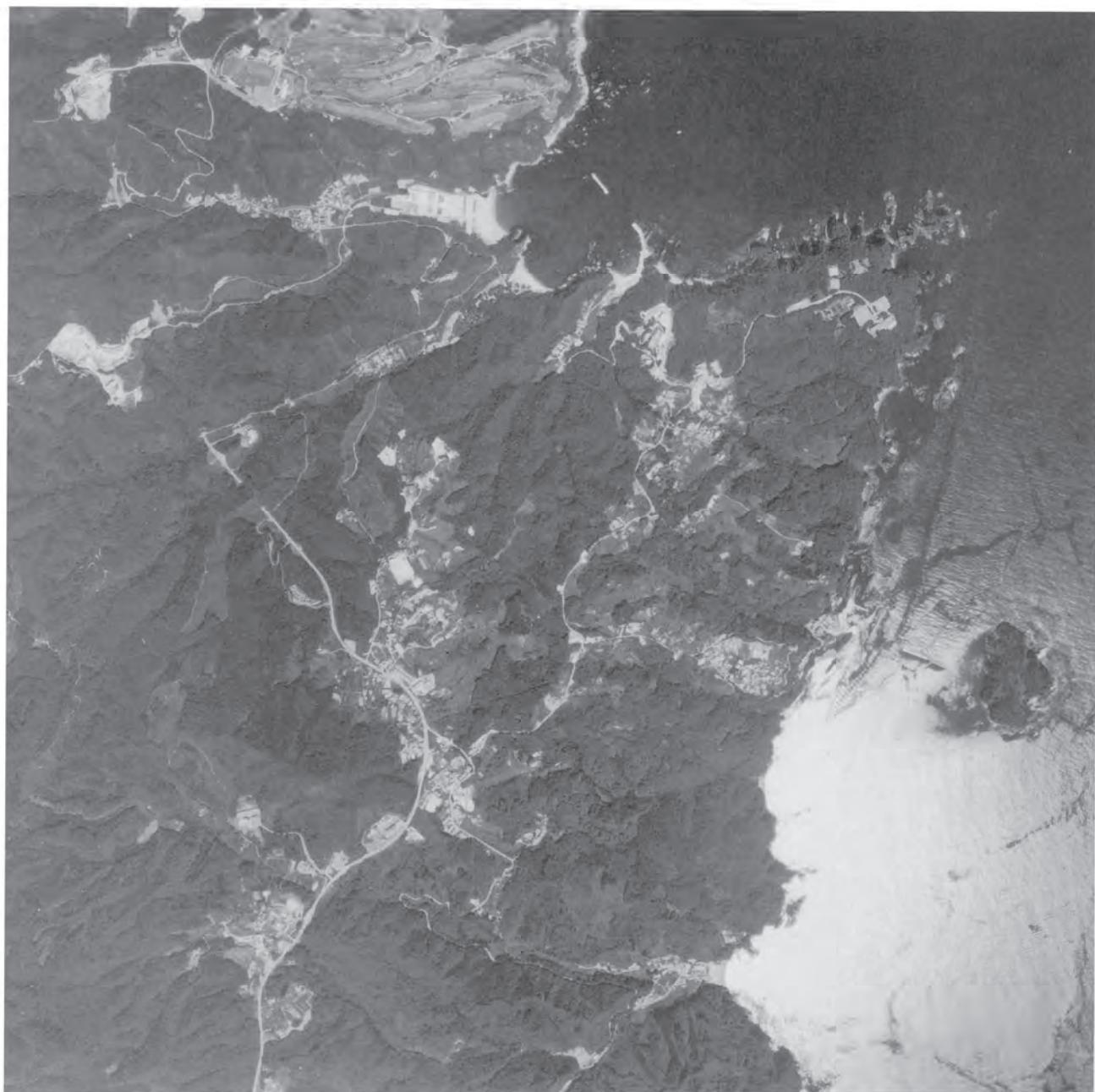


崎山遺跡群 IV

—平成元年度発掘調査概報—



| 崎山遺跡群垂直写真

1990.3

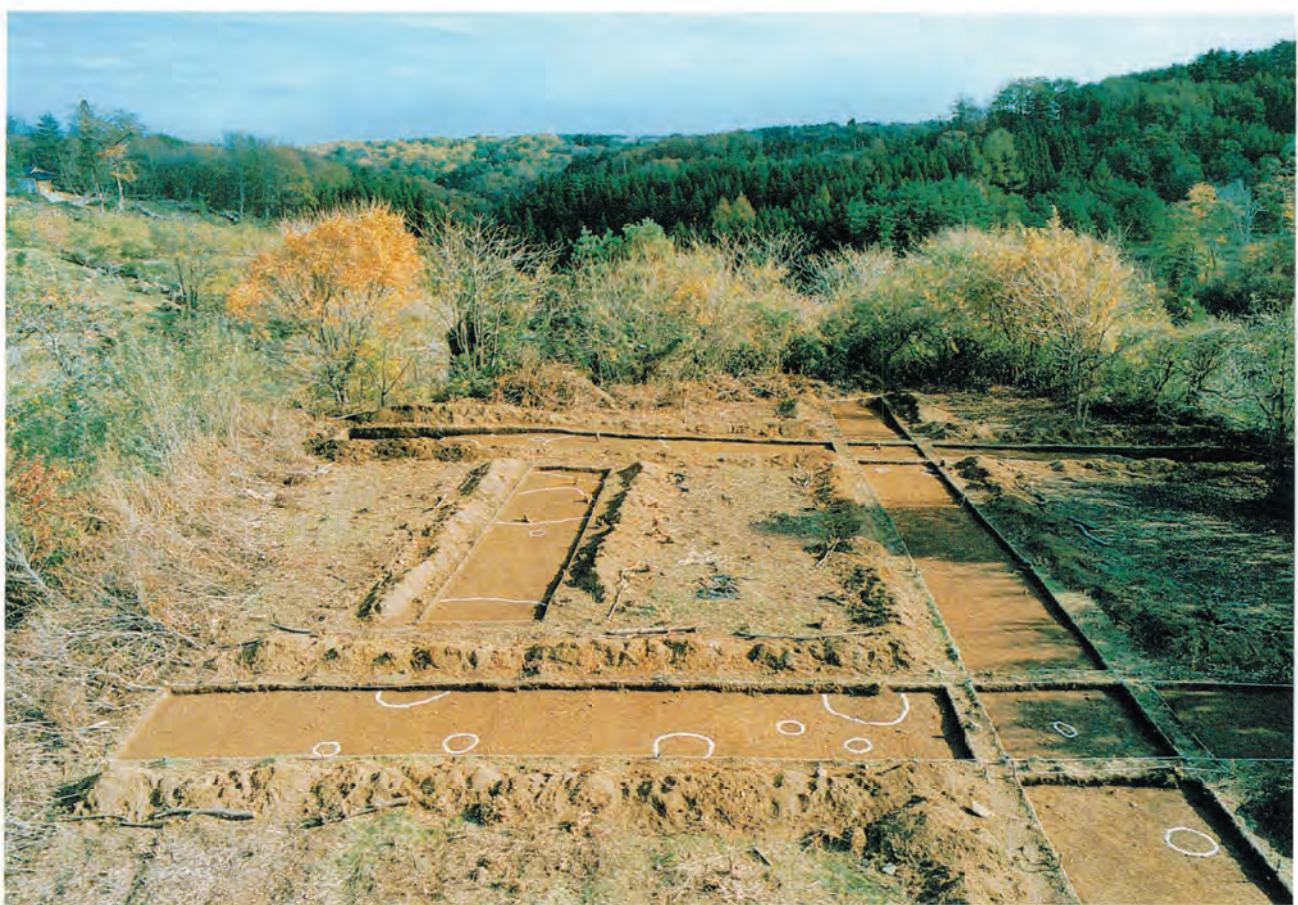
岩手県宮古市教育委員会
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

カラー1 白石遺跡第9号竪穴住居跡

カラー2 崎山貝塚第4次調査遺構検出状況



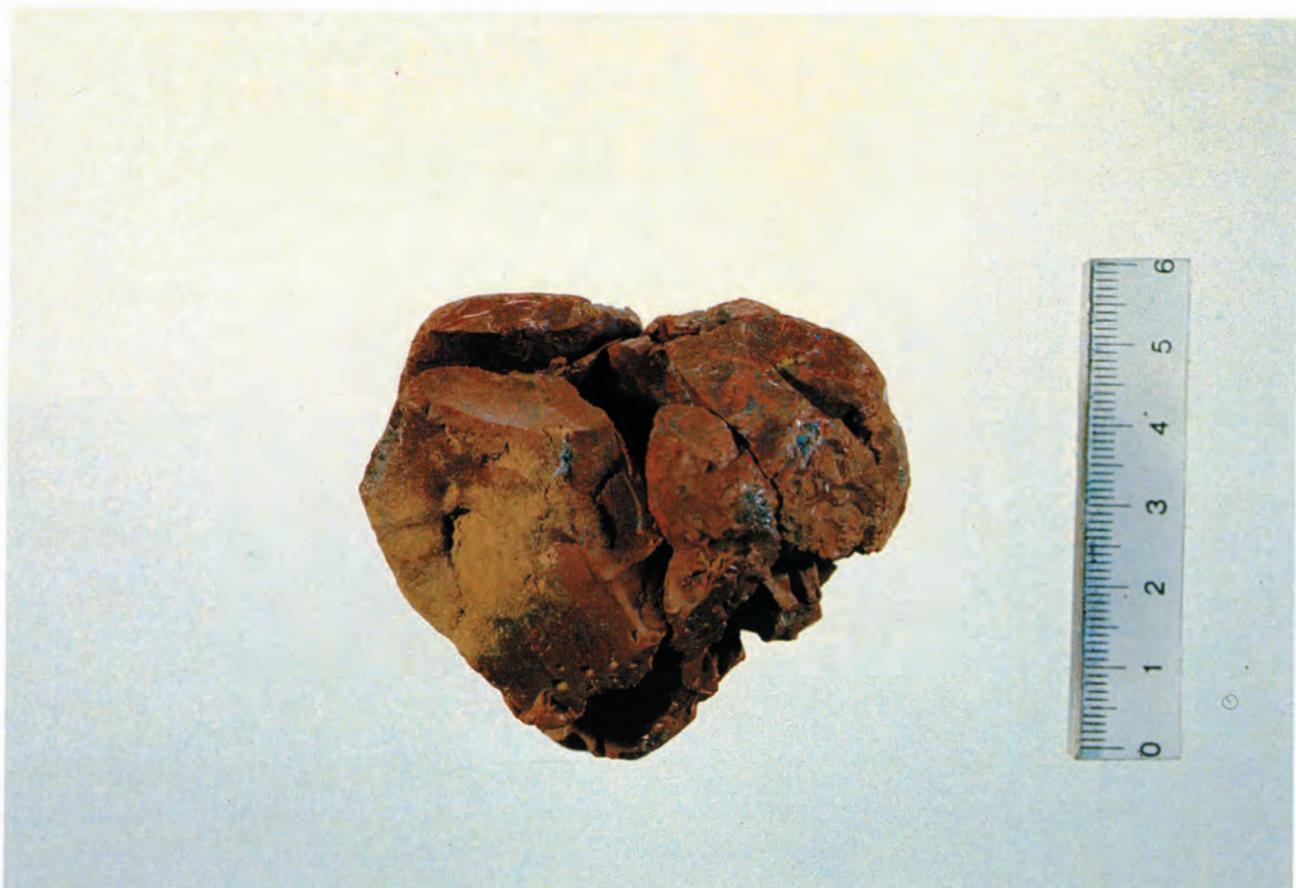
(カラー 1)



(カラー 2)

カラー3 白石遺跡第4次調査出土
剥片接合資料（接合時）

カラー4 白石遺跡第4次調査出土
剥片接合資料（剥片）



(カラー3)



(カラー4)

序 文

宮古市では昭和61年度から平成2年度までを第1次として、国庫補助、県費補助を受けて崎山遺跡群の発掘調査事業を実施しております。

この事業は、遺跡群の保護を前提とした範囲確認調査および個人住宅建築等に係る緊急調査への対処を目的としております。

本書は、崎山遺跡群の4年目の調査成果をまとめた概報であります。調査の結果、白石遺跡の2地点の調査区では、縄文時代中期末葉から後期初頭にわたる遺構群が密集した状態で検出されております。さらに、これらの遺構に伴って石器の製作過程を示す剥片接合資料などの貴重な遺物も出土しております。また、崎山貝塚からは縄文時代中期を主体とする遺構群のほかに平安時代の竪穴住居跡も検出されております。これにより前年度に検出した集落跡は、丘陵上の平坦面ほぼ全域に広がっていることが確認されました。

今後は最小限の精査によりこれら遺構群の内容や性格を調査し、崎山貝塚の内容をより具体的に把握するとともに積極的に保護策を構じてゆくべきであると考えております。

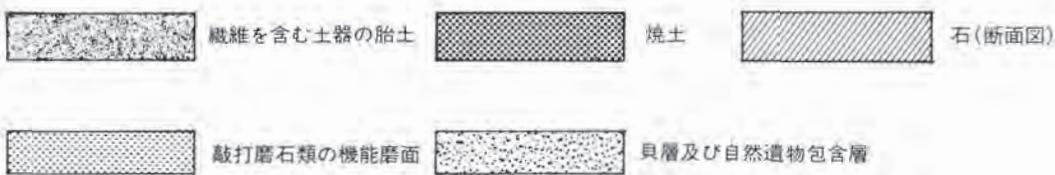
最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり様々な御指導や御協力をいただきました文化庁記念物課、岩手県教育委員会文化課、岩手県立博物館に対し深く感謝を申し述べるとともに、御理解、御協力下さった地権者各位ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げて序文といたします。

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇逸

例　　言

1. 本書は平成元年度に国庫補助を受けて実施した崎山遺跡群白石遺跡第3次調査・同第4次調査・崎山貝塚第4次調査の概報である。
2. 発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長 保坂純三・佐藤勇逸）で、発掘調査および本書の執筆・編集は高橋が担当し、鎌田・盛合がこれを補佐した。
3. 調査座標は平面直角座標第X系を座標交換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためにRを冠して表示した。
座標軸方向 第X系に準じる
調査座標原点 X-35800.000, Y+97000.000
4. 高さは標高値をそのまま使用した。
5. 遺構、遺物の表現については下記のとおりとした。



6. 発掘調査および遺物の整理、本書の執筆に際しては次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して謝意を申し上げる。（敬称略）

渡辺　誠（名古屋大学）	佐藤　嘉彦（岩手県立博物館）
岡村　道雄（文化庁記念物課）	八木　光則（盛岡市教育委員会）
高橋　信雄（岩手県教育委員会文化課）	千田　和文（盛岡市教育委員会）
佐々木　勝（岩手県教育委員会文化課）	中村　良幸（大迫町教育委員会）
小田野哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）	武田　将男（宮古市教育委員会）
斎藤　邦雄（岩手県埋蔵文化財センター）	佐藤　正彦（陸前高田市立博物館）
名久井文明（岩手県立博物館）	熊谷　賢（社会福祉法人高寿会勤務）
熊谷　常正（岩手県立博物館）	中嶋　隆（宮古市在住）
佐々木清文（岩手県立博物館）	

7. 本文中の引用文献は次のとおり略記した。（いずれも宮古市教育委員会刊行）
1979『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 小田野哲憲→『大付報文79』
1983～86『宮古市分布調査報告書1～4』 武田将男→『分布調査1～4』
1986『宮古市遺跡分布図昭和60年度版』 武田将男→『分布図86』
1987～89『崎山遺跡群I～III昭和61～63年度発掘調査概報』→『崎山遺跡群I～III』
1989『トロノ木I遺跡第1次～第7次発掘調査報告書』→『トロノ木I報文89』

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1. 調査要旨	1
2. 調査体制	1
II 調査内容	4
1. 白石遺跡第3次・第4次調査	4
(1) 遺構の検出状況	4
(2) 検出された遺構・遺物	8
2. 崎山貝塚第4次調査	70
(1) 第1次～第3次調査の概要	70
(2) 調査の方法と目的	70
(3) 基本層序	70
(4) 検出された遺構と遺物	79
3. 剥片接合資料について	88
4. 扁平円礫について	92
III 調査のまとめ	105

図版目次

- 第1図版 白石遺跡第3次調査区全景（最終時）
第2図版 白石遺跡第3次調査区全景（使用時）
第3図版 第4号竪穴住居跡
第4図版 第4号竪穴住居跡・炉
第5図版 第9号竪穴住居跡、堆積状況
第6図版 第9号竪穴住居跡・炉
第7図版 第8号竪穴住居跡・礫出土状況、堆積状況
第8図版 第8号竪穴住居跡・炉、炉構築状況
第9図版 第8号竪穴住居跡・遺物出土状況、第8号・第10号・第11号竪穴住居跡
第10図版 第8号・第10号・第11号竪穴住居跡・炉、第10号、第11号竪穴住居・炉堆積状況
第11図版 第10号・第11号竪穴住居跡・炉構築状況、第8号竪穴住居跡P₉・P₁₀・堆積状況
第12図版 第11号竪穴住居跡扁平円礫出土状況、第7号、第8号土塗跡
第13図版 第7号土塗跡・堆積状況、第13号竪穴住居跡・炉
第14図版 白石遺跡第4次調査区全景、第15号竪穴住居跡
第15図版 第15号竪穴住居跡・炉堆積状況、炉理設土器
第16図版 第15号竪穴住居跡・堆積状況、炉床上遺物出土状況
第17図版 第16号竪穴住居跡・堆積状況、第17号竪穴住居跡・堆積状況
第18図版 第16号・第17号竪穴住居跡、第17号竪穴住居跡・遺物出土状況
第19図版 第17号竪穴住居跡・炉・床面の状況、炉堆積状況
第20図版 第20号竪穴住居跡、第19号竪穴住居跡
第21図版 第13号・第10号土塗跡・堆積状況
第22図版 第15号竪穴住居跡P₁₉・第21号柱穴群P₁₁₂・遺物出土状況
第23図版 崎山貝塚第4次調査区全景
第24図版 遺構検出状況
第25図版 遺構検出状況
第26図版 N24E93-1・N21E93-1 竪穴住居跡
第27図版 出土遺物(1)
第28図版 出土遺物(2)
第29図版 剥片接合資料（接合時）
第30図版 剥片接合資料（剥片）

内表紙図版 崎山遺跡群垂直写真

挿 図 目 次

第1図 位置図	2
第2図 嶺山遺跡群と周辺の遺跡	3
第3図 白石遺跡周辺地形図	4
第4図 白石遺跡遺構配置図	5・6
第5図 第4号竪穴住居跡	7
第6図 第4号竪穴住居跡・炉A	8
第7図 第9号竪穴住居跡	10
第8図 第9号竪穴住居跡・炉	11
第9図 第4号竪穴住居跡・第9号竪穴住居跡出土遺物(1)	12
第10図 第4号竪穴住居跡・第9号竪穴住居跡出土遺物(2)	14
第11図 第14号竪穴住居跡・第9号竪穴住居跡出土遺物(3)	15
第12図 第8号竪穴住居跡	16
第13図 白石遺跡第3次調査区上層断面図	17
第14図 第8号竪穴住居跡・炉	18
第15図 第8号竪穴住居跡出土遺物(1)	20
第16図 第8号竪穴住居跡出土遺物(2)	21
第17図 第8号竪穴住居跡出土遺物(3)	22
第18図 第8号竪穴住居跡出土遺物(4)	23
第19図 第8号竪穴住居跡出土遺物(5)	24
第20図 第8号竪穴住居跡出土遺物(6)	25
第21図 第8号竪穴住居跡出土遺物(7)	26
第22図 第8号竪穴住居跡出土遺物(8)	27
第23図 第8号竪穴住居跡出土遺物(9)	28
第24図 第8号竪穴住居跡・第11号竪穴住居跡・第7号土塙跡・第8号土塙跡	29
第25図 第10号竪穴住居跡・炉、第11号竪穴住居跡・炉(1)	31
第26図 第10号竪穴住居跡・炉、第11号竪穴住居跡・炉(2)	32
第27図 第10号竪穴住居跡・第7号土塙跡・第8号土塙跡出土遺物(1)	33
第28図 第10号竪穴住居跡・第7号土塙跡・第8号土塙跡出土遺物(2)	34
第29図 第12号竪穴住居跡	36
第30図 第13号竪穴住居跡・第14号炉跡	37
第31図 第13号竪穴住居跡・炉、第14号炉跡	38
第32図 白石遺跡第4次調査区上層断面図(1)	39
第33図 第15号竪穴住居跡	40
第34図 第15号竪穴住居跡・炉	42

第35図 第15号竪穴住居跡出土遺物(1)	44
第36図 第15号竪穴住居跡出土遺物(2)	45
第37図 第15号竪穴住居跡出土遺物(3)	46
第38図 第15号竪穴住居跡出土遺物(4)	47
第39図 第15号竪穴住居跡出土遺物(5)	48
第40図 第15号竪穴住居跡出土遺物(6)	49
第41図 第15号竪穴住居跡出土遺物(7)	50
第42図 第18号竪穴住居跡・第21号柱穴群	51
第43図 第16号竪穴住居跡	52
第44図 白石遺跡第4次調査区土層断面図(2)	53
第45図 第16号竪穴住居跡・第18号竪穴住居跡出土遺物(1)	54
第46図 第17号竪穴住居跡・第19号竪穴住居跡・第9号～第12号土塙跡	55
第47図 第17号竪穴住居跡・炉	57
第48図 第17号竪穴住居跡出土遺物(1)	59
第49図 第17号竪穴住居跡出土遺物(2)	60
第50図 第17号竪穴住居跡出土遺物(3)	61
第51図 第19号竪穴住居跡・第20号竪穴住居跡・第14号上塙跡出土遺物	62
第52図 土塙跡、ピット出土遺物	63
第53図 第20号竪穴住居跡・第13号土塙跡	65
第54図 遺構外出土遺物(1)	67
第55図 遺構外出土遺物(2)	68
第56図 遺構外出土遺物(3)	69
第57図 崎山貝塚周辺地形図	71・72
第58図 崎山貝塚遺構配置図	73・74
第59図 崎山貝塚第4次調査区土層	75
第60図 崎山貝塚第4次調査区土層	76
第61図 崎山貝塚第4次調査区	77・78
第62図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(1)	79
第63図 崎山貝塚第4次調査区北端部検出遺構配置図	80
第64図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(2)	81
第65図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(3)	83
第66図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(4)	84
第67図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(5)	86
第68図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(6)	87
第69図 第17号竪穴住居跡出土剥片接合資料	88
第70図 第17号竪穴住居跡剥離作業過程図	89・90
第71図 接合剥片長幅比	91
第72図 白石遺跡出土扁平円疊瓦測図	92

第73図 白石遺跡出土扁平円礫	94
第74図 嶺山貝塚出土扁平円礫	95
第75図 鍬ヶ崎館山貝塚出土扁平円礫	97
第76図 鳩岡崎遺跡出土礫石錘	99
第77図 莖内遺跡出土礫石錘	101

付 表 目 次

第1表 第11号竪穴住居跡出土扁平円礫一覧表	92
------------------------	----

カラー図版目次

- カラー 1 白石遺跡第9号竪穴住居跡
- カラー 2 嶺山貝塚第4次調査遺構検出状況
- カラー 3 白石遺跡第17号竪穴住居跡出土剥片接合資料（接合時）
- カラー 4 白石遺跡第17号竪穴住居跡出土剥片接合資料（剥片）

I 調査経過

1. 調査要旨

宮古市では国庫補助、県費補助を受けて昭和61年度より平成2年度までの5ヶ年間を第I期として崎山遺跡群発掘調査事業を実施している。

平成元年度の発掘調査は、白石遺跡第3次調査（個人住宅建築）・白石遺跡第4次調査（倉庫建築等）および崎山貝塚第4次調査（範囲確認調査）の3件である。総事業費は本体額で500万円である。

○白石遺跡第3次調査 平成元年6月8日～9月11日 108m²

遺跡のはば中央部に位置し、第2次調査区に隣接する。縄文時代中期末葉の堅穴住居跡7棟と土塙跡2基を検出している。

○白石遺跡第4次調査 平成元年6月15日～10月20日 86m²

第3次調査区の北北東約35kmに位置し、縄文時代中期末葉～後期初頭の堅穴住居跡7棟と土塙跡4基を検出している。

○崎山貝塚第4次調査 平成元年10月16日～11月22日 363m²

貝塚の中央部に相当する台地上で第3次調査区の北東に隣接する休耕地を調査した。調査の結果、縄文時代中期の堅穴住居跡や土塙跡および平安時代の堅穴住居跡を検出している。縄文時代の遺構の中には粉碎された貝がら片や焼骨片などを伴うものもあり特筆される。

2. 調査体制

発掘調査の調査体制は次のとおりである。

調査総括 摂待 保典 宮古市教育委員会社会教育課長

事務担当 小本 哲 " 係長

" 佐藤 広昭 宮古市教育委員会社会教育係主事

調査員 高橋憲太郎 " (主担当)

" 鎌田 祐二 "

" 盛合 義信 "

調査の実施にあたり、次の各位から多大の協力をいただいた。（敬称略）

<地権者> 俣野大、山内由太郎、松田稔、前川孫八、後藤正吉

<発掘調査> 阿部豊、伊藤晴男、佐伯裕則、吉田昭、大越貞藏、佐々木茂、古館友三

前川軍司、前川静江、工藤イネ、森田隆、小林茂、佐々木清ほかの皆さん

<整理作業> 阿部豊、佐々木ヨシ子、斎藤薰

<資料提供> 山根勝男



第1図 位置図



第2図 崎山遺跡群と周辺の遺跡

II 調査内容

1. 白石遺跡第3次・第4次調査(第3図)

(1) 遺構の検出状況(第4図)

白石遺跡は、宮古市の遺跡コードLG14-2195、岩手県のコードLG04-2194として登録された周知の遺跡である。昭和62年度に実施した第2次調査では縄文時代中期末葉に伴う竪穴住居跡5棟、土器埋設炉跡1基、柱穴群1基、土塗跡6基を検出している。

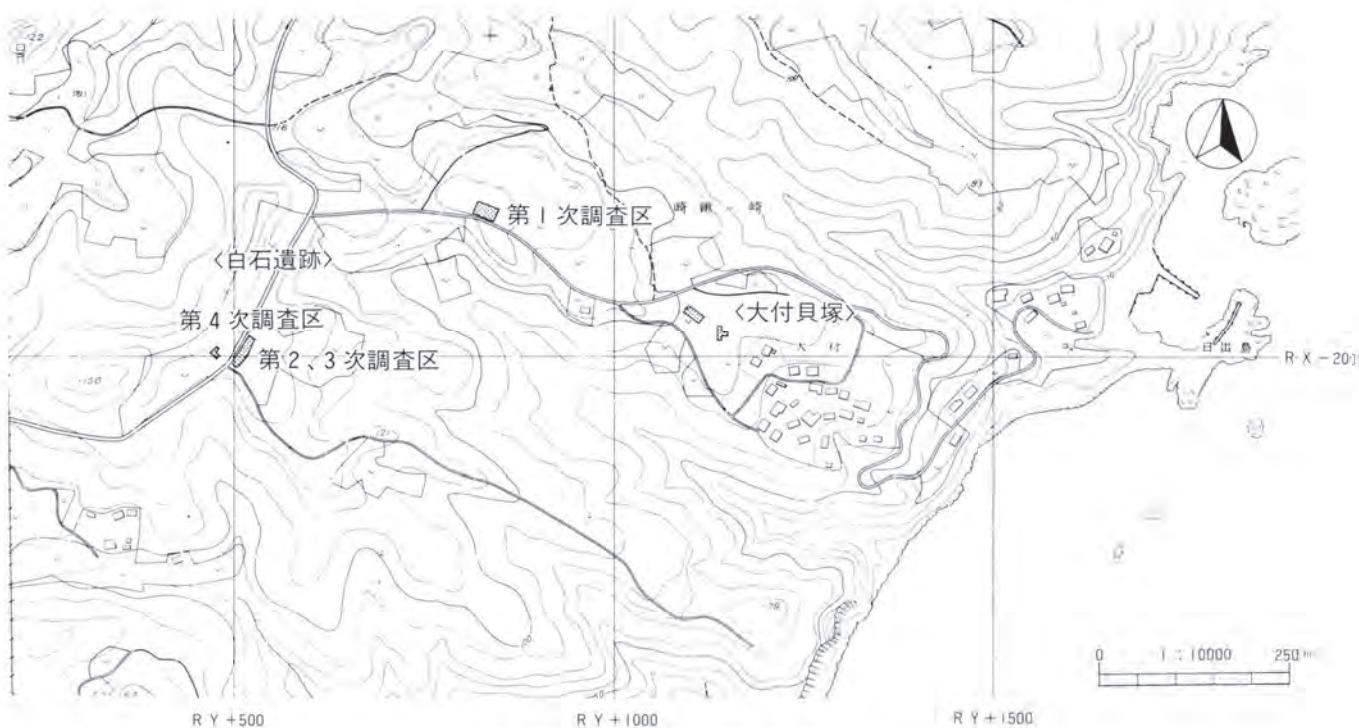
第3次調査 第3次調査は個人住宅建築に先だつ緊急発掘調査である。調査区は遺跡のはば中央に位置し第2次調査区に隣接している。

発掘調査は、住宅の建築により破壊される部分のすべてを対象としたが、調査区の全域から竪穴住居跡や土塗跡などが密集した状態で検出されている。

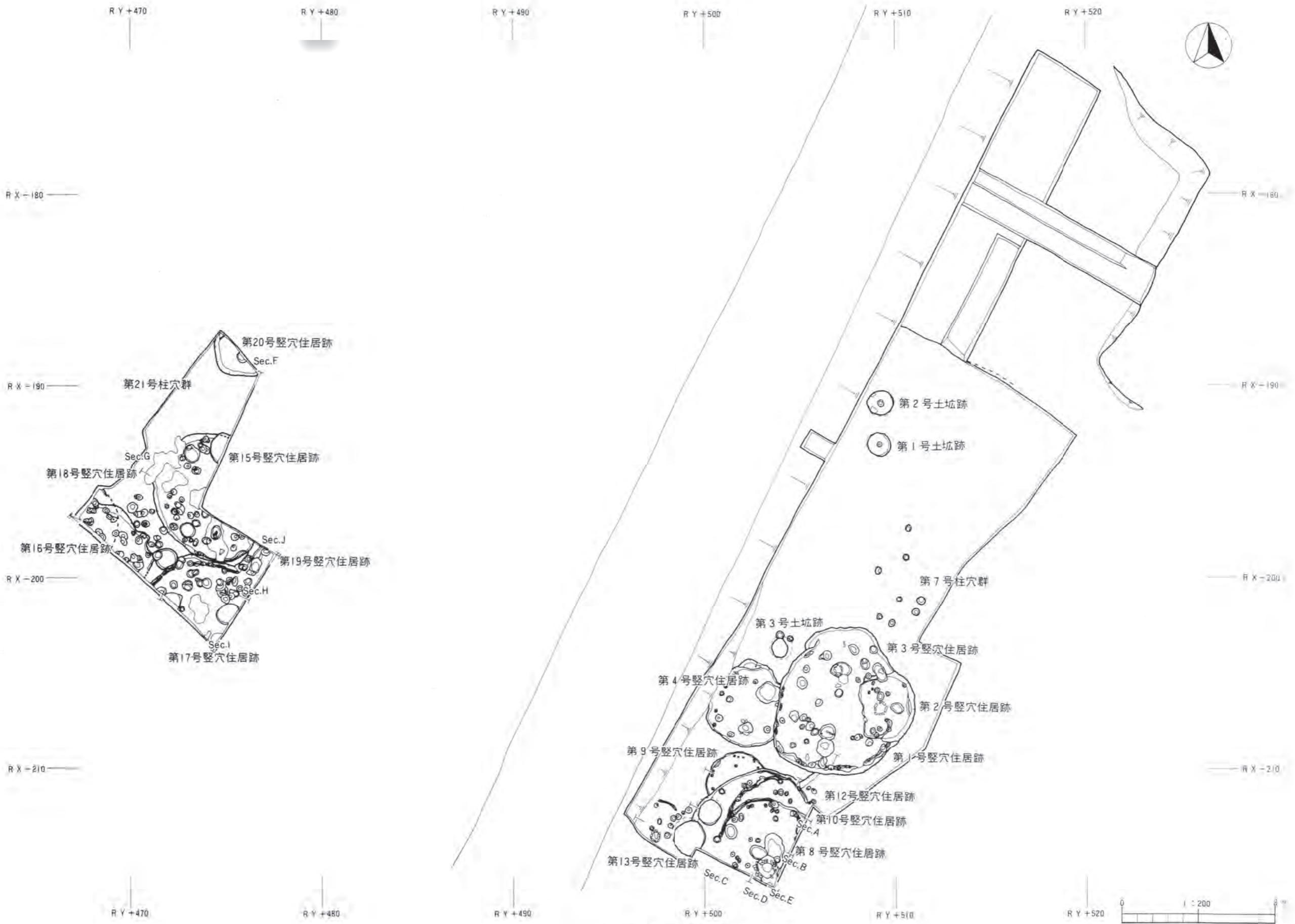
基本層序は、I層が表上層で、その直下に地山の粘質土(原地山層)が存在するが、これは掘込み面が削平されているためであり、このため遺構の検出は地山上面で行った。遺構の保存状態は西半部で極端に悪い。また、第8号竪穴住居跡・第10号竪穴住居跡・第11号竪穴住居跡・第12号竪穴住居跡は重複するが、これらの最上層は暗褐色土を基本土とするA層に覆われている。これは第2次調査区の第1号竪穴住居跡とこれに重複する遺構群を覆うA層の堆積状況に極めて酷似している。

第4次調査 第4次調査は倉庫建築(個人)に先だつ緊急調査であり、第3次調査区の北北東約35mに位置する。

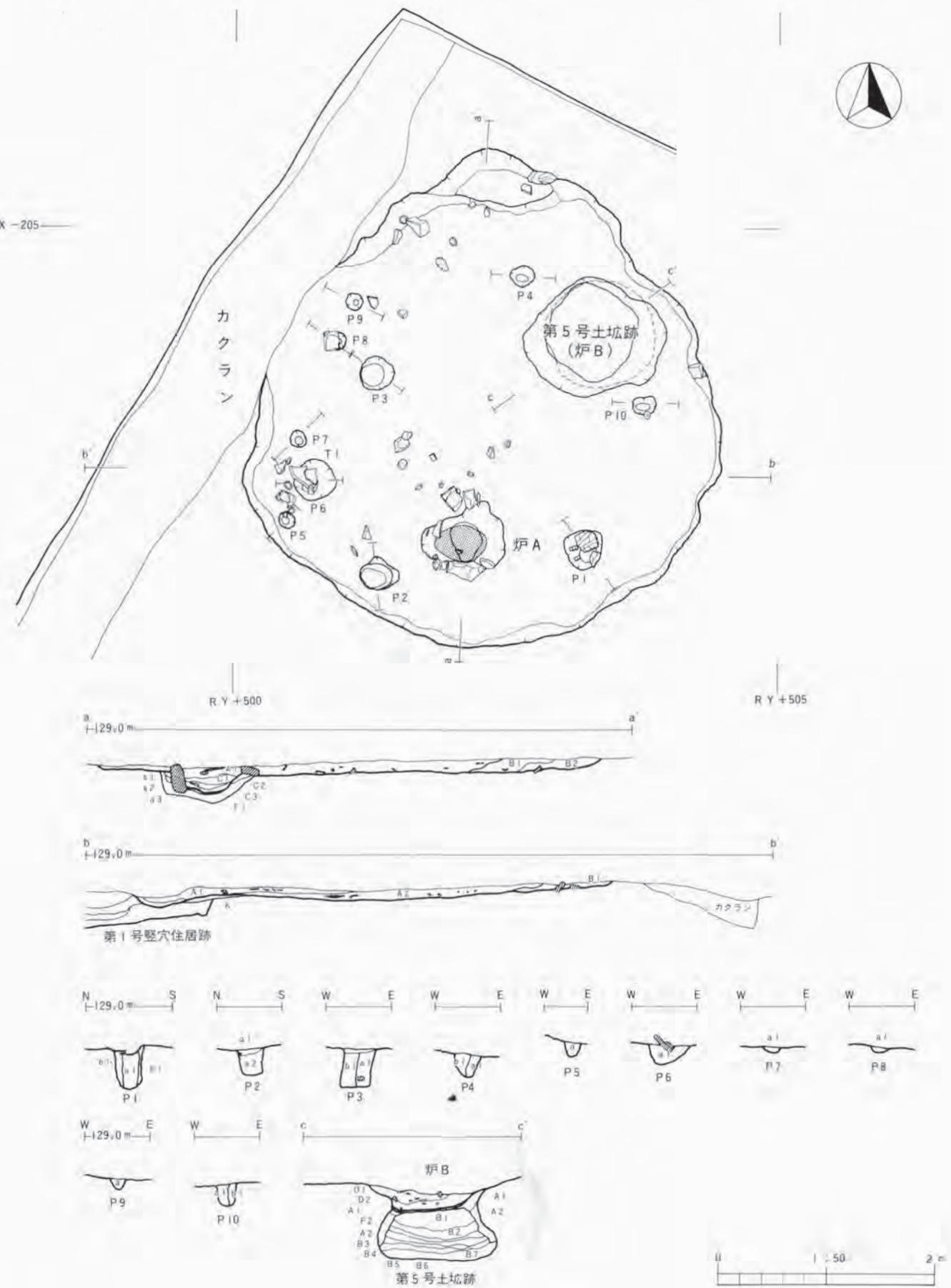
発掘調査は、倉庫の建築により破壊される部分および車輌の出入のために削平される部分のすべてを対象とした。しかし、土捨場の確保のためや予想外の遺構、遺物の出土により、届出地の南半部は未精査となったが、来年度以降に対応することとした。調査区の全域から第3次



第3図 白石遺跡周辺地形図



第4図 白石遺跡遺構配置図



第5図 第4号竪穴住居跡

調査区周辺同様竪穴住居跡や土塙跡が密集した状態で検出されている。

基本層序は、I層が表上層で、II層が暗褐色土層、III層が地山の粘質土層（原地山層）となっている。遺構のすべてはIII層上面で検出しており、I層とII層に覆われている。調査区内は耕作等により攪乱されており、掘り込みの浅い遺構ほど保存状態が悪くなっている。

(2) 検出された遺構・遺物

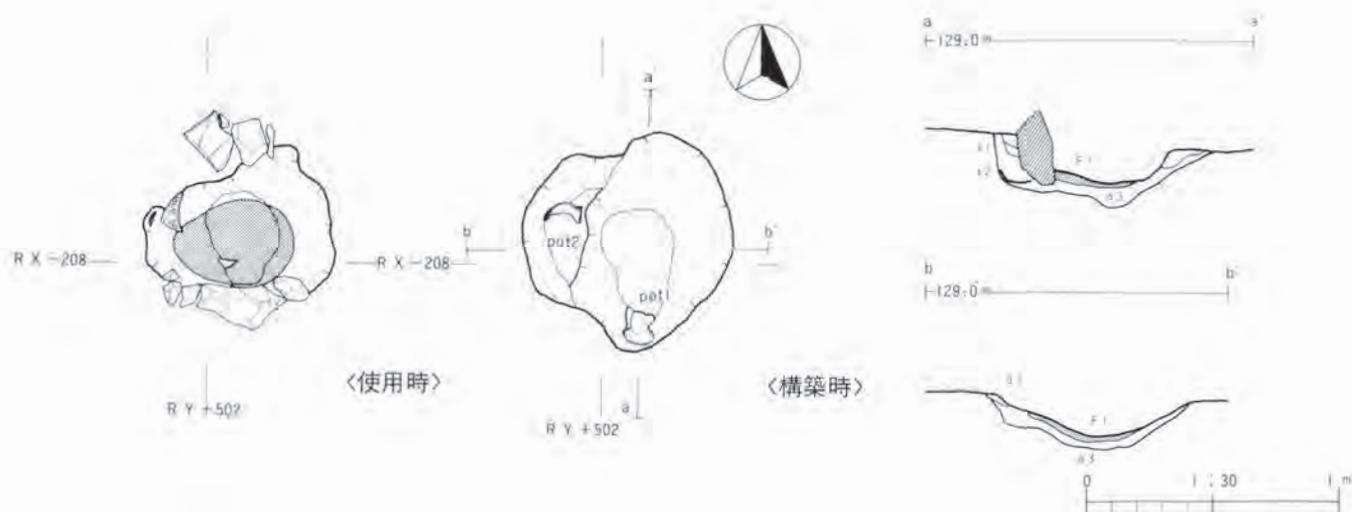
第3次調査区では第4号竪穴住居跡・第8号竪穴住居跡～第13号竪穴住居跡・第7号土塙跡・第8号土塙跡を検出し、第4号次調査区では第15号竪穴住居跡～第20号竪穴住居跡・第21号柱穴群、第9号土塙跡～第13号土塙跡を検出している。

第4号竪穴住居跡

第3次調査区東端部に位置する。第2次調査時に遺構の南端部を精査しているが、今回の調査で住居跡の全容を確認することができたため、第2次調査分も含めて報告する。第4号竪穴住居跡は第2次調査区内の第1号竪穴住居跡・第5号竪穴住居跡を切る。また、西端部は市道建設時に削平されてしまっている。平面形は不整円形を呈し、北壁の一部がテラス状に張り出している。規模は東西で44m、南北で4.6mを計る。壁高は0.08mと浅く、埋土の大半は削平されている。壁はゆるやかに立ち上がる。主軸方向はN 9° 30' Eである。

埋土はA層（旧4-A層）、B層、C層、D層（旧4-B層）に大別される。A層は褐色粘質土を基本土とし、黄褐色塊や焼土粒、炭化物粒をわずかに含む。A₂層はA₁層よりやや暗く、炭化物粒をやや多く含んでいる。B層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や明るい褐色土塊をやや多く含む。北壁から西壁にかけて堆積している。C層は炉Aの埋土で、暗褐色粘質土を基本土とし黒褐色土塊を含むC₁層、黒褐色粘質土を基本土とし暗褐色土塊や褐色土塊をやや多く含むC₂層、褐色粘質土を基本土とし暗褐色土粒を含むC₃層に細分されるが、いずれも炭化物粒や焼土粒をやや多く含みしまりない層である。D層はがB（第5号土

重複関係



第6図 第4号竪穴住居跡・炉A

塙跡上層)の埋土で、暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。D₁層は剥片やチップを多量に含み、D₂層は炭化物粒、炭化種子(大半はクルミ)を多量に含む。

床面はやや凹凸があるが固くしまっている。また、第1号竪穴住居跡を切る部分には貼床(K層)がみられる。

柱穴はP₁(旧P₃₅)、P₂~P₄、P₁₀の5本が主柱穴に相当する。柱痕跡の径、深さとも不均一である。柱穴以外には西壁に沿ってP₉~P₇、P₅の小ピットがみられる。P₆はP₅とP₇の間にあり、径0.4、深さ0.18mを計る擂鉢状のピットであるが、暗褐色粘質土を基本土とするF₁層中に第11図36の石皿が斜位に埋設されていた。前2者とは性格を異にするピットであろう。

柱穴

炉は2基あるが、南壁寄りのものを炉A、西壁寄りのものを炉Bとした。炉Bについては報告済みである。炉Aは東西0.77m、南北0.75m、床面からの深さ0.18mを計る不整だ円形を呈する石組炉である。炉石は南側に0.1mから0.35mの角礫を用いたのみで、これ以外の炉石については不明瞭であり、抜きとり穴も確認できなかった。炉床(F₁層)は焼成を受け固くしまっている。G層は炉Aの構築土であるが、地山に類似した明るい褐色粘質土を基本土とし焼土粒などを含む。G₃層の上部はF₁層に接し、わずかに赤変している。また、G₃層には第9図10などのやや大きめの土器片が含まれるが炉床には達しておらず、一般的な炉の埋設土器とは異なる。炉Bは地床炉(掘込炉)で、第5号土塙跡の埋りきらない凹みをそのまま炉床としている。規模は、径1.05~1.10m、深さ0.22mを計る。炉床(F₂層)は焼成を受け固くしまっている。

石組炉

2基の炉については、層位的な新旧関係が認められず、また使用状況からも優劣をつけることは難しいが他の住居跡の検出例から、炉Aを主とし、炉Bを従とするのが妥当かと思われる。

遺物は、出土量があまり多くない。第2次調査分で報告済みのものは省いた。

土器

第9図1は口縁部に縦位の隆帯(鱗状?)を貼付るもの。2~5は磨消技法に施されるもの。6、9は撚りの細かい撚糸文を地文とするもの。7、8、10は単節斜繩文を地文とするものである。

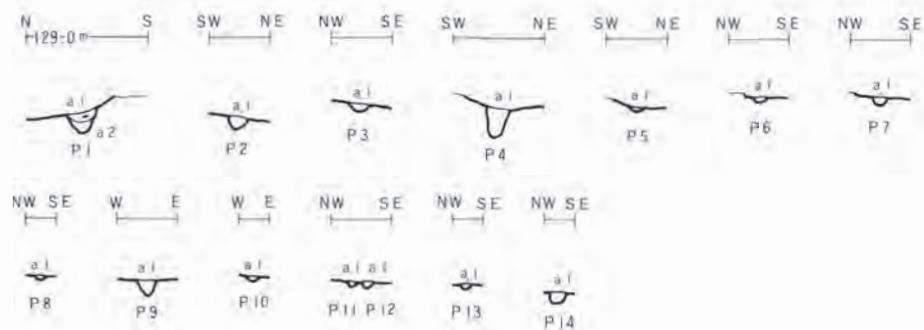
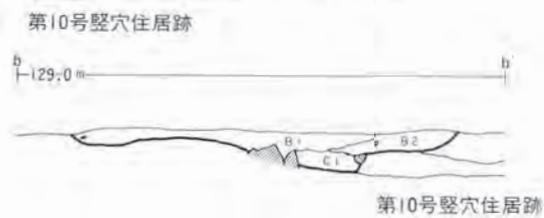
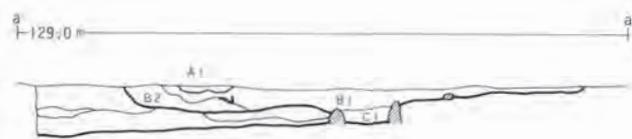
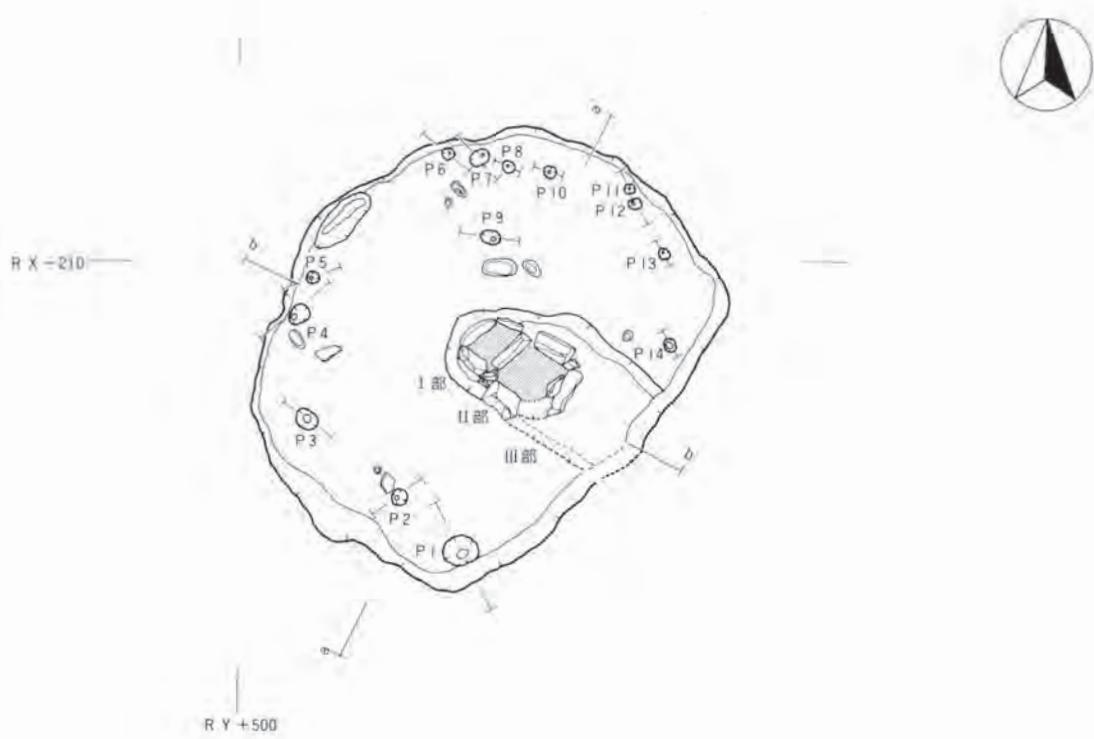
24は削器であり、刃部の調整はやや粗雑である。

石器

第11図29~31は磨製石斧であり、いずれも丁寧に整形される。29は折損後に再利用したもので、基部の敲打痕が著しく、これに伴う剥離がみられる。30は剥離のみで敲打痕が認められない。31は節離面にて縦に折損したもので、再利用はされていない。32は砥石である。33は扁平円礫を使用した敲石で、周縁に敲打痕がみられる。36は石皿であり、表面の磨面は比較的良く使い込まれている。また、凹石状の小さなダメージも伴う。裏面は節離面にて剥落している。

第10図27は下半部を欠失するも紡錘形を呈する土製品(焼成粘土塊?)である。

土製品



1 : 50 2 m

第7図 第9号竪穴住居跡

第9号竪穴住居跡

調査区中央部に位置し、第10号竪穴住居跡を切る。第8号竪穴住居跡・第7号土塙跡ともかすかに重複するが新旧関係は確認できなかった。

重複関係

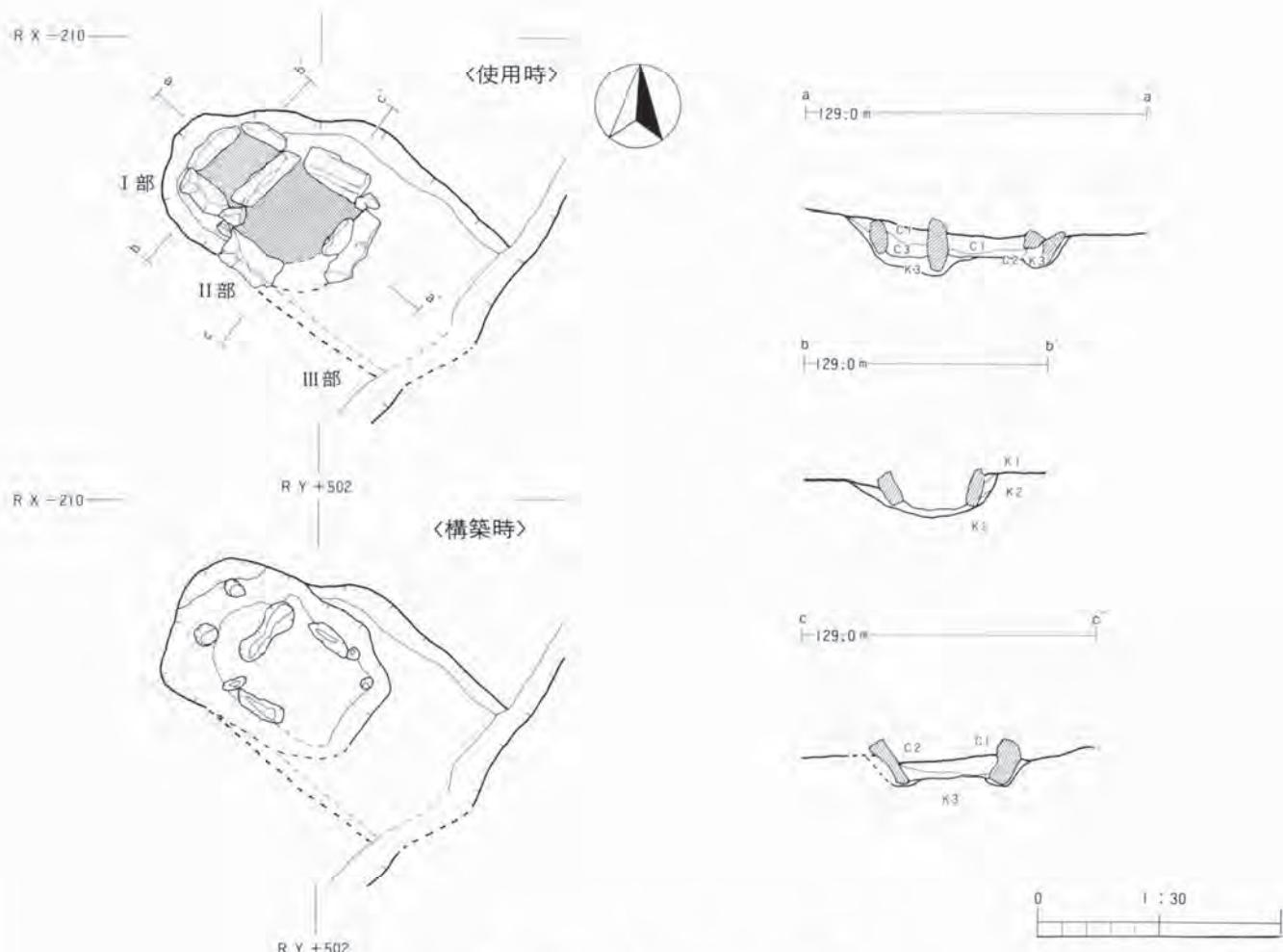
平面形は不整5角形で、規模は北西—南東で2.6m、北東—南西で3.15mを計る。壁高は0.1mと浅く、ゆるやかに立ち上がる。主軸方向はW35° 20' Nである。

埋土はA層、B層、C層に大別される。A層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。B層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。やや明るい色調のB₁層とやや暗いB₂層に細分される。B₂層は北壁～東壁寄りに堆積している。C層は炉の埋土でC₁層は褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊を少量含む。C₂層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。C₃層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊、褐色土塊、焼土粒などを含む。C₁層、C₂層の固さやしまり具合は中程度であるがC₃層は柔らかくしまりがない。また、いずれの層も炭化物粒を含むが特にC₃層に多い。

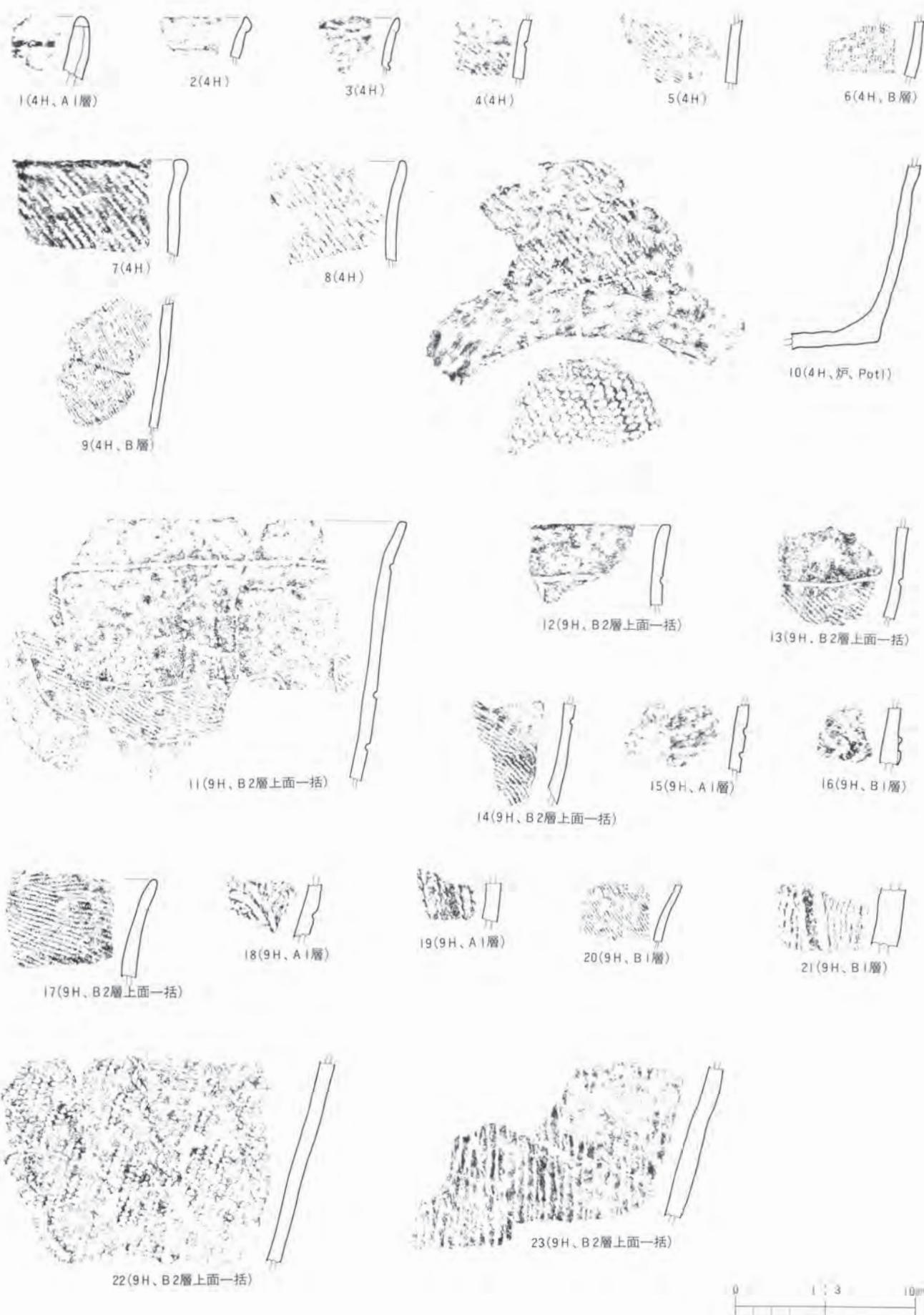
床面は、やや凹凸があるが固くしまっている。貼床は認められない。

柱穴はいずれも小規模で柱痕跡を確認できなかった。深さや配置から主柱穴に相当すると思われるものは、P₁、P₃、P₉、P₁₄の4本である。これら以外のものはいずれも壁寄りにある。

柱穴



第8図 第9号竪穴住居跡・炉



第9図 第4号竪穴住居跡、第9号竪穴住居跡出土遺物(II)

やはり上屋の構造に関連するものであろうか。

炉は石組複式炉で、南東壁の中央よりやや北寄りに位置する。炉の各部をI部～III部とし説明する。

I部は方形の石組炉で、北西－南東で0.3m、北東－南西で0.45mを計る。炉床は焼成を受けるが、あまり焼けていない。II部も方形の石組炉で、北西－南東で0.5m、北東－南西で0.65mを計る。炉床はI部同様に焼成を受けるがあまり焼けていない。III部は北西－南東で0.45m、北東－南西で0.8mを計る。底面は全く焼成を受けていない。

炉の構築方法は、I部～III部の全体をわずかに掘り下げた後、I部とII部に相当する部分をさらに掘り下げている。次に炉石のすえ方を掘りくぼめ、炉石をすえながら構築上（K層）をつめている。III部に関しては全く手がつけられていない。K層は、地山に類似した褐色の粘質土であるが、暗褐色土塊や焼土粒などをわずかに含む。K層上面が炉床となるが、焼土層は極めて薄く、土層断面図では表現できなかった。

遺物は出土量が極めて少ない。第9図11～14、17、22、23はB層上面よりまとまって出土したものであり、11～14は同一個体片であると思われる。口縁部は平縁で、わずかに外反している。体部には磨消し技法により「L」字文を施すが、無文帶に縦位の連続刺突文を2条施す。16は隆起線を施すもの。15、21は磨消し枝法により施文されるが、21はやや古手であろう。18は沈線間を磨消さないもので、大木8b式に伴う。17、20、22は単節斜縄文のみを施すものであるが、22は綾絡文が伴っている。19、23は撚糸文を施すものである。

第10図25は下半部を欠失するか、縦形の石匙である。裏面にはほとんど調整されず、主要剥離面を大きく残す。26は上下両端を欠く。側縁を刃部としており調整される。

第11図35は扁平円礫を使用するもので、周縁に敲打磨面がみられる。敲打磨面は中央部に稜を持ち、小さな面に面取りされた様な状況を呈す。また、敲打磨面には敲打時による小剥離が伴う。

第10図28は石製円盤である。実測図の裏面よりの加撃により周縁を調整している。上下両方の平坦面には全く手が加えられていない。

石組複式炉

土器

石器

石製品

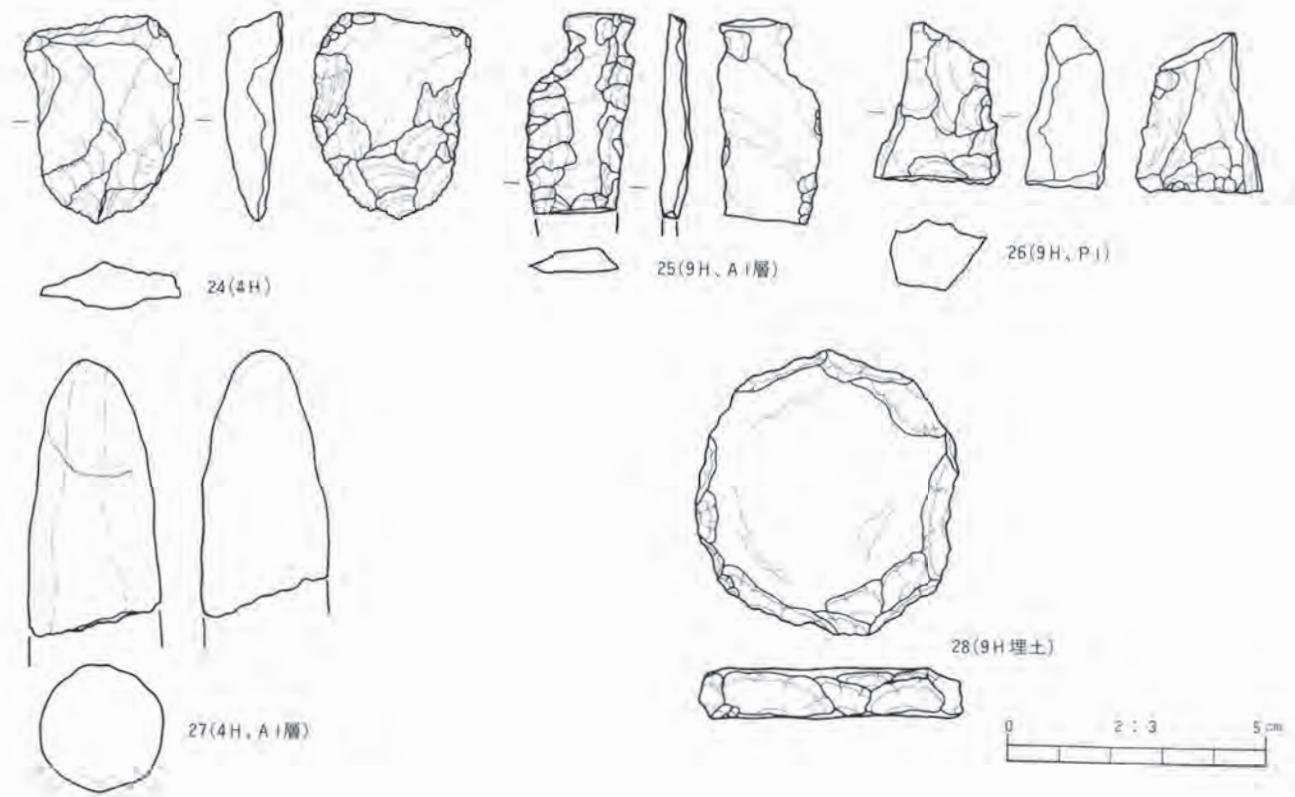
第5号土塙跡（第5図）

第2次調査時に南東半部を精査し、この部分については既に報告済みである。今回は残り半分を完掘した。

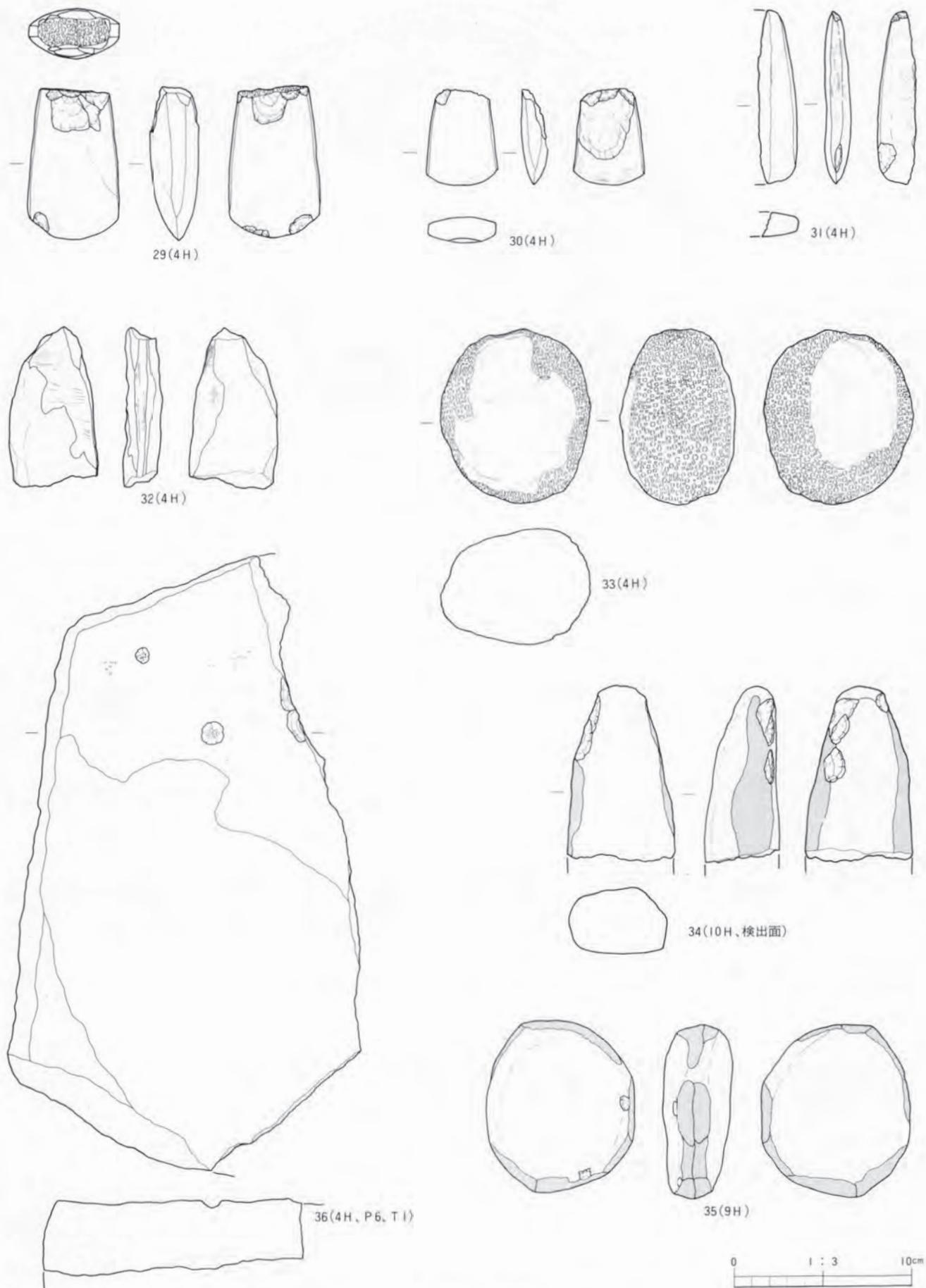
第4号竪穴住居跡炉Bの炉床下に検出した土塙で、土塙が埋没しきらない段階で炉として再利用されたもので、当初より第4号竪穴住居跡に伴っていた可能性が大きい。

開口部は不整円形を呈し、頸部以下はほぼ円形を呈する。規模は開口部径1.05m～1.10m、頸部径0.8m、胴部径1.10m、底部径0.95m、深さ0.7mを計る。断面形はフラスコ状を呈している。

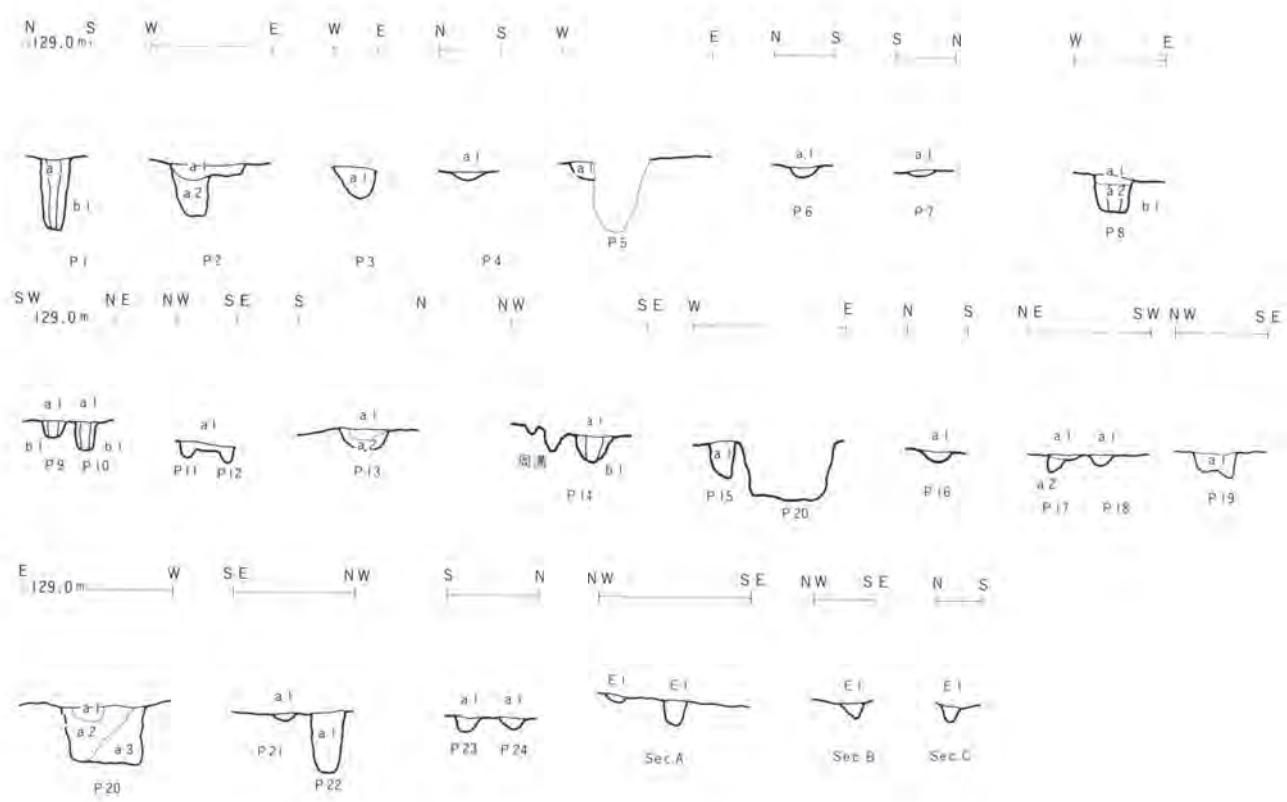
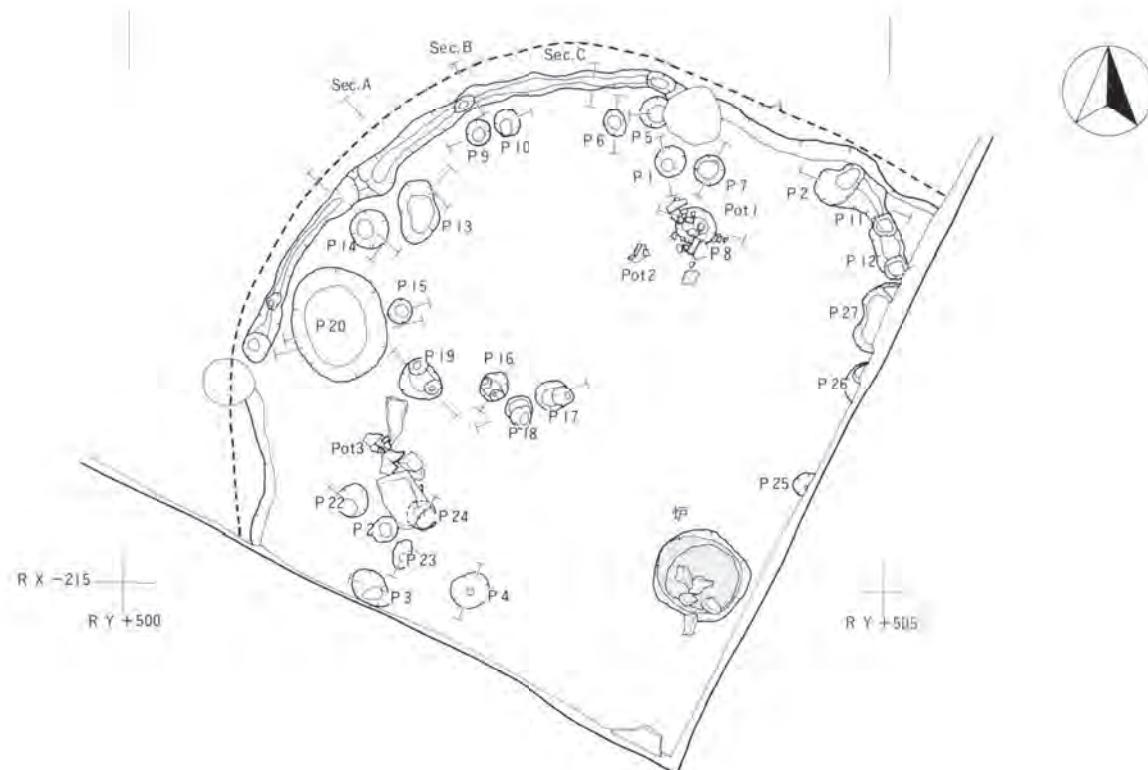
炉床（F₂層）より下層はA層、B層に大別される。壁際に堆積するA層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊をわずかに含むが柔らかくしまりがない。B層は褐色～黄褐色粘質土を基本土とし、混入土は少なく暗褐色土塊などをわずかに含む。B₁層、B₂層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を少量含むがやわらかくしまりがない。



第10図 第4号竪穴住居跡、第9号竪穴住居跡出土遺物(2)

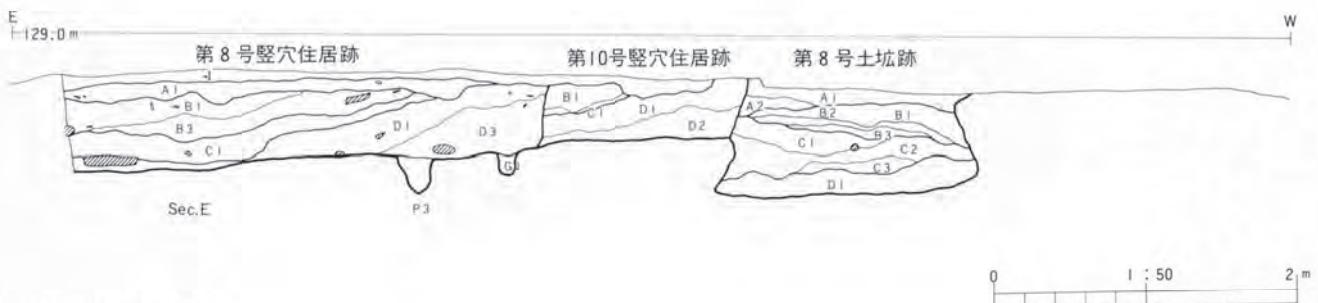
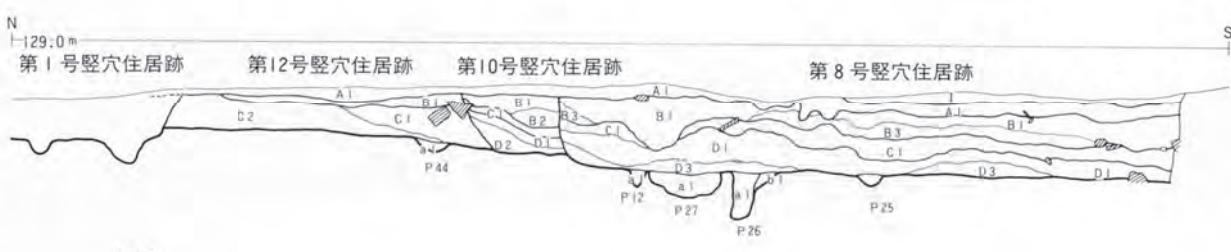
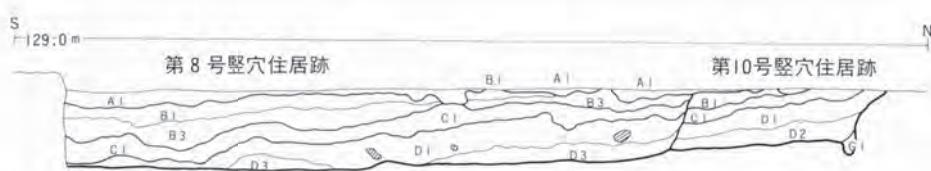
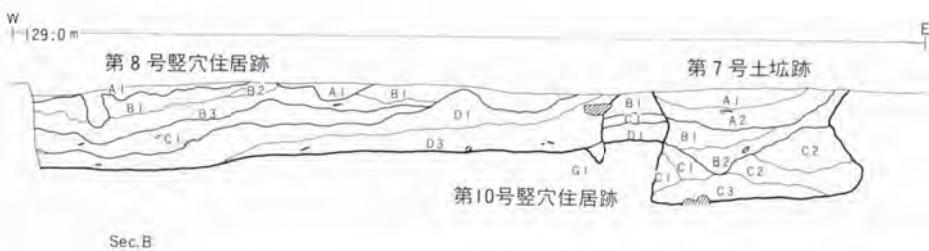
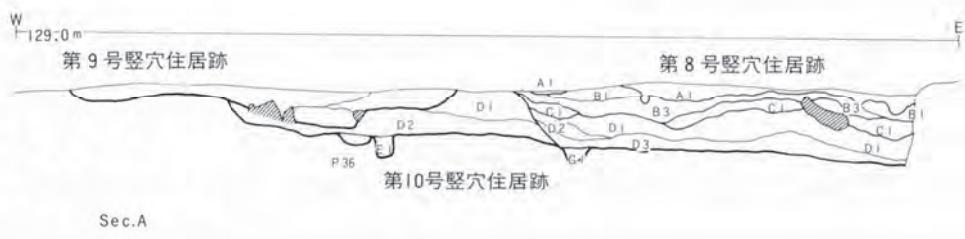


第11図 第4号竪穴住居跡、第9号竪穴住居跡出土遺物(3)



0 1 : 50 2 m

第12図 第8号竪穴住居跡



第13図 白石遺跡第3次調査区土層断面図

第8号竪穴住居跡（第12図～第14図）

重複関係

調査区の南東部に位置し、第10号竪穴住居跡・第11号竪穴住居跡を切る。また、直接重複はないが第12号竪穴住居跡よりは新しい。第9号竪穴住居跡とはかすかに重複するが新旧関係を確認できなかった。柱穴配置から新旧2時期の変遷がみられる。

平面形は不整円形もしくは多角形で、規模は北東～南西で5.1m以上、北西～南東で4.6m以上であり、推定される規模は径5.2m程度と思われる。壁高は0.35～0.45m程の直壁である。

柱穴の配置から推定される主軸方向はN $16^{\circ} 40' W$ である。

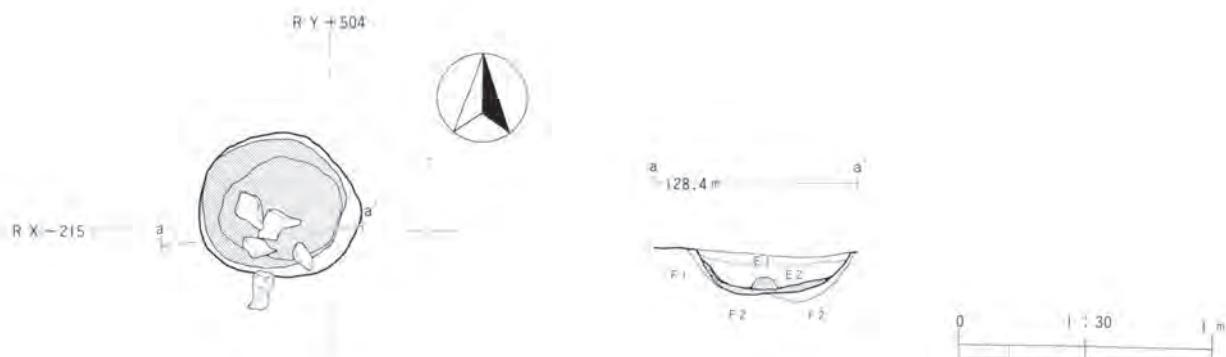
埋土

埋土はA層～E層に大別される。A層は第8号竪穴住居跡・第10号竪穴住居跡・第12号竪穴住居跡が重複し、埋没しきらないで残った凹みに堆積する層で、暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊などを含む。やや柔らかくあまりしまりはない。土器片や炭化物粒、焼土粒を多く含む。B層は暗褐色粘質土を基本土とし褐色土塊を含む。土器片を比較的多く含むほか、炭化物粒や焼土粒を少量含む。B₂層は地山ブロックで、褐色の粘質土を基本土とする。C層は地山に類似する褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多く含む。土器片を少量含む。D層はやや明るい暗褐色粘質土や褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊などを比較的多く含む。D₁層とD₂層は炭化物粒や焼土粒を多く含むほか土器片などの遺物を比較的多く含む。特にD₂層中には比較的大きめの角礫が多く含まれていた。D₃層は他の層に比して遺物や炭化物粒などの混入割合は小さい。E層は炉の埋土で暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を少量含むほか、炭化物粒や焼土粒をやや多く含む。G層は周溝の埋土で、やや暗い暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含むがあまりしまりがない。

柱穴

柱穴は、A、B2時期の変遷がみられる。A期の柱穴は、P₂、P₆、P₇、P₈である。主柱穴の柱間寸法は芯々で、P₂とP₆が1.95m、P₆とP₇が2.0m、P₇とP₈が1.9mとほぼ等間隔になる。おそらく、調査区外にあと2口の柱穴が存在するものと思われ、およそ1.95mの等間隔で6角形の配置となる。また、P₁₀は主軸線上にのる柱穴であるが、規模が小さく、補助的なものであろう。

B期に相当するものは、P₁₅、P₉、P₈である。それぞれA期の柱穴P₂、P₆、P₇に対応している。P₁₅とP₉の柱間寸法も芯々でおよそ1.95mを計る。また、P₈の柱痕跡はa₁層に覆われ床面に達していないのでおそらくB期の方が古いものと思われる。これ以外のピットはP₄、P₅、P₁などのような浅い小規模のものと、P₃などのように中程度のもの、P₁₁のよう



第14図 第8号竪穴住居跡・炉

に大きめのものの3者がある。いずれも床面上で検出したが、第8号住居跡には貼床がないため、これより古い時期のものも含んでいる可能性がある。

周溝は幅0.15m～0.1m、深さ0.1～0.05mでめぐるが、西壁の一部と北壁の一部で途切れる。また、P₂の南東部にあるP₆、P₉付近なども周溝であると思われる。するとここで、周壁と周溝のプランにずれが生じるが、柱穴配置にみられる2時期の変遷に対応するものか、同時に存在した張り出しのようなものかいずれとも判断しかねた。

床面は固いが、地山面をそのまま使用し、貼床は施されない。

炉は南端部に位置する円形の掘込み炉（地床炉）で、径0.6m、深さ0.15mを計る。第10号竪穴住居跡の炉を覆う10-E層堆積後に褐色シルト質土および褐色粘質土による構築土（8K層）をつめ平坦面を作った後に炉を掘り込みF₁層上面を炉床としている。F₁層は焼土層で非常に良く焼けている。F₂層は焼土の浸透層である。

遺物の出土量は比較的多かったが特にD層に多い。第15図1は口縁がわずかに外反し、体部がわずかにふくらむ深鉢であり、磨消技法により口縁部を無文帯とし、体部上半部にJ字形の無文帯を4単位施す。更にJ字文の下部は孤状の無文帯で連結されている。8も同様な器形であるが、体部への施文は地文のみである。2は口縁部の内湾する深鉢で、体部下半は強くすぼまる。口縁部と体部の境界に沈線をめぐらせ、口縁部を無文帯としている。体部は磨消技法によりJ字形の無文帯を6単位施す。

7は口縁部の内湾する深鉢で、口縁部に縄文原体の圧痕文を施す。3～6は地文のみを施すが、3は口縁部の直立するもの、4は口縁部がわずかに外反するものである。5は無節（r）の縄文を地文とするものである。6は撚糸を地文とし、底部に脚のつくものである。

9～11は口縁部の波頂部に鰐状隆帯を施し、12、24は体部文様帶に鰐状隆帯を施すものである。13～19、25～28は連続刺突文を施すものである。20～22、30～42は磨消技法により施文されるものである。29は沈線により施文されるが沈線間は磨消されない。

43、45、46は口縁部に隆起線を施し、体部に地文のみを施すものである。47、48、54、59は撚糸文を地文とするもの、55は条線文のような施文があるもの、57は単節斜縄文（R-L）のみを施文するものである。58は無文の土器である。

49～53、56はミニチュア土器である。

45、60～64は隆沈線文を施文するもので大木8b式に伴う。65は沈線文を施文するもので縄文前期に伴うものか。66、67は胎土に植物纖維を含む。66は口縁部に不整撚糸文を施す。69は地文のみの尖底部である。いずれも前期初頭に伴うものである。

68～72は石鏃で、いずれも無柄の三角鏃である。

73は小形の石器で、削器か。76は下辺から側縁を使用する削器である。77は下辺に搔器的刃部を、上辺に削器的刃部をもつものである。74、75、78は刃部の角度が鈍く、搔器様であるもの的一般の搔器とは逆の面を調整している。74は第17号竪穴住居跡出土の剥片接合資料に酷似する石材（鉄石英）を用いている。

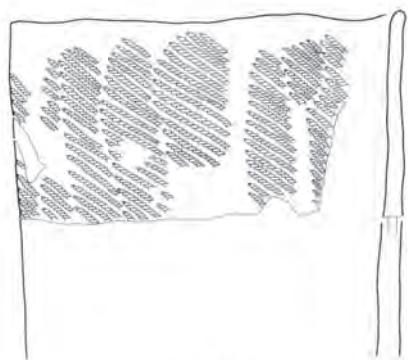
79～81は使用痕のある剥片である。82、83はいずれも下半を欠失する削器であるが調整は粗雑である。

87～92は敲打磨石類である。87は梢円形の自然礫を使用するもので側縁に敲打磨面を有し、

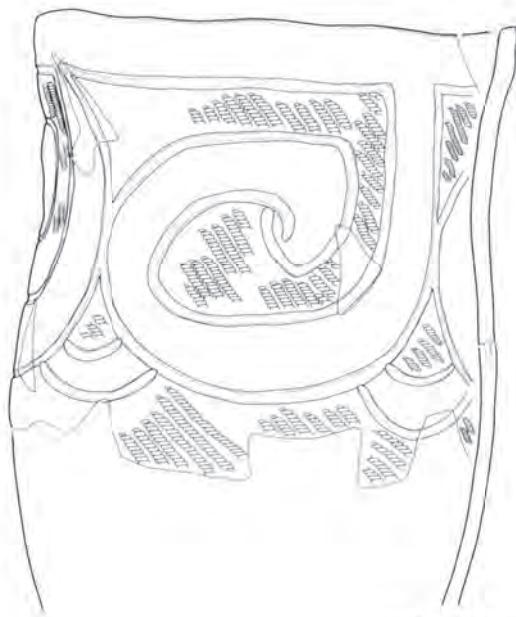
周溝

土器

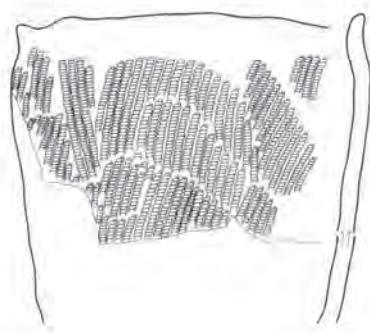
石器



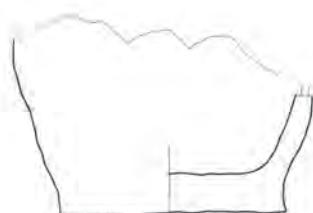
3(埋土)



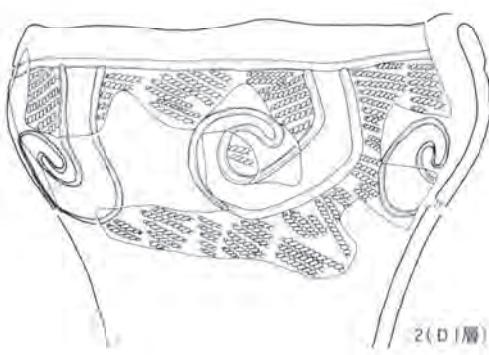
1(D3層、Pot?)



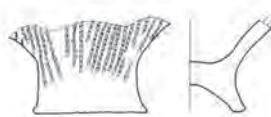
4(埋土)



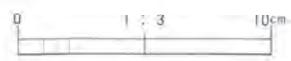
5(B-I層)



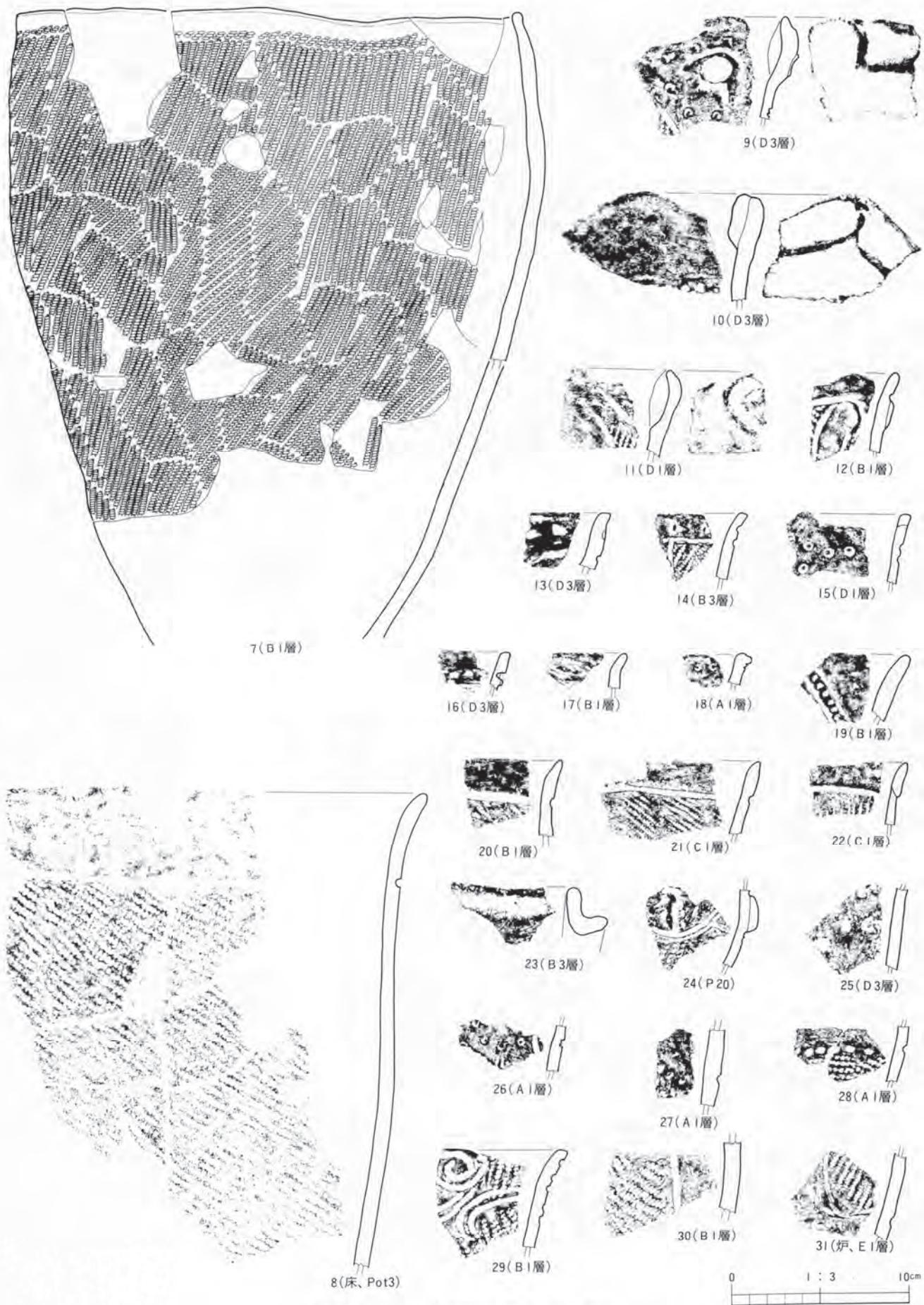
2(D1層)



6(C1層)



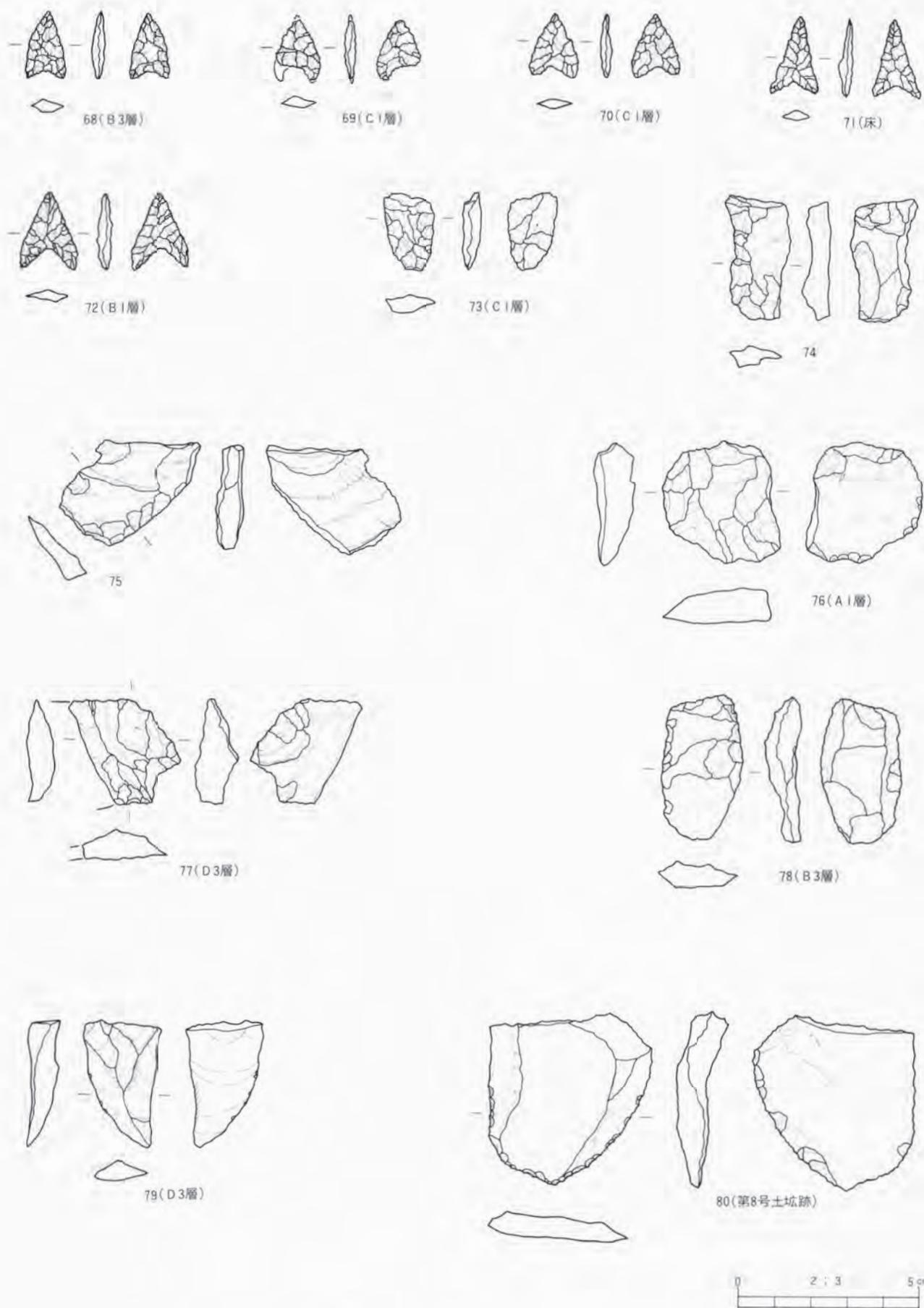
第15図 第8号竪穴住居跡出土遺物(1)



第16図 第8号竪穴住居跡出土遺物(2)



第17図 第8号竪穴住居跡出土遺物(3)



第18図 第8号竪穴住居跡出土遺物(4)

長軸方向の両端部と側面を敲打する。両端部を中心に敲打時の剥離がみられる。88はやや厚味のある自然礫を使用するもので、下端部の敲打磨面は不整形を呈する。側縁部にも敲打痕や敲打磨面がみられる。89、90は扁平な自然礫の長軸方向の側縁に敲打磨面を有すが、90にはこれに隣接したところに敲打痕が伴う。91はだ円形の自然礫の両端部を使用するが、上下両端とも4面に面取りされたような状態に使用される。上端には使用時の剥離がみられる。92は扁平な自然円礫の円縁を使用するもので、やはりいくつかの面に分けたように使用されるが、敲打痕が伴っている。

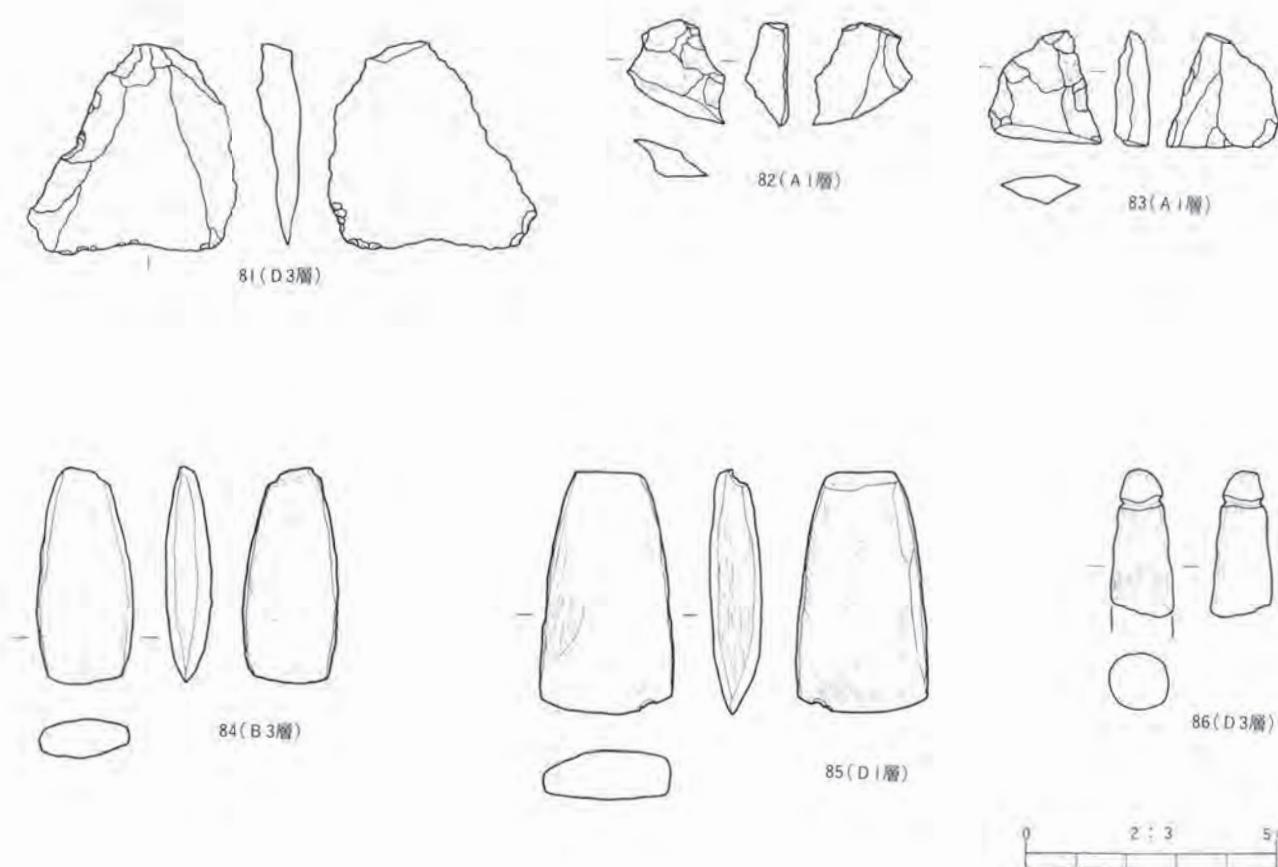
93～95は凹石である。いずれも両面に凹みを有し、よく使い込まれている。93は一方の面に磨面が伴う。95は石皿などとしても使用されたものか敲打痕や擦痕がみられる。

96～98は石皿である。96、97はやや幅の広い溝状の凹みを有している。98は皿状を呈するもので、機能面は平滑で良く使い込まれている。また、裏面もほぼ全域を擦っている。

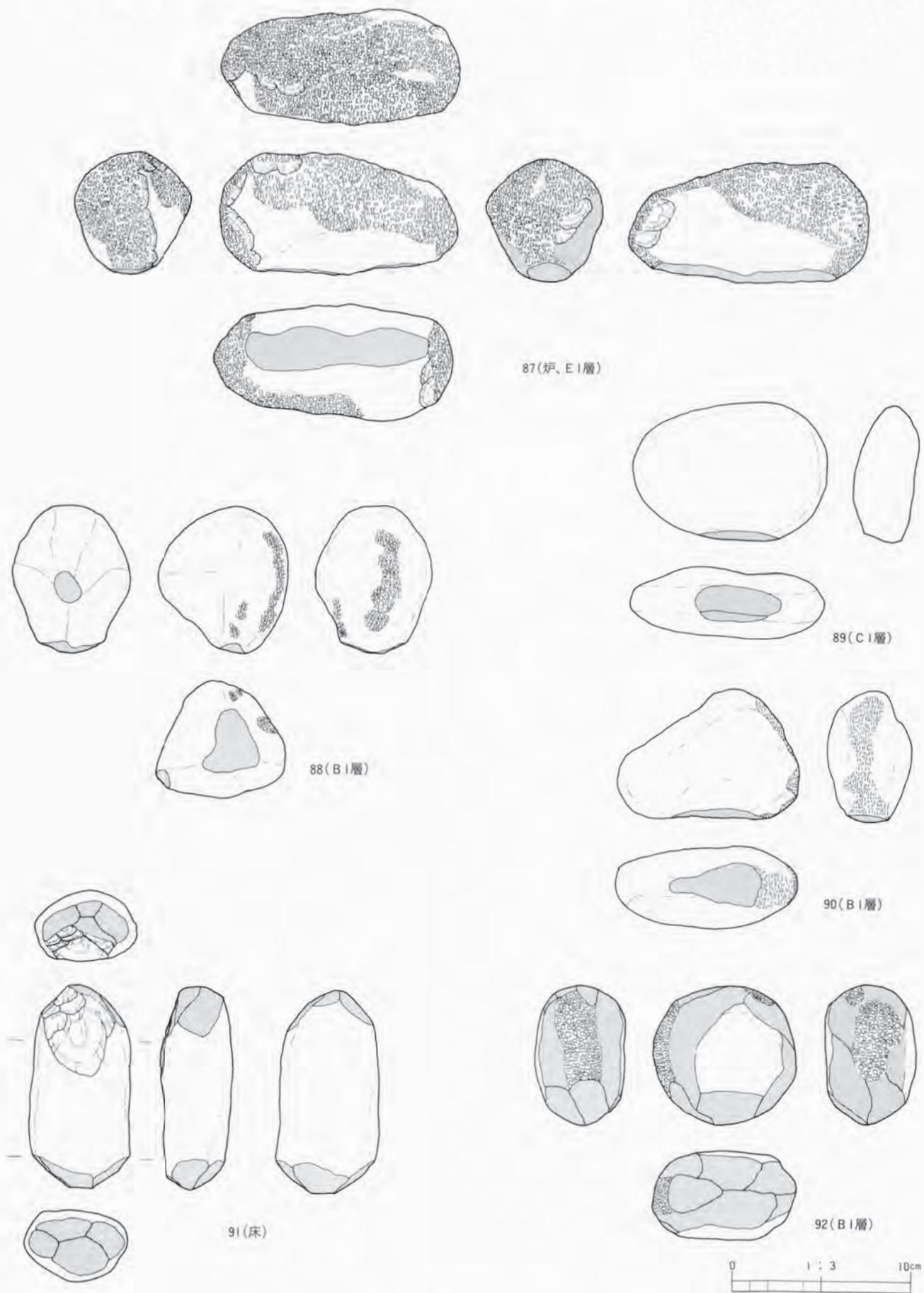
石製品

84、85は小形の磨製石斧で非常に丁寧に整形されている。86は小形の石棒頭部で、端部付近に沈線がめぐる。

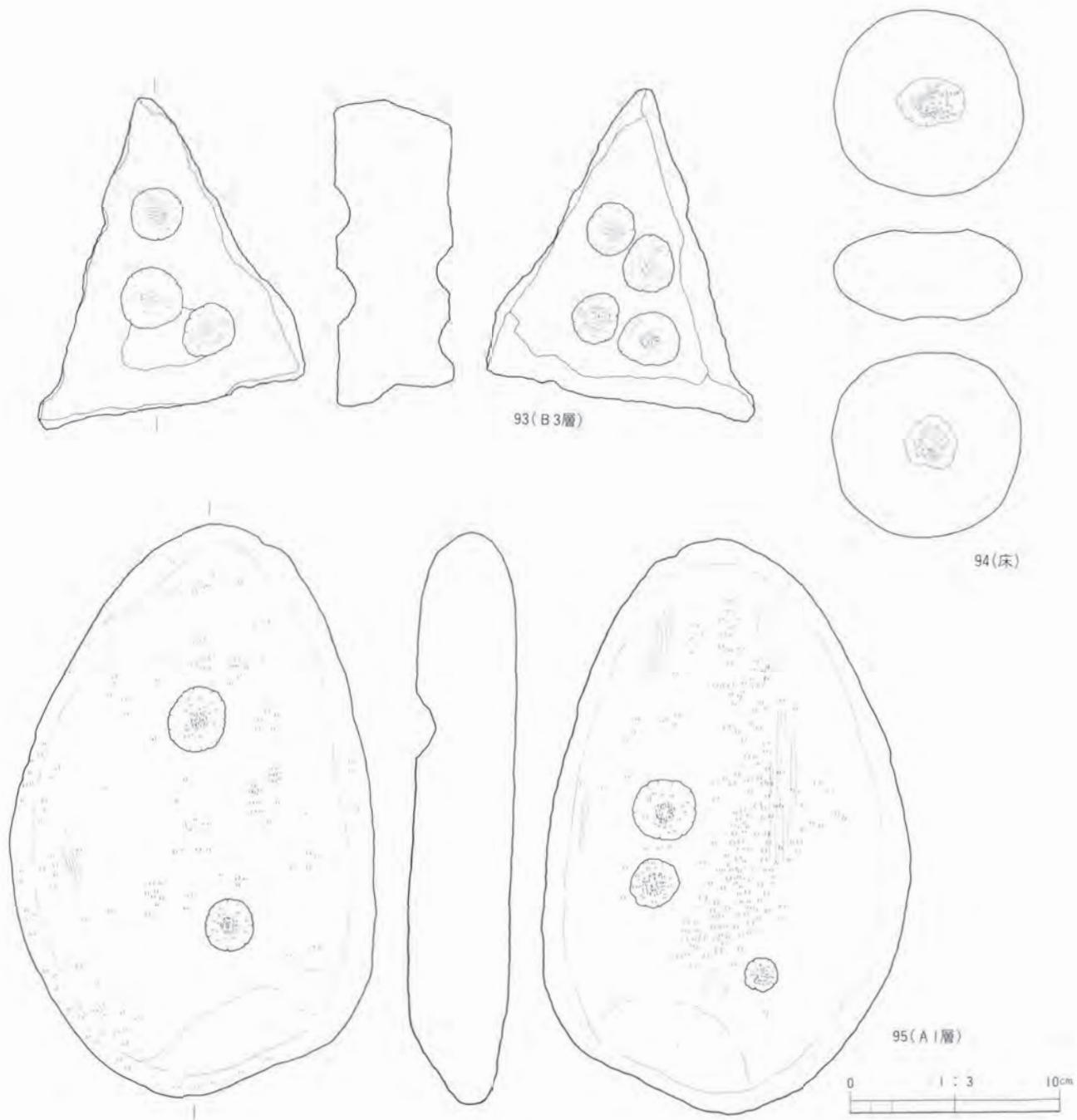
また、図示できなかったが、B₂層中よりコハク塊が出土している。非常にもらくなってしまっており、調査中に粉々に砕けてしまったため加工痕等は確認できていない。



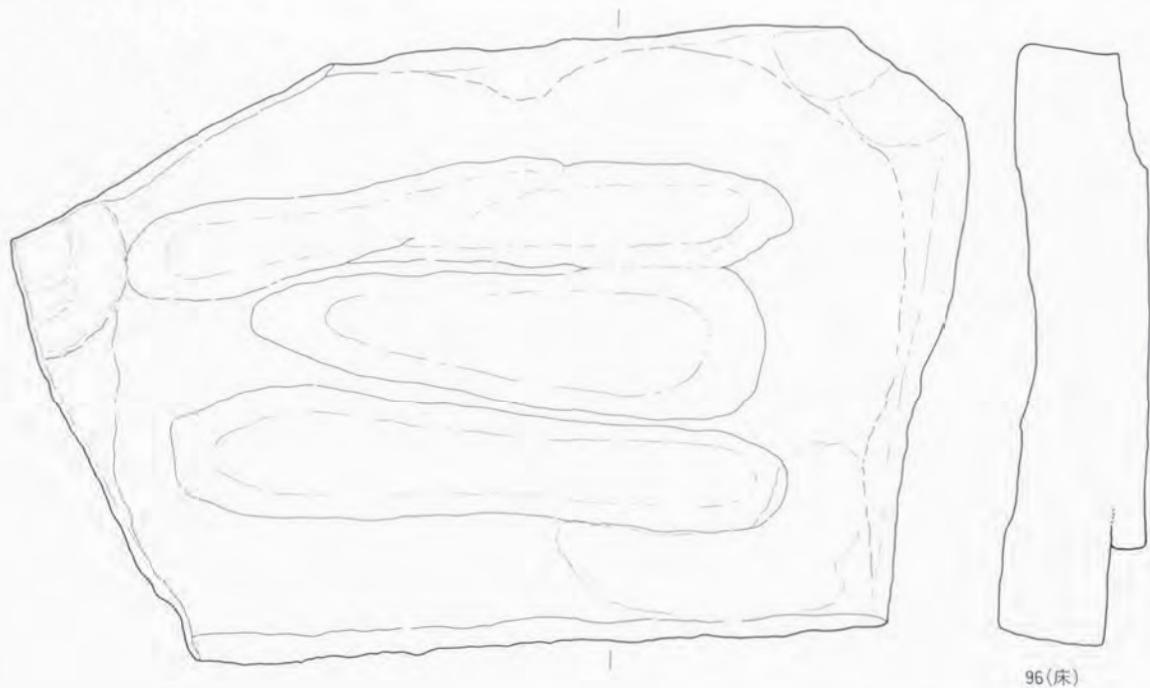
第19図 第8号竪穴住居跡出土遺物(5)



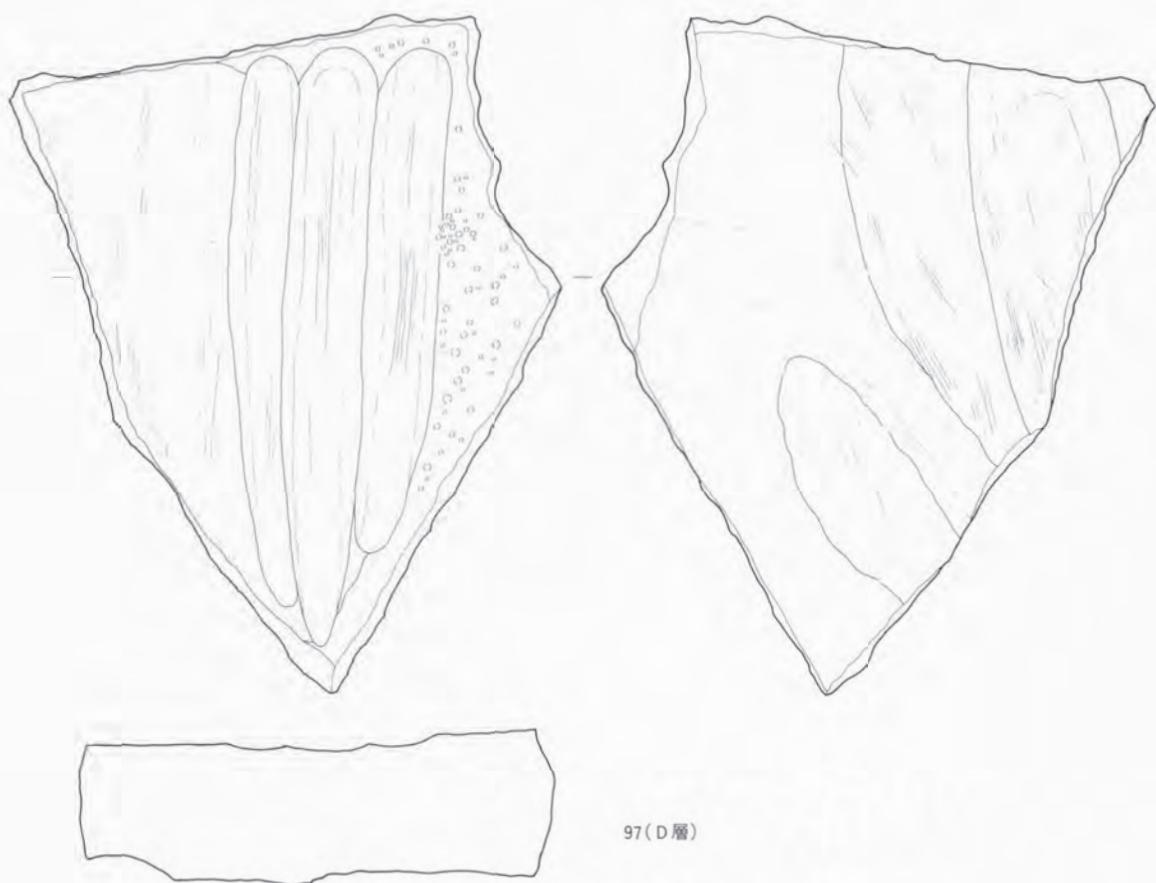
第20図 第8号竪穴住居跡出土遺物(6)



第21図 第8号竪穴住居跡出土遺物(7)



96(床)



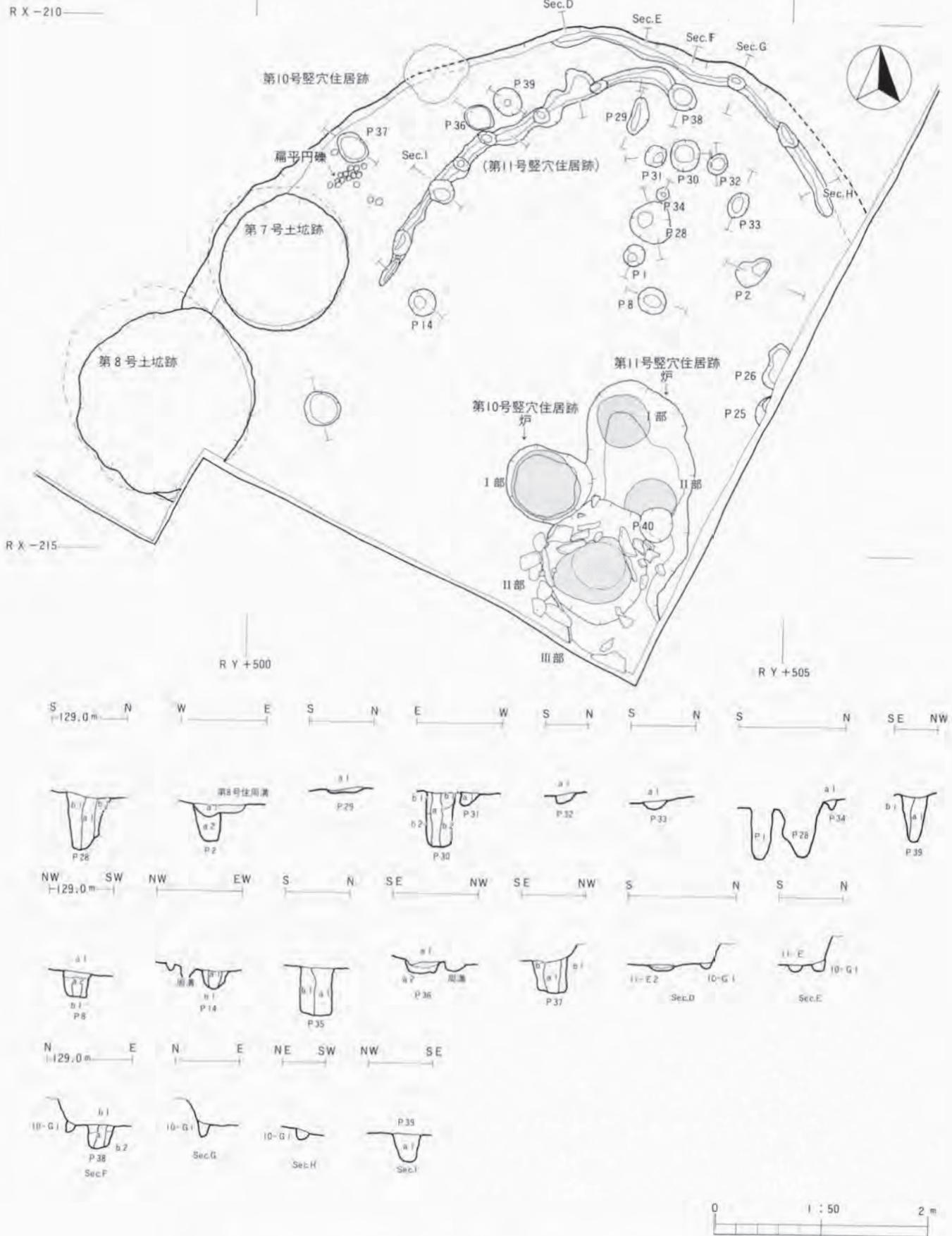
97(D層)



第22図 第8号竪穴住居跡出土遺物(8)



第23図 第8号竪穴住居跡出土遺物(9)



第24図 第10号竪穴住居跡、第11号竪穴住居跡、第7号土塙跡、第8号土塙跡

第10号竪穴住居跡

重複関係

調査区の南東部に位置し、第8号竪穴住居跡・第9号竪穴住居跡・第7号土塙跡・第8号土塙跡に切られ、第11号竪穴住居跡・第12号竪穴住居跡を切る。

平面形は不整円形もしくは多角形で、規模は東西で6.4m以上、南北で6.2m以上である。

埋土はA層～D層に大別される。A層は前述した。B層は暗褐色粘質土を基本土とし褐色土塊などを多く含む。C層はやや赤味のある褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。D層はやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含むが、B層がより混入割合が大きい。E層は炉の埋土で、やや明るい褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊のほか、焼土粒や炭化物粒などを含み、あまりしまりがない。G層は周溝の埋土で、やや暗い暗褐色土を基本土とするあまりしまりがない。

周溝

周溝は北東部の壁下に検出したのみで全周はしない。幅は0.1m以下で、深さは0.15m程度である。

床面は平坦で固いが貼床はなく、地山層をそのまま使用している。

柱穴

柱穴は壁寄りにあるP₁～P₃に柱痕跡があり主柱穴に相当する。また、P₁は柱痕跡を確認できなかったが主柱穴であろう。柱間寸法は各々芯々で、P₁とP₂が1.5m、P₂とP₃が1.6m、P₃とP₁が1.8mとなる。P₁は第8号住居跡の周溝に切られている。また、第8号竪穴住居跡や第11号竪穴住居跡との重複部分の柱穴については明確な共伴関係はつかんでいない。

複式炉

炉は石組複式炉で、住居跡の南端部に位置する。炉の各部をI部～III部として説明する。

I部は不整円形の掘込炉で、径0.8m、床面から炉床までの深さ0.15mを計る。10-F1層は焼土層であり、層厚は4mほどで良く焼けてしまっている。

II部は石組炉で、開口部径は1.1m×0.8mの不整だ円形となる。床面から炉床まで0.4mを計る。10-F2層は焼土層で、層厚が4mほどで良く焼けてしまっている。

III部は、床面から0.25mほどの深さを計る掘込みで、底面は平坦であるが焼成は受けていない。

炉の構築状況であるが、第11号竪穴住居跡床直上に10-K₁層をつめ平坦にした後、各部位の規模や深さを決めながら掘り下げる（掘り方）。次にII部の炉石を組みながら10-K₁層～10-K₂層の順で埋め戻し、10-F層の上面を炉床としている。

遺物の出土量は少なく大半が埋土中より出土したものである。また、P₁付近のほぼ床面上に長軸径6.6m以下、重量160kg以下の扁平円礫が20個ほどまとめて出土しており特筆される（後述）。

土器

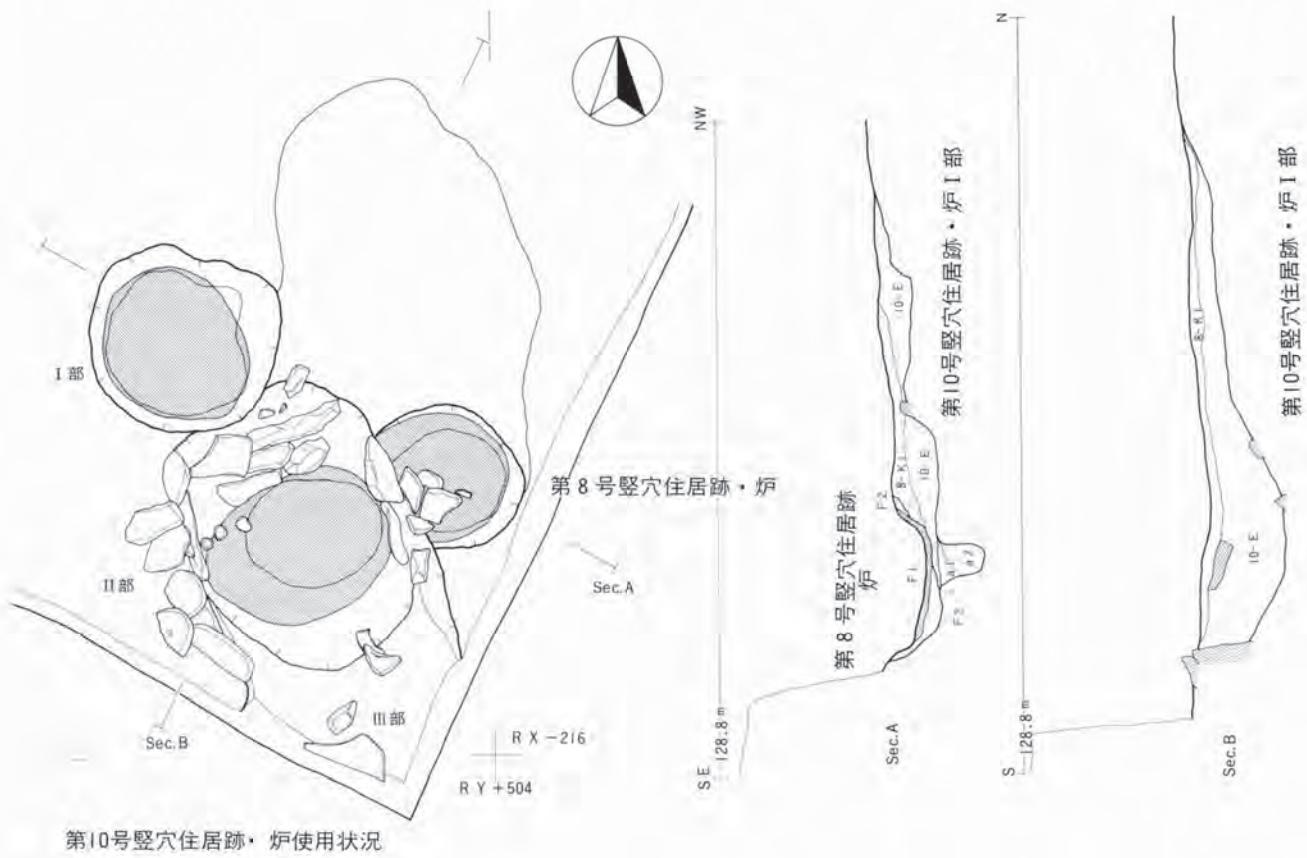
第27図3、5は磨消技法により施文される。6は竹管による連続刺突文を施す。他のものは地文のみであるが、17は条線文を施し、12は撲糸文を施す。

石器

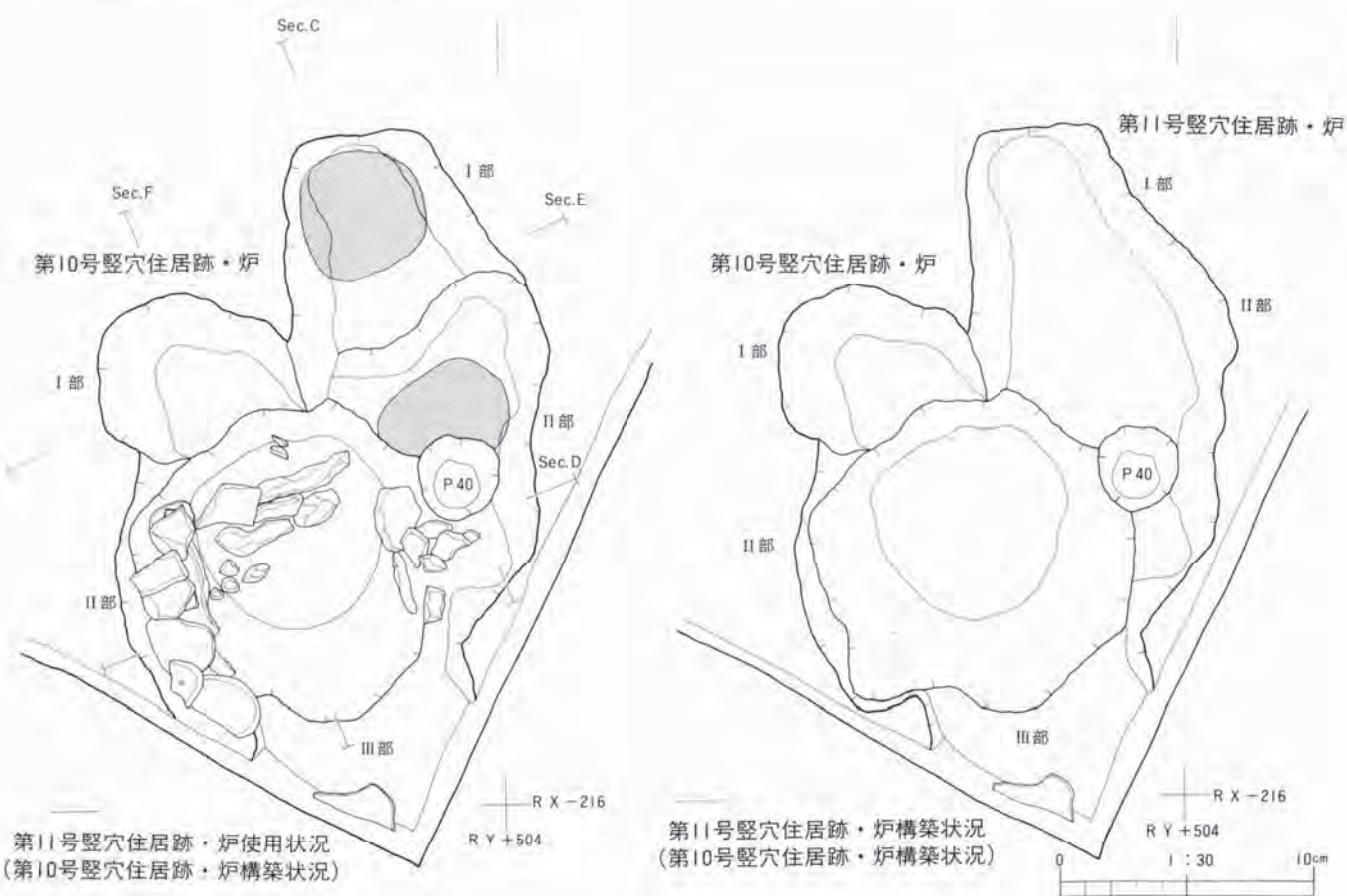
第28図26～29は石鏃である。26、28は三角鏃である。27は木葉形を呈するが基部を欠失する。29は剥片鏃で、裏面に大きく主要剥離面を残す。

30は縦形の石匙で、両側縁に片面調整の刃部を有する。尖端部がやや細くなるが刺突具ではないようである。裏面に大きく主要剥離面を残す。

32は断面三角形のブレード状剥片を用いる削器で、側縁を刃部として調整する。打面と主要剥離面を残す。33は周縁を両面調整する削器だが両側縁を刃部としている。



第10号竪穴住居跡・炉使用状況



第25図 第10号竪穴住居跡・炉、第11号竪穴住居跡炉(I)

34はピエス・エスキューで両極打撃により上下両辺に階段状剥離などがみられる。

35、36は不整形を呈し、鈍い角度の刃部を有する撞器である。

第11図34、第27図23は敲打磨石類で、だ円形を呈する自然円礫の両側縁に敲打磨面がみられる。

24、25は敲石であるが、24は、だ円形の自然礫を用い一方の端部を敲打している。25は円礫のはば全周を敲打している。

14は打製石斧で、両面を大きな剥離で調整する。一方の側縁部に自然面を残すが、反対の側縁は比較的密に調整されており刃部となっている。上下両端も使用された可能性はあるが、調整は側縁部ほど密ではない。

第11号竪穴住居跡

調査区南東部に位置し、第8号竪穴住居跡・第9号竪穴住居跡・第10号竪穴住居跡に切られる。第12号竪穴住居跡とも重複するが新旧関係は不明である。

調査区内では第10号住居跡内に収まり、床面も同一の面であるため保存状態が極めて悪く、周溝と炉および柱穴を確認したのみである。

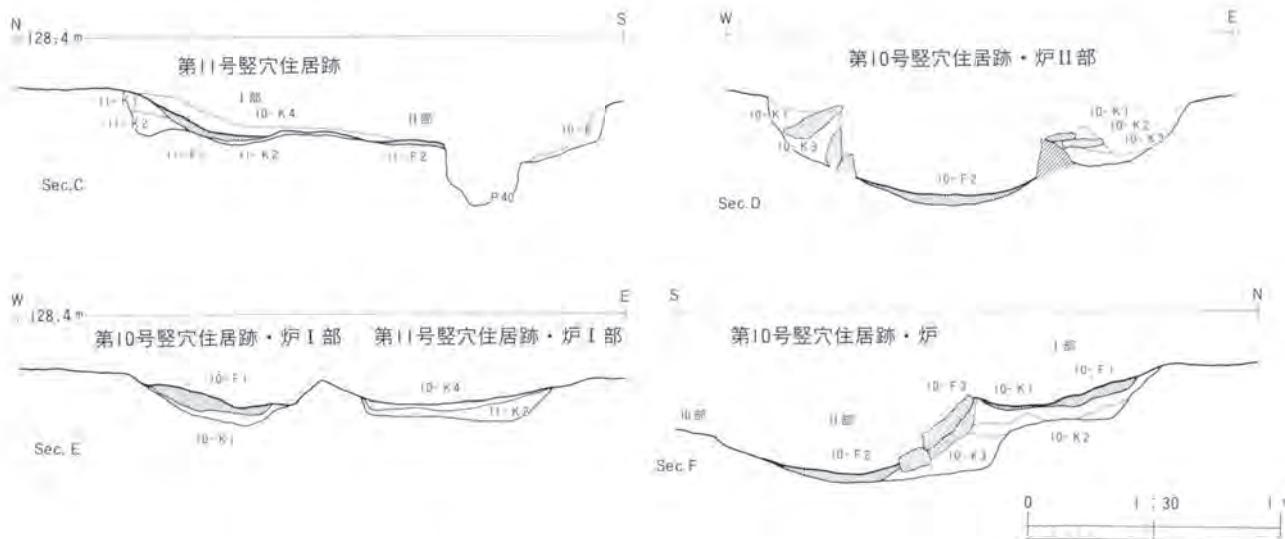
平面形は南北方向に長いだ円形か、多角形を呈する。主軸方向は、炉のプランではN 6°30' W、柱穴配置からN 5° 30' Wとなる。

埋土は炉を覆う10-K₁層（構築層）と周溝埋土の11-E層のみである。

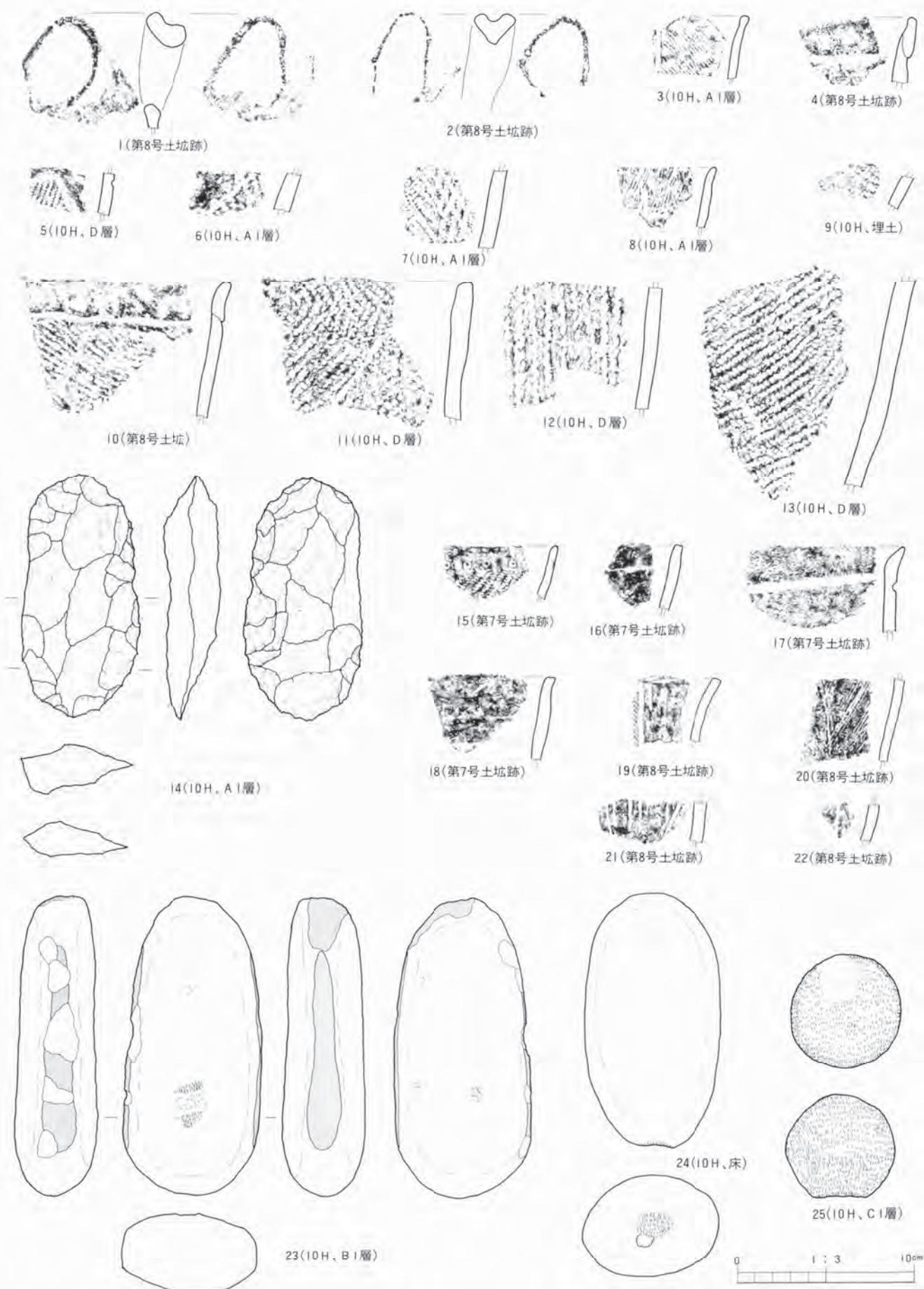
床面は第10号竪穴住居跡と同一である。

周溝 周溝は北辺にわずかに孤状にあるのみで全周しない。幅はほぼ0.1m~0.2m、深さ0.05m~0.15mほどで、しまりのない暗褐土（E層）が堆積している。

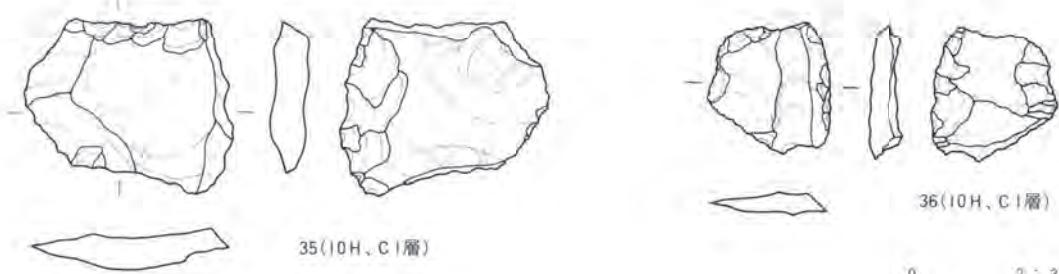
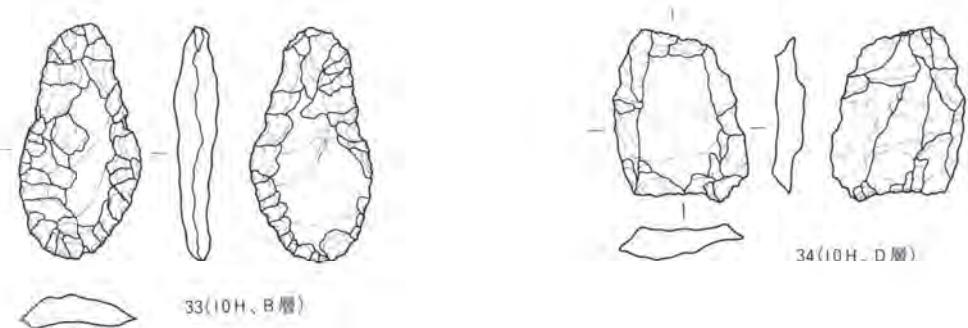
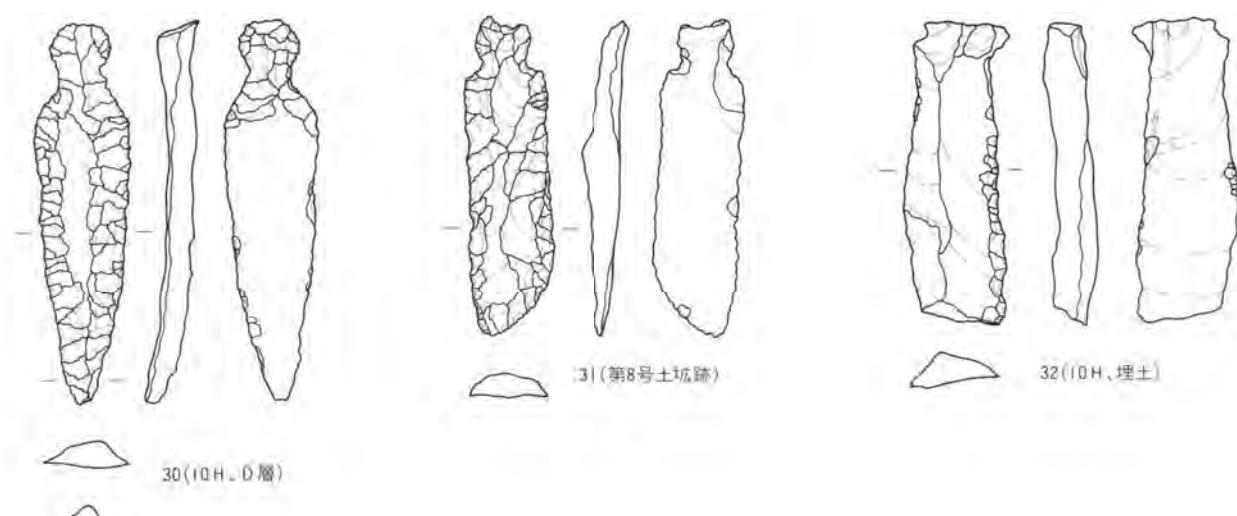
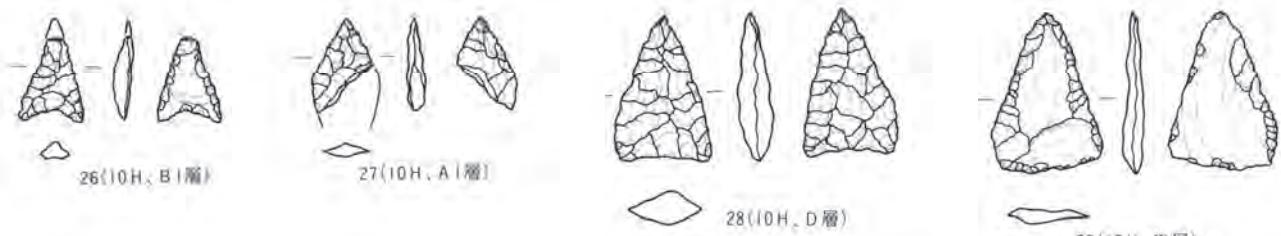
柱穴 柱穴はP₁、P₂、P₃、P₄が主柱穴に相当するが、P₃のみは柱痕跡を確認していない。柱間寸法は各々芯々で2.3mほどになる。また、P₃の内側にP₅を検出したが調査中の不注意に



第26図 第10号竪穴住居跡、第11号竪穴住居跡・炉(2)



第27図 第10号竪穴住居跡、第7号土塙跡、第8号土塙出土遺物(I)



0 2 : 3 5 cm

第28図 第10号竪穴住居跡、第7号土塙跡、第8号土塙跡出土遺物(2)

より土層断面の観察を行っていない。深さや径から柱穴と思われるものの、どの遺溝に伴うかは不明である。

炉は複式炉であるが I 部、II 部とともに地床炉で第10号竪穴住居跡の構築土10-K₁層に覆われていた。I 部は東西0.95m、南北0.85mで台形を呈し、径0.5mほどの炉床をもつ。11-F₁層は焼土層で、良く焼けている。II 部は第10号竪穴住居跡の炉に切られるため不明瞭であるが東西1.0m以上、南北1.2m程度の不整形を呈し、径0.5mほどの炉床をもつ。11-F₂層は焼土層で11-F₁層よりやや良く焼けてしまっている。

複式炉

11-K₁層は構築土層であるが、一担不整だ円形の掘り方を掘った後に11-K₂層をつめて炉をつくっている。炉石の抜きとり穴は無いため当初から地床炉として構築されたものであろう。

遺物は炉や周溝などから縄文土器の細片などが出土したのみで、図示できるものはなかった。

第7号土塙跡

調査区南端部に位置し、第10号竪穴住居跡を切る。

平面形はほぼ円形を呈し、開口部径1.3m、頸部径1.05m、底部径1.35m、深さ0.75mを計る。断面形はフラスコ状を呈する。埋土はA層、B層、C層に大別される。A層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などを含む。やや固いがしまり具合は中程度である。A₁層は比較的混入土を多く含む。B層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などをやや多く含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。B₁層はB₂層よりやや明るく、混入土を多く含んでいる。C層はやや明るい暗褐色粘質土またはやや暗い褐色粘質土を基本土とし混入土は少ない。やや柔らかくしまりがない。C₁層とC₂層は類似するが、C₂層はこれらよりやや明るい。

遺物は埋土中より出土した若干の縄文土器片がある。第27図15は竹管による連続刺突文を施す。16~18は磨消技法により施文されるがいずれも口縁部のみの破片であり体部の文様は不明である。

第8号土塙跡

調査区南端部に位置し、第7号土塙跡に隣接している。第10号竪穴住居跡を切る。

平面形はほぼ円形を呈し、開口部径1.6m、頸部径1.4m、底部径1.9m、深さ0.8mを計り、第7号土塙跡より大きい。断面形はやはりフラスコ状を呈する。埋土はA層、B層、C層、D層に大別される。A層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などを含む。固いがしまり具合は中程度である。A₁層はA₂層より明るい。B層は暗褐色~褐色の粘質土を基本土とし、混入土を多く含む。やや固いがしまりはない。B₁層は明褐色シルト質土などを多く含む。B₂層は黒色~暗褐色土塊を多く含む。B₃層は暗褐色土塊などを含むが他の層より混入割合は少ない。C層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし黄褐色土塊などを多く含む。下層ほど柔らかくしまりがない。C₁層は混入土も少なく全体的に暗い。D層は黄褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊をわずかに含む。柔らかくしまりがない。

遺物は埋土中から縄文土器片などが出土しているが少ない。第27図1、2は把手の破片で、ひねりが加えられたアーチ状を呈する。4、19は磨消し技法により施文される。20は条線文を

施文する。21、22は沈線文または条線文を施文する。第18図80は使用痕のある剥片である。

第12号竪穴住居跡

重複関係

調査区北東部に位置し、第1号竪穴住居跡・第10号竪穴住居跡に切られる。

平面形、規模は不明であるが、壁はややゆるやかに立ち上がり、深さ0.25mを計る。

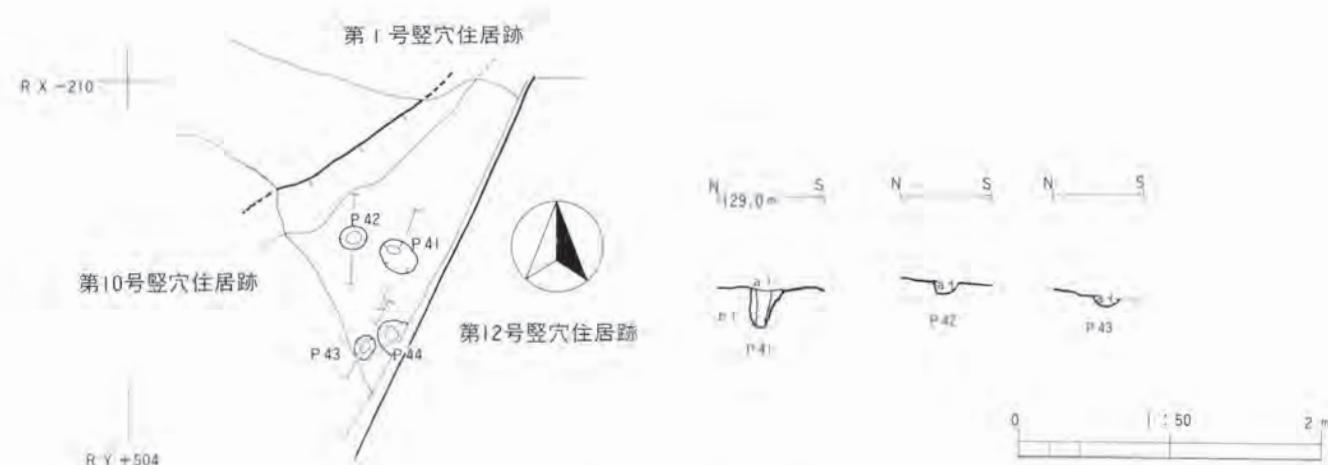
埋土はB層、C層に大別される。B層は暗褐色粘質土を基本土とし褐色土塊などをわずかに含む。C層は褐色粘質土を基本土とし暗褐色土塊などをわずかに含む。

床は平坦であり固くはない。貼床は認められない。

柱穴

柱穴はP₄₁に柱痕跡を確認した。P₄₂～P₄₄は皿状の小ビットである。

遺物は埋土中より縄文土器片が少量出土したが図示できるものはない。



第29図 第12号竪穴住居跡

第13号竪穴住居跡

第3次調査区南西隅に位置する。炉、柱穴、周溝を検出したが、平面形、重複関係は不明である。

重複関係

埋土はA層が炉の埋土で、やや赤味のある褐色～暗褐色粘質土を基本土とし、焼土塊などを多く含む。固いがしまり具合は中程度である。B層は掘り込みの埋土で、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、焼土塊などを多く含む。固いがしまり具合は中程度である。

周溝は、北辺に弧状に残る。幅は7cmほど、深さは5cmほどであり、しまりのない褐色粘質土が堆積する。

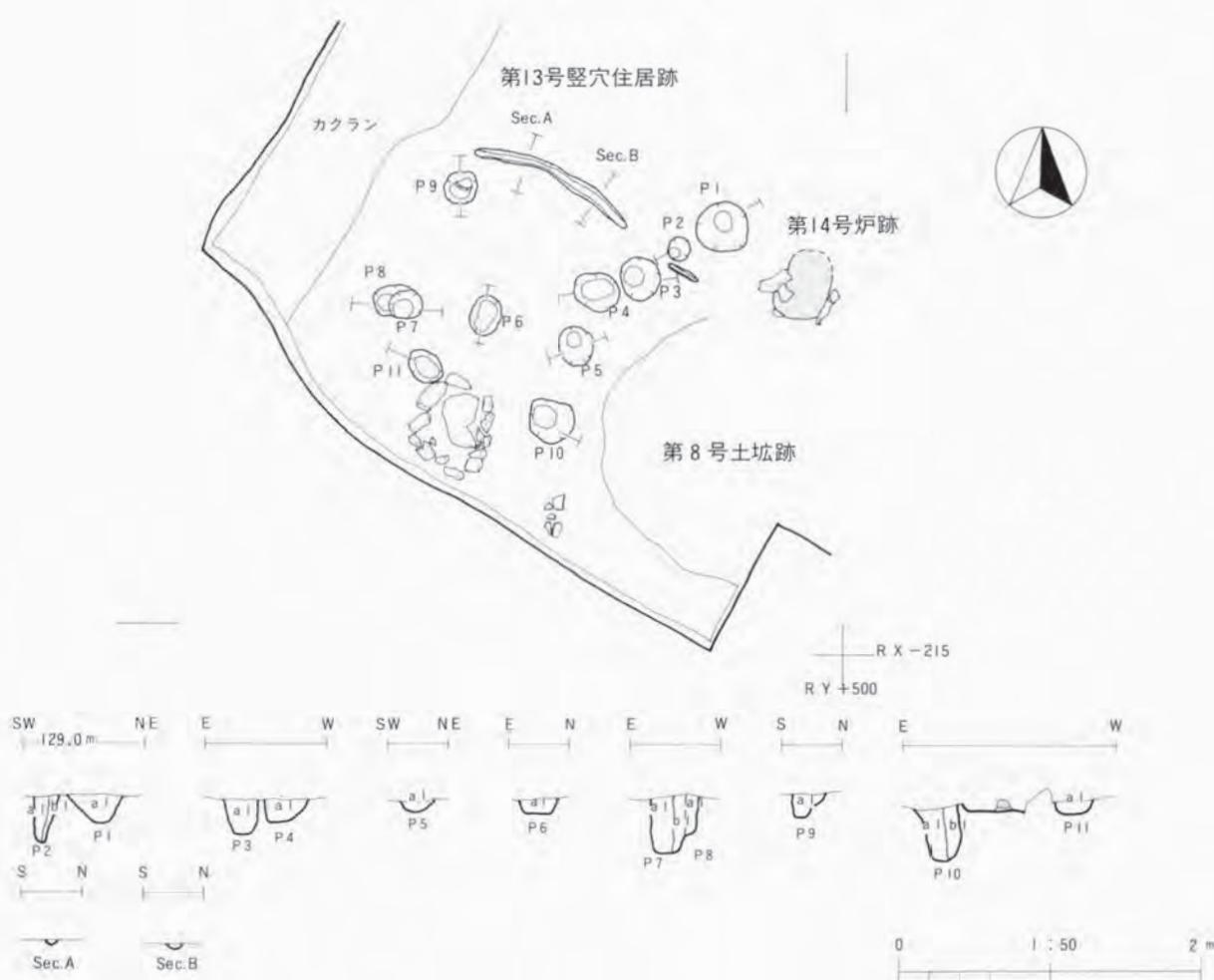
柱穴は、P₂、P₇、P₁₀に柱痕跡がある。他のものは小ビットである。P₁、P₂は周溝外にあり、第14号炉跡に伴うと思われるが、他のものはどちらに伴うものか確定はできない。

柱穴

炉は石組炉で、東西0.55m、南北0.7mを計り、径0.3mほどの不整形の炉床がある。炉の東に掘り込みがあるものの、これの性格や主軸方向は不明である。また、炉の上部には（A層上面）扁平角礫がある。

石組炉

F₁層は焼土層で良く焼けている。



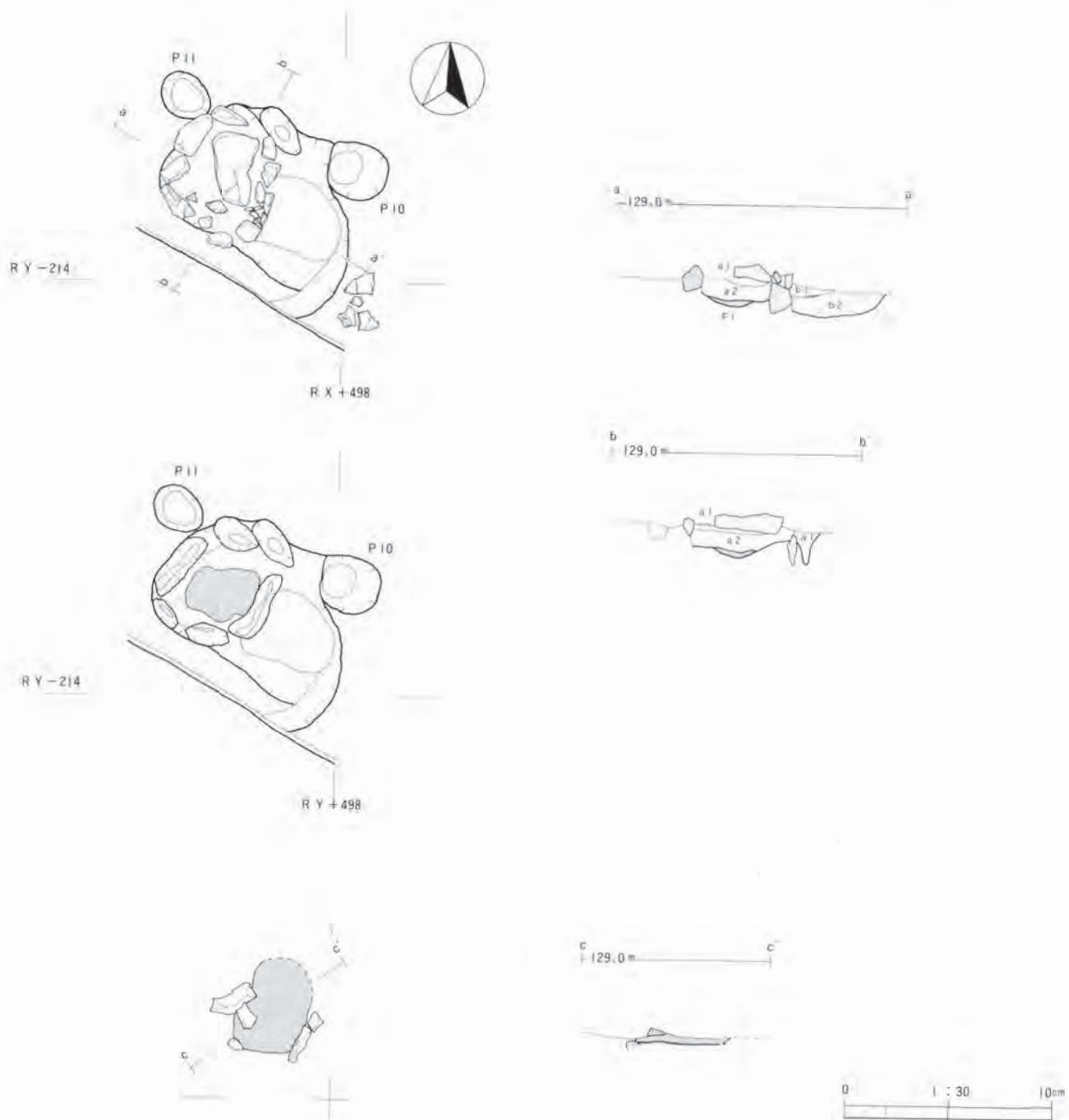
第30図 第13号竪穴住居跡、第14号炉跡

第14号炉跡

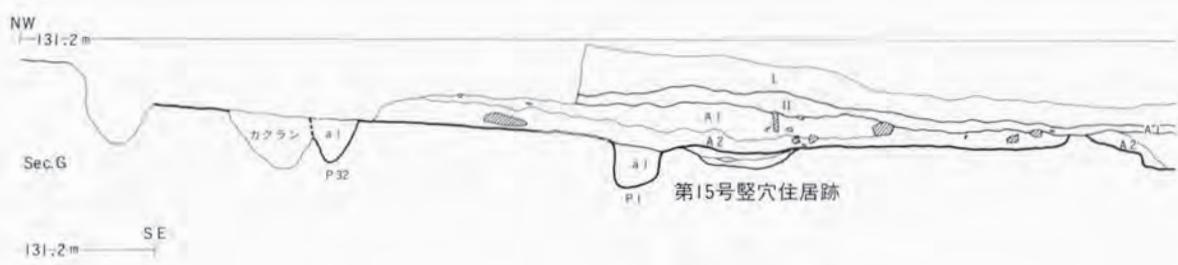
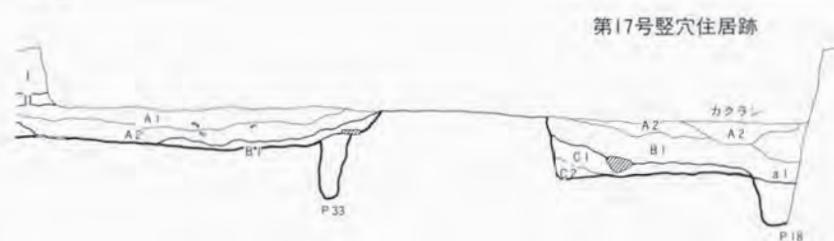
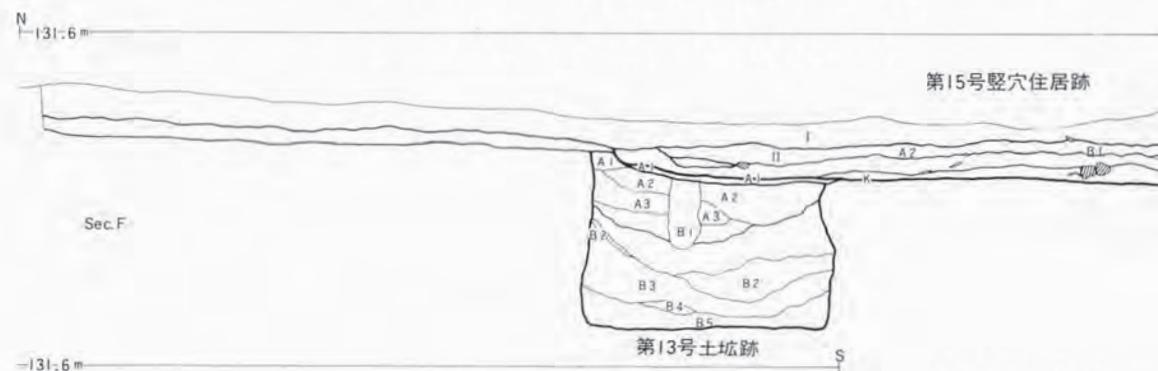
調査区南西部に位置し、第10号竪穴住居跡B層上面に検出した。第13号竪穴住居跡に隣接している。

東西0.3m、南北0.45mの範囲に焼土の広がりがあり、部分的に炉石として使われた角礫が伴う。焼土層は厚さ5cmほどで良く焼けている。

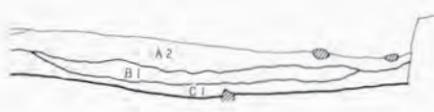
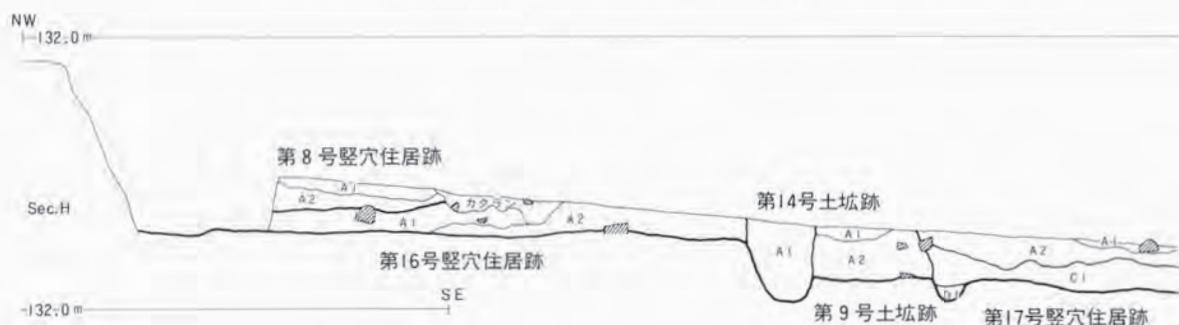
柱穴は、P₁、P₂が第14号炉跡に伴う可能性を指摘できるが、他のものは前述したように不明である。



第31図 第13号竪穴住居跡・炉、第14号炉跡

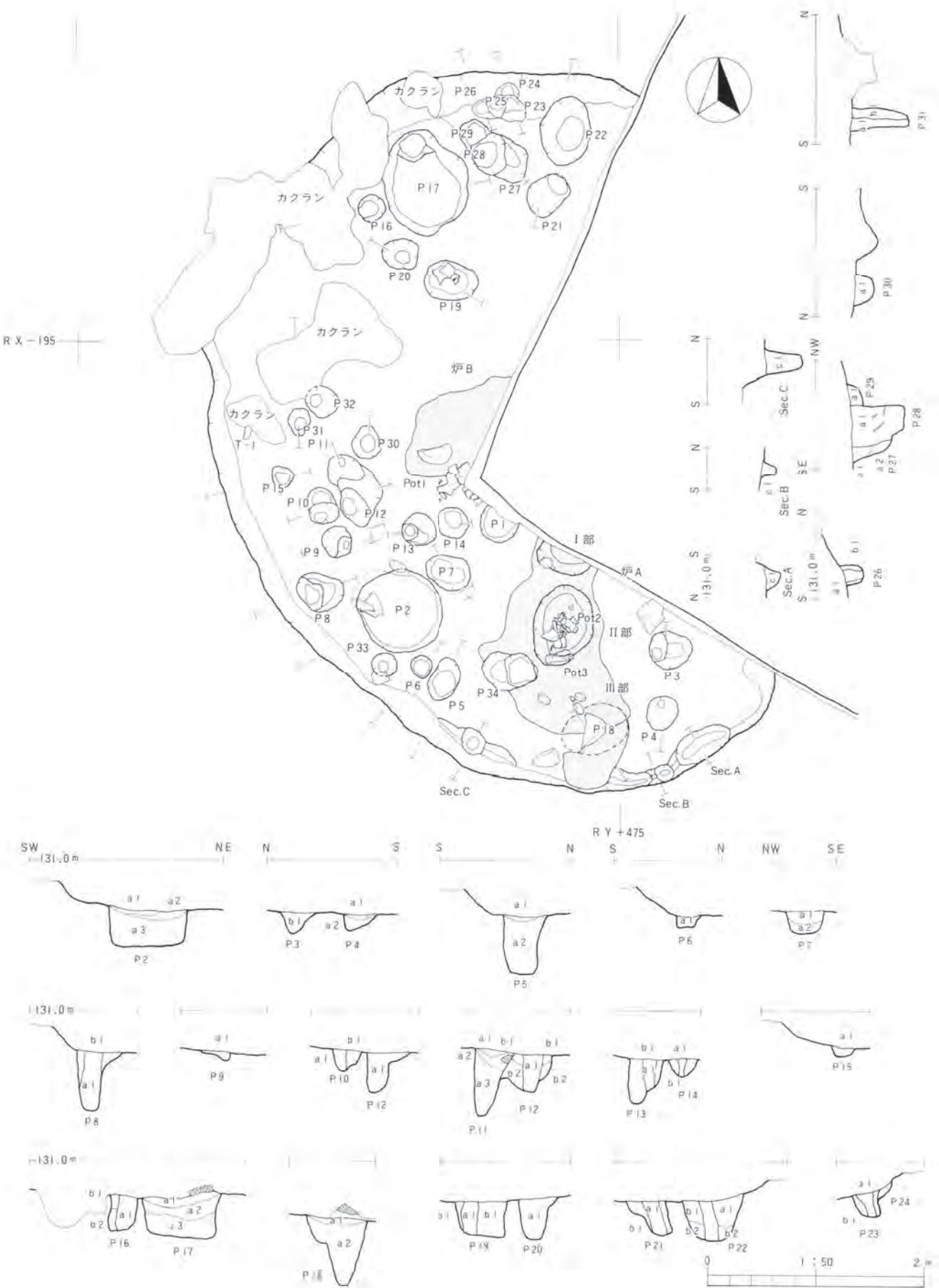


第19号竪穴住居跡



0 1 : 50 2 m

第32図 白石遺跡第4次調査区土層断面図(1)



第33図 第15号竪穴住居跡

第15号竪穴住居跡

全体の $\frac{1}{2}$ 程度が調査区外であるが引き続き来年度に調査を予定しているため、本年度の不足分や誤りは来年度に追加修正する。

第4次調査区中央部に位置し第17号竪穴住居跡・第19号竪穴住居跡・第13号土塙跡を切る。
また、北西部は攪乱により著しく破壊されている。

平面形は不整円形を呈し、規模は南北で6.7m、東西で4.6m以上を計る。壁高は0.15mでややゆるやかに立ち上がる。

埋土はA層、B層、C層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。A₁層はA₂層より混入土を多く含む。固さは中程度でややしまりがない。B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。やや柔らかくしまりがない。C層は周溝の埋土で、暗褐色粘質土を基本土とし混入土は少ない。柔らかくしまりがない。

床面はやや凹凸があるものの比較的固い。第13号土塙跡との重複部分に貼床がみられる。貼床（K層）はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊を多く含む。やや固いがしまり具合は中程度である。

周溝は南壁にわずかにみられる。幅は0.15m～0.3m、深さ0.15mを計る。所々をピット状に掘り込んでいる。

柱穴は、P₁、P₂、P₃、P₄、P₅、P₆が主柱穴に相当する。いずれも柱痕跡があるが、P₁は土層断面図に表われていない。また、P₂は他の柱痕跡同様にしまりのない暗褐色土が堆積するが掘り方の埋土が判然としなかった。柱間寸法は各々芯々で、P₁とP₂が2.0m、P₂とP₃が1.5m、P₃とP₄が1.6m、P₄とP₅が1.85m、P₅とP₆が1.8mを計る。これ以外に柱痕跡があるものや柱穴の可能性があるものは、P₇～P₁₀、P₁₁、P₁₂、P₁₃がある。

P₁は南西部にあり、開口部径0.7m、深さ0.35mを計る。埋土は3層に細分される。a₁層とa₂層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含むが、a₃層のほうが圧倒的に混入土を多く含む。a₂層は黒色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊や暗褐色土塊などをやや多く含む。また炭化物粒も多く含む。全層とも柔らかくしまりがない。P₂は北西部にあるが、P₁に類似している。開口部径0.7m、深さ0.45mを計る。埋土は3層に細分される。いずれも褐色粘質土を基本土とし、固さは中程度でややしまりがない。a₁層とa₂層に焼土粒を少量含む。

P₃、P₄、P₅、P₆、P₁₀、P₁₃は小ピットである。

炉は2基あり、炉Aは斜位土器埋設複式炉で、南壁寄りに位置する。I部は地床炉で東西0.5mを計る。F₁層上面が炉床となる。F₁層は厚さ3m程度の焼土層で良く焼けしまっている。II部は斜位土器埋設炉で、だ円形を呈し東西0.55m、南北0.73mを計る。南端に底部を欠く深鉢（pot 3）を斜位に埋設する。また炉床直上には敷いた様な状態で土器（pot 2）が出土地している。III部は床面と同じレベルで掘り込み等は認められないが、径0.3m程の角礫を3個埋設している。特に埋設礫Bとしたものは立石状に埋設される。I部～III部周辺の床面は焼成を受け赤変している。

炉の構築状況は、最初にI部～III部を掘り込む。次にI部にK₁層、K₂層、F₁層をつめ、

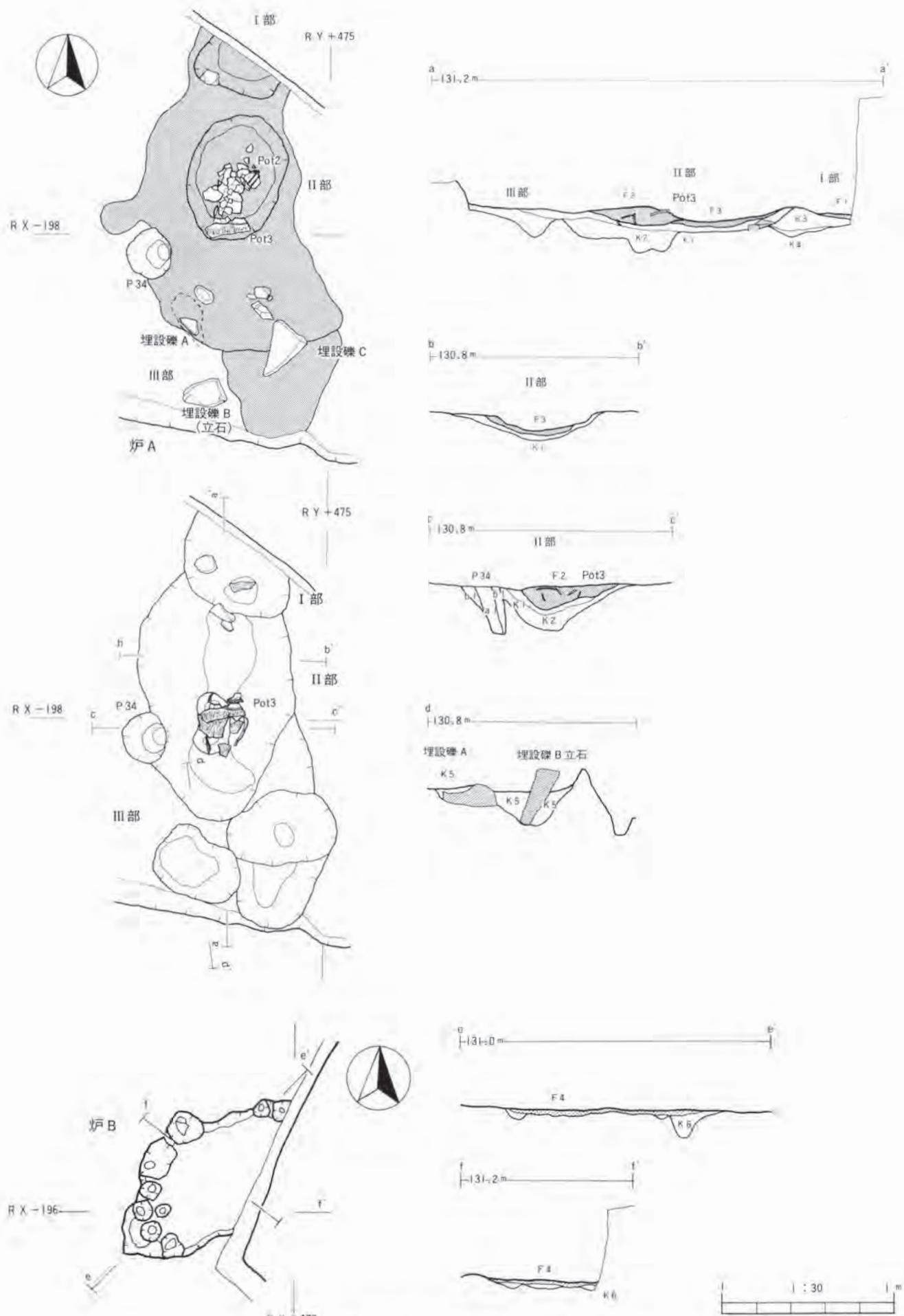
重複関係

周溝

柱穴

斜位土器埋設複式炉

立石



第34図 第15号竪穴住居跡・炉

同時にⅡ部の下層とⅢ部にK₂層とK₃層、K₄層をつめ、Ⅱ部の成形とⅢ部の礫埋設を行う。最後にF₁層を敷き、F₂層に土器を埋設しながら整形している。Ⅱ部の炉床はF₁層上面であるが、F₂層は層厚3cm程度で良く焼けてしまっている。また、F₃層も焼土層であるが、埋設した土器が壊れた時点で土が若干動いた様でありF₃層よりはしまりがない。

炉Bは炉Aの北西に隣接する。不整だ円形を呈し長軸方向で1.2m、短軸方向で0.7mを計る。焼土層（F₁層）下に炉石の抜きとり穴があり、石組炉から地床炉へ作りかえているようである。

遺物は比較的出土量が多かったものの復原できるものは意外に少なく、破片が多い。床面から出土した土器はpot 1～pot 3である。pot 3は炉の埋設土器で、pot 2は炉床に敷かれた様な状態で出土したものである。

遺物出土状況

第35図1は口縁部が内傾し、体部上半から体部下半にかけて強くすぼむ。底部は欠失する。体部と口縁部は隆帯で区画され、隆帯状には連続刺突文を施す。口縁部には4つの波頂があり、この頂部に小さな刻み目が2つずつ施される。波頂部にはだ円形の孔が穿たれ、沈線による二字文や半裁竹管による連続刺突文などが伴う。

土器

5は口縁部が外反し、頸部がわずかにくびれる深鉢で、口縁部に4つの波頂を持つ。波頂下の口縁部文様帶には繩文を伴う隆起線により渦巻文や鋸歯状の懸垂文を施し、各々を連絡している。波頂部などには小円文を施す。体部文様帶は同上の隆起線により方形区画を4単位施す。区画の内部は幅の狭い沈線で帶状の文様を施した後に繩文を充填している。2は無文のミニチュア土器。3は無節斜繩文（r）を地文とするもので、4は撚糸文を地文とするものである。6、7は連鎖状文を施すもので、7には沈線による施文が伴う。8～25は竹管による連続刺突文を施すが、10、13～24などの隆起線上に刺突されるものは連鎖状文に近い（祖型？）ものであろう。

26は口縁部に繩文原体圧痕文を施す。

27～46は磨消技法や充填繩文などで施文されるものを一括した。39、40などは刺突文が伴っている。

50、51は口縁部を折り返す土器である。

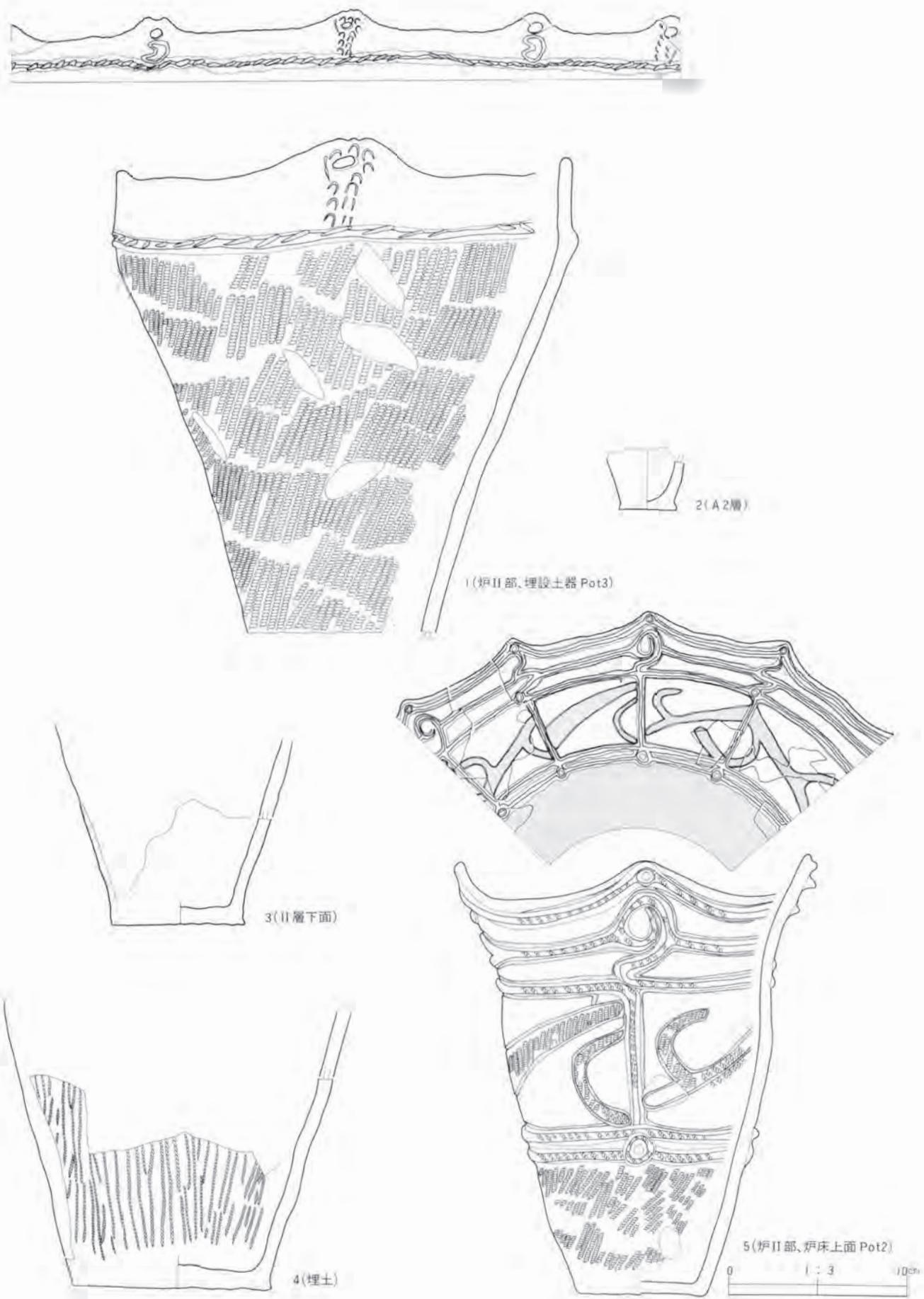
52～74は地文のみを施す土器で、繩文を地文とするもの他に撚糸文や条線文を地文とするものもある。75、76は底部破片である。

77、80～82、85～88は隆沈線による渦巻文などを施すもので、大木8 b式に伴う。

89は石錐で大略円形の基部を有する。先端部を欠失するが調整は丁寧である。90、91は石鎌で、凹基の三角鎌である。92は小形の搔器で下辺に片面調整の刃部を有する。93は搔器で上辺から側縁に片面調整の刃部を有する。94は撥形を呈し、周縁を両面調整する。下辺を刃部とするようでは搔器かと思われるが、下半部の両面にビッチが付着するために上半部を使用した可能性もある。95、97は側縁に鈍角の刃部を有し、不整形ながら搔器かと思われる。96は使用痕のある剥片で、搔器様となった両側縁を使用する。

石器

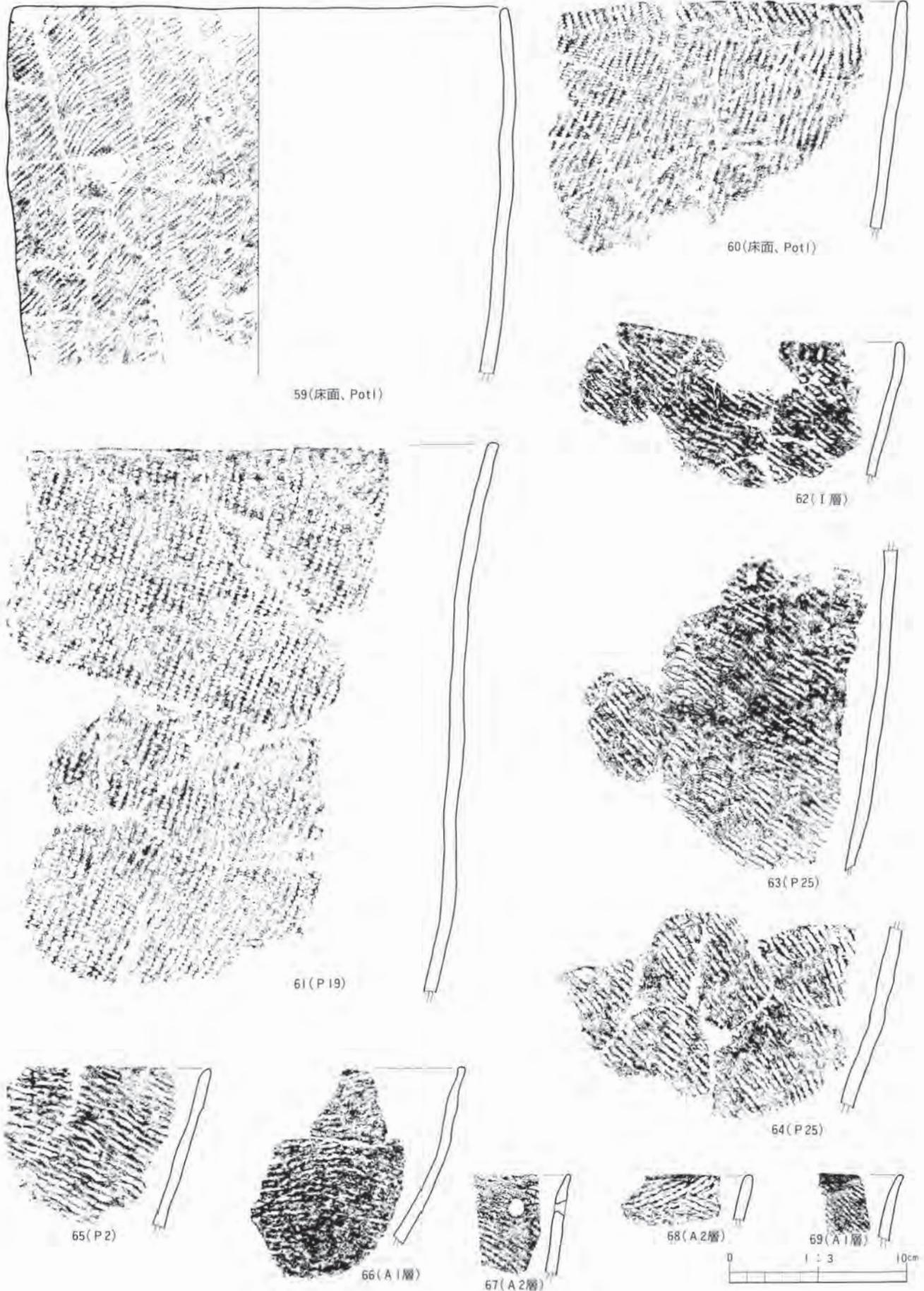
101は磨製石斧で、下半を欠失する。102～105は敲石で、いずれも、たて長の自然礫を使用する。104、105は側縁に剥離が伴う。106～110は敲打磨石類で、106～108は、だ円形の扁平円礫の側縁部に敲打磨面を持つ。107は使用時のものと思われる剥離が伴う。108は敲打磨面に伴い周縁に敲打痕がみられる。106は一側縁に敲打磨面がみられるのみである。109～111は扁平



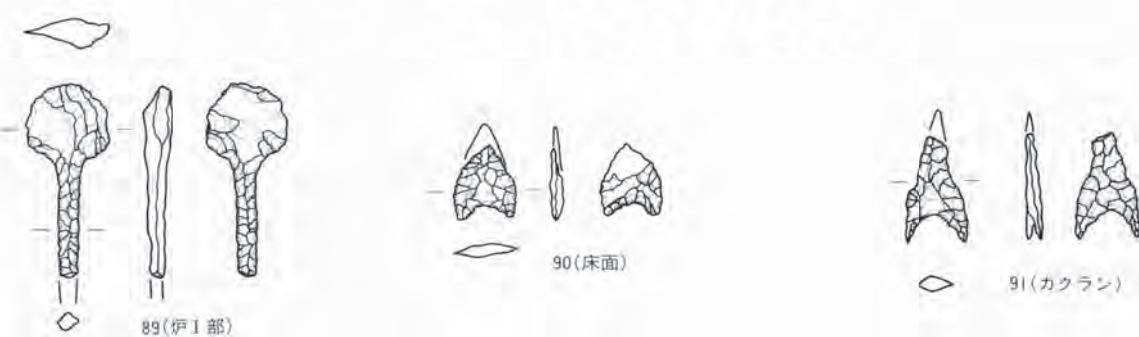
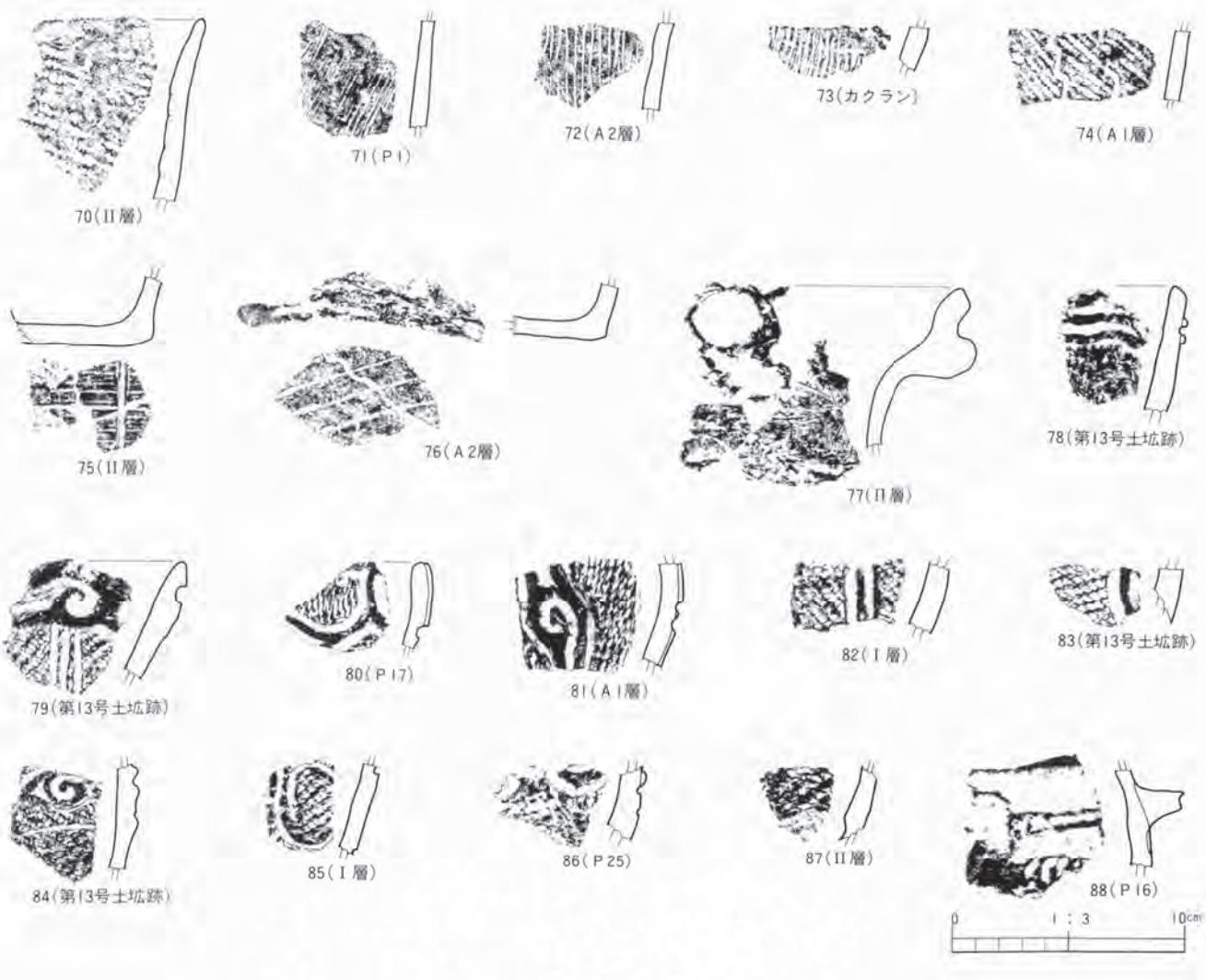
第35図 第15号竪穴住居跡出土遺物(1)



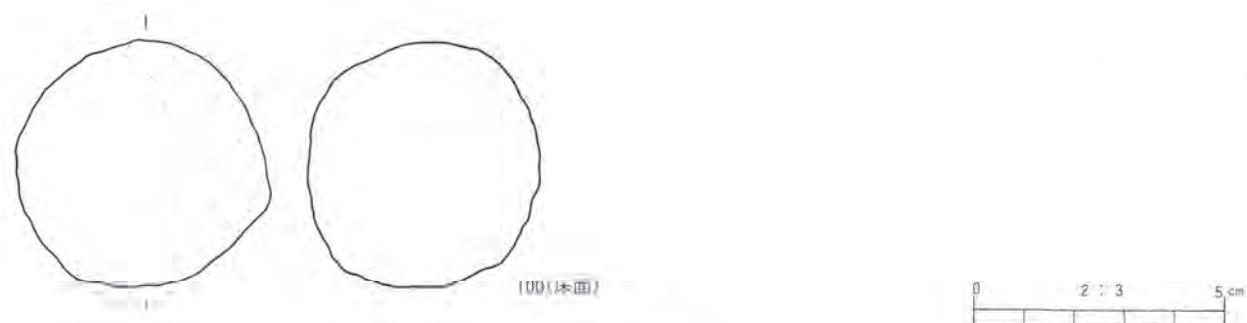
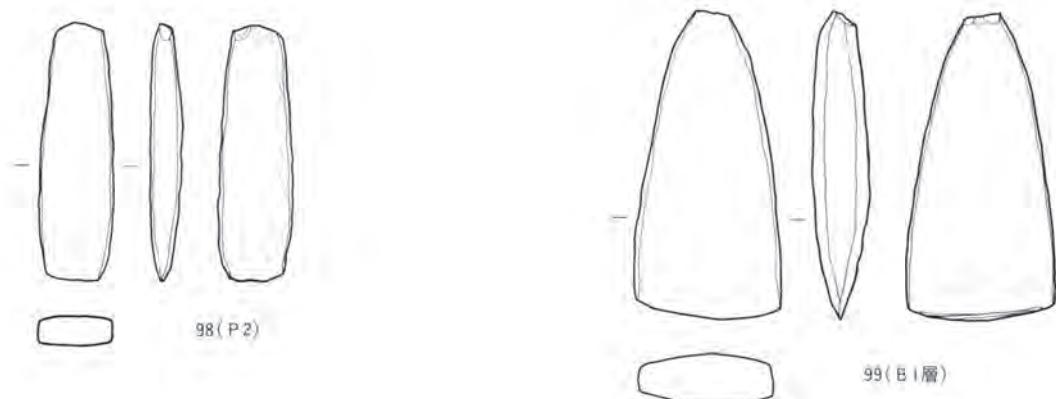
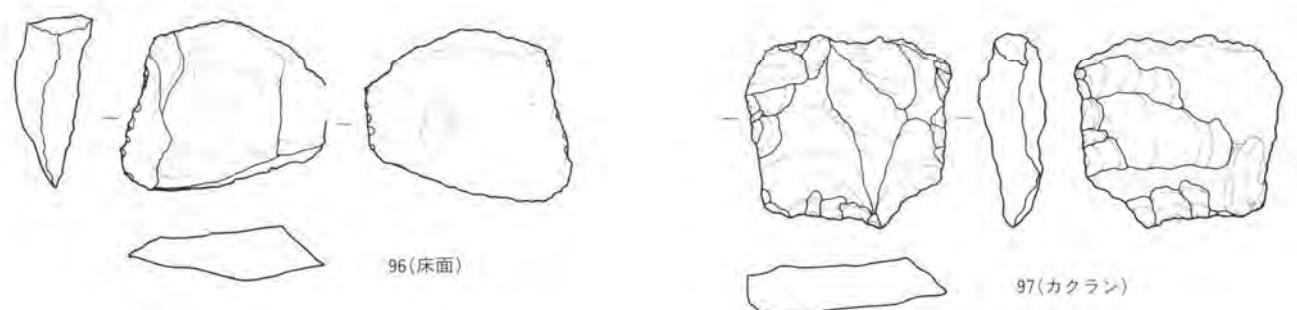
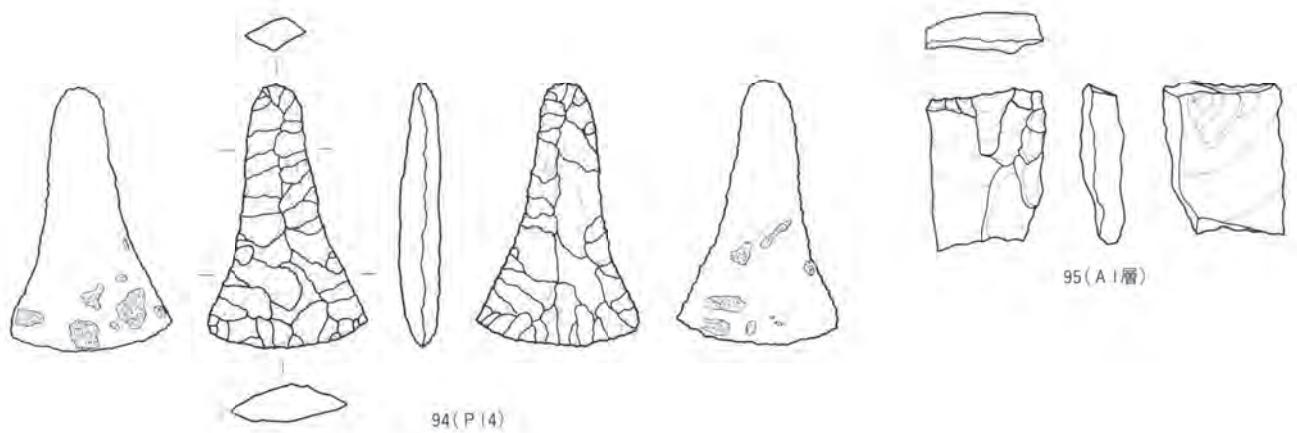
第36図 第15号竪穴住居跡出土遺物(2)



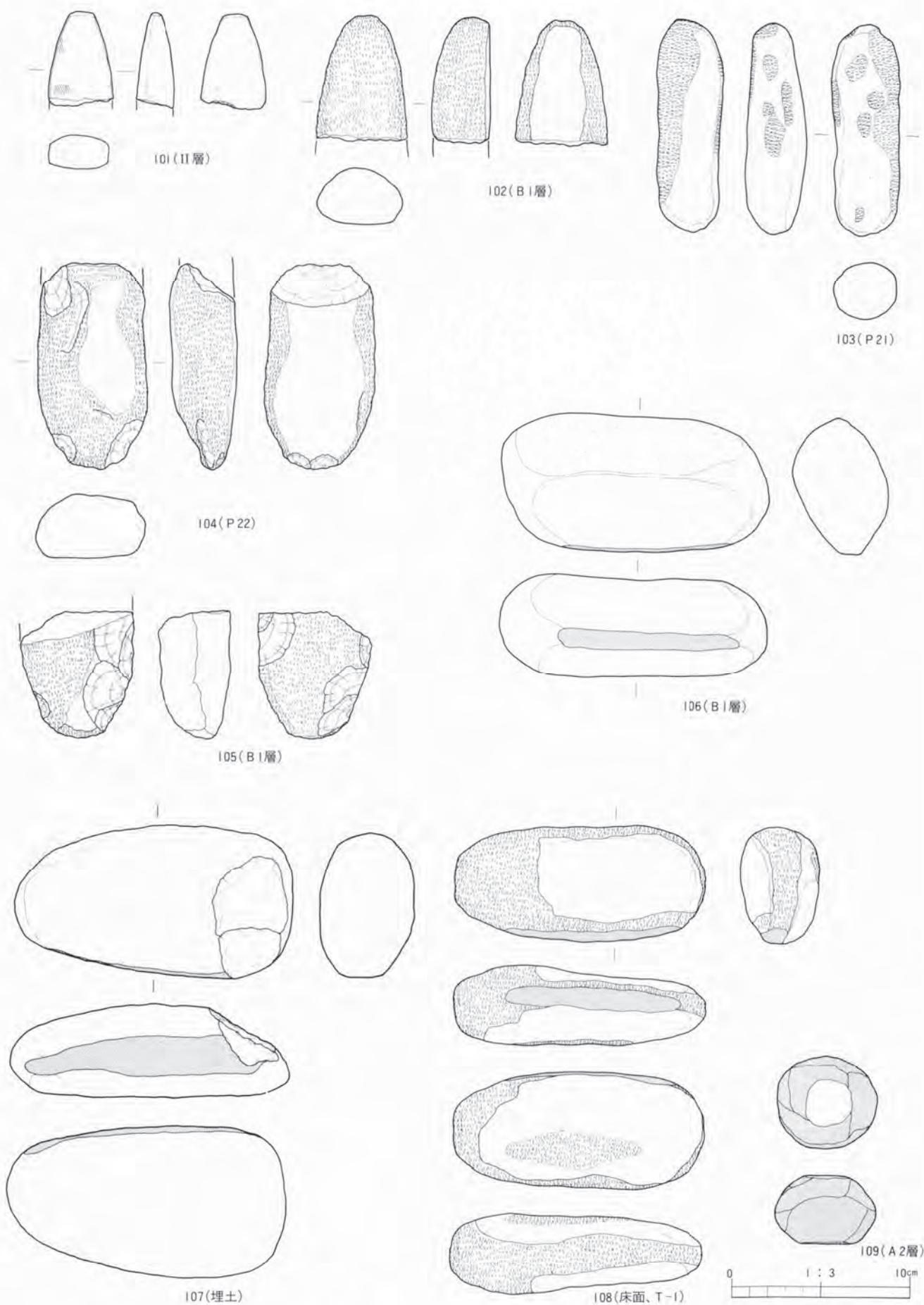
第37図 第15号竪穴住居跡出土遺物(3)



第38図 第15号竪穴住居跡出土遺物(4)



第39図 第15号竪穴住居跡出土遺物(5)

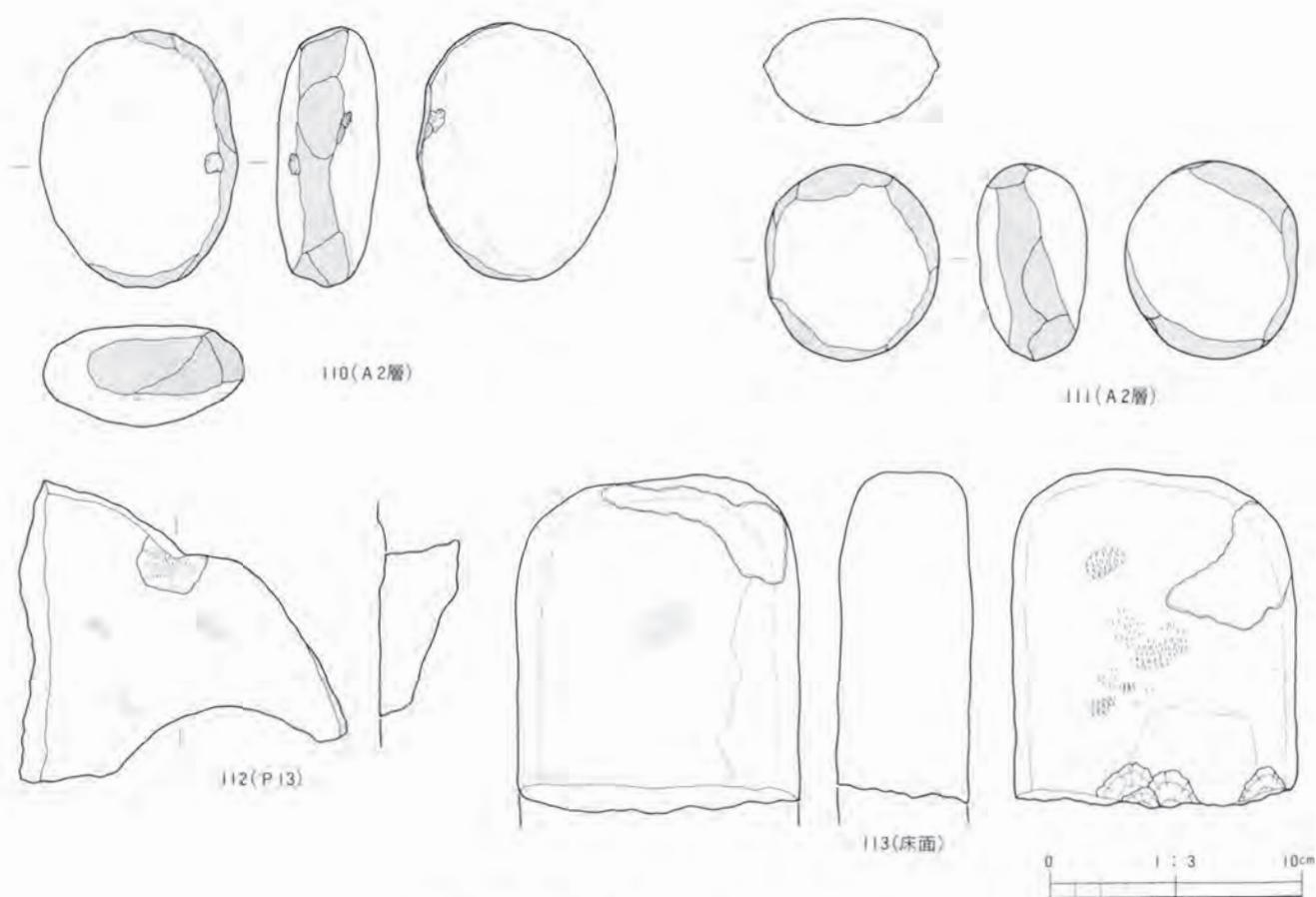


第40図 第15号竪穴住居跡出土遺物(6)

円礫の周縁を使用するもので、いずれの敲打磨面も小さく面取りされたような状態となる。110には使用時の小剥離がみられる。112は凹石だが、上面を磨面として使用しており、平滑で擦痕も観察できる。また裏面は剥落している。113は、やや厚い礫を使用するもので、一方の面に擦痕を伴う平滑な磨面があり、もう一方の面に敲打痕がみられる。

98、99は小形の磨製石斧で、丁寧に整形されている。98は基部から刃部まではほぼ同じ幅であるが、99は撥形となる。両者ともに基部に小剥離が伴うが、使用時のものであろうか。

100は球形を呈する土製品で、比較的丁寧に整形される。表面に、焼成時のものと思われる黒色の付着物（炭素？）があり、ドットで表示した。貫通孔は認められない。



第41図 第15号竪穴住居跡出土遺物(7)

第18号竪穴住居跡

第4次調査区西端に位置する。第16号竪穴住居跡を切る。また、第21号柱穴群に隣接するが新旧関係は不明である。北西—南東方向で2.5m、北東—南西方向で2.0mを検出したのみで平面形、規模、主軸方向は不明である。壁はややなだらかで、深さ0.15mを計る。

重複関係

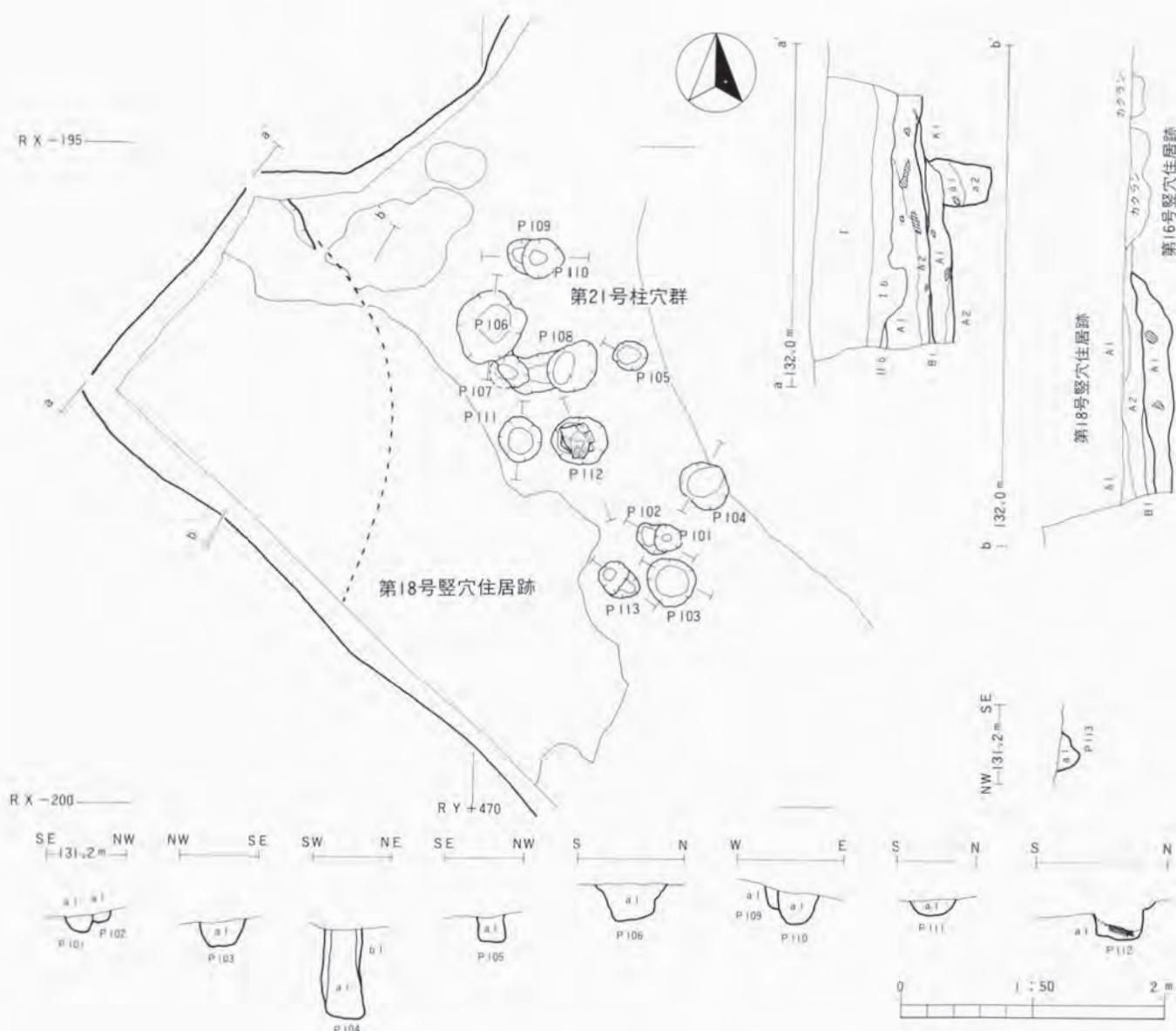
埋土はA層、B層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。固さは中程度でややしまりがない。B層は褐色粘質土を基本土とし、焼土塊や暗褐色土塊などをやや多く含む。固さ、しまりとも中程度である。

床面はやや凹凸があり、あまり固くない。部分的に褐色粘質土による貼床（K層）がみられる。

柱穴、炉は検出されなかった。

遺物は縄文土器片などが少量埋土中より出土している。第45図18は幅の狭い縄文帯を施すも

土器



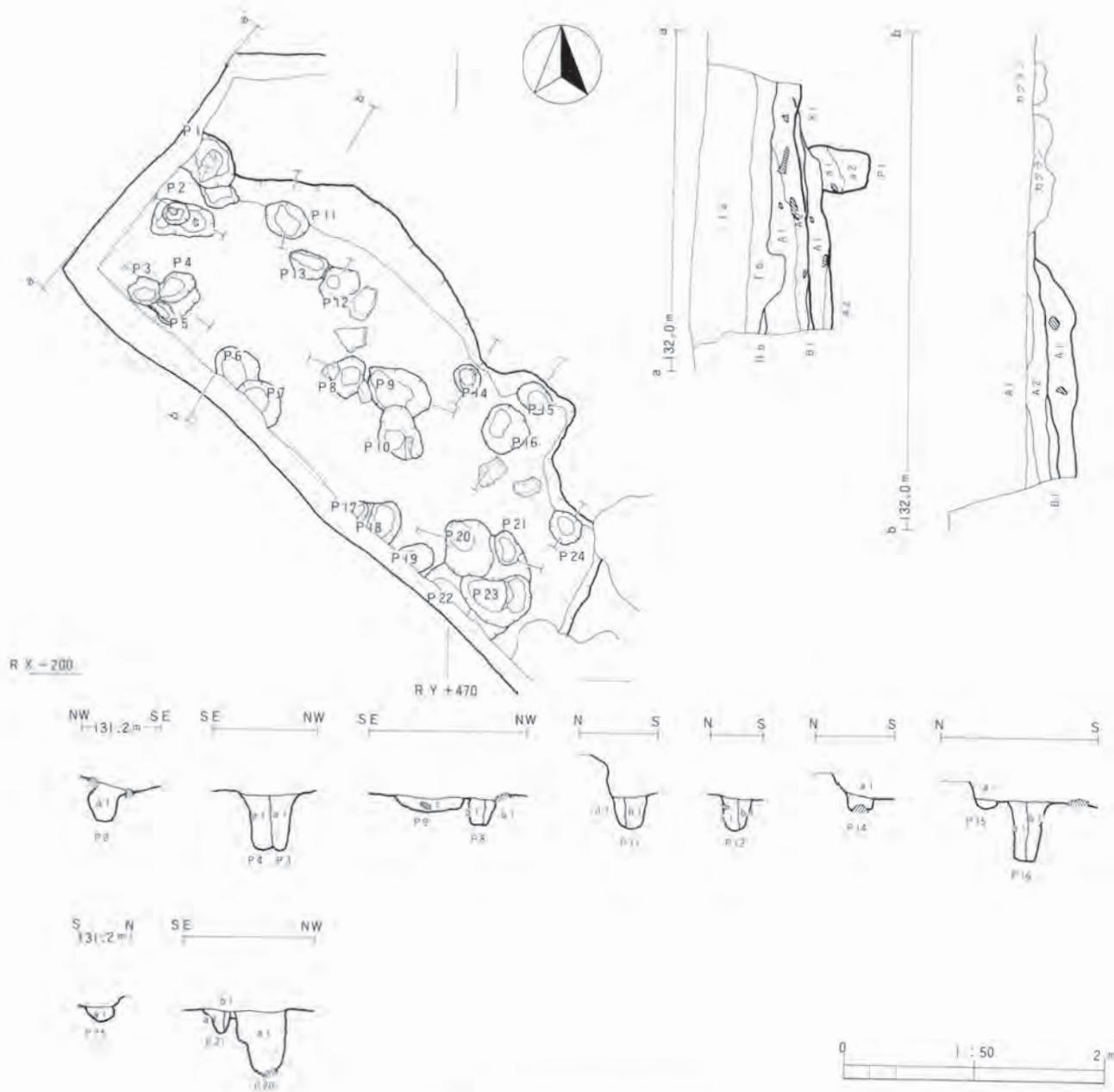
第42図 第18号竪穴住居跡、第21号柱穴群

ので、第17号竪穴住居跡出土土器に類似する。17は口縁部を折り反し、その上に撚りの細かい繩文を施す。19は磨消技法により施文するもの、20は沈線文を施すもの、21は円形の凹部のあるもの、22は沈線による渦巻文を施すもの、23は撚糸文を地文とするものである。

第21号柱穴群

第4次調査区西端部に位置し、第15号竪穴住居跡と第16号竪穴住居跡などに隣接する。地面上に柱穴等のピットを検出したのみで、平面形、規模などは不明である。大半は柱痕跡を確認できなかったが柱穴群として一括した。

P₁は柱痕跡を確認しており、開口部径0.3~0.4m、深さ0.65mを計る。P₂は開口部径0.4m、深さ0.2mを計り、しまりのない褐色粘質土をつめる。埋土中より第53図15の土器が出土



第43図 第16号竪穴住居跡

している。

他のピットは径0.2m程度で深さ0.15m程度の小さなものと、径0.3m以上で深さ0.2m以上の中程度のものの2種があり、いずれも単層でしまりのない暗褐色土～褐色土をつめる。

第53図15は口縁部がわずかに外反し、体部上半に最大径を持つ深鉢である。体部に燃りの細かい左燃りの縄文を施す。

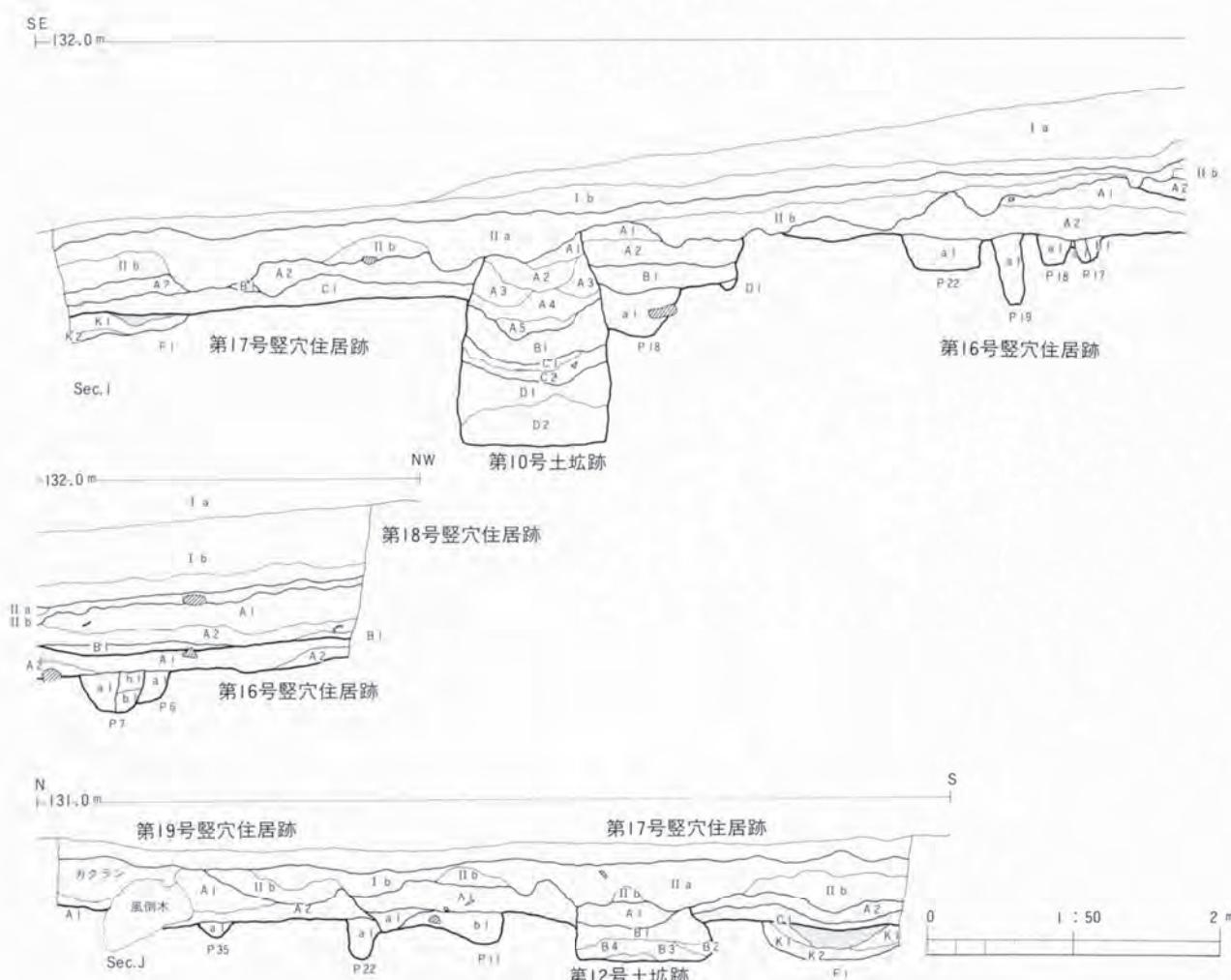
土器

第16号竪穴住居跡

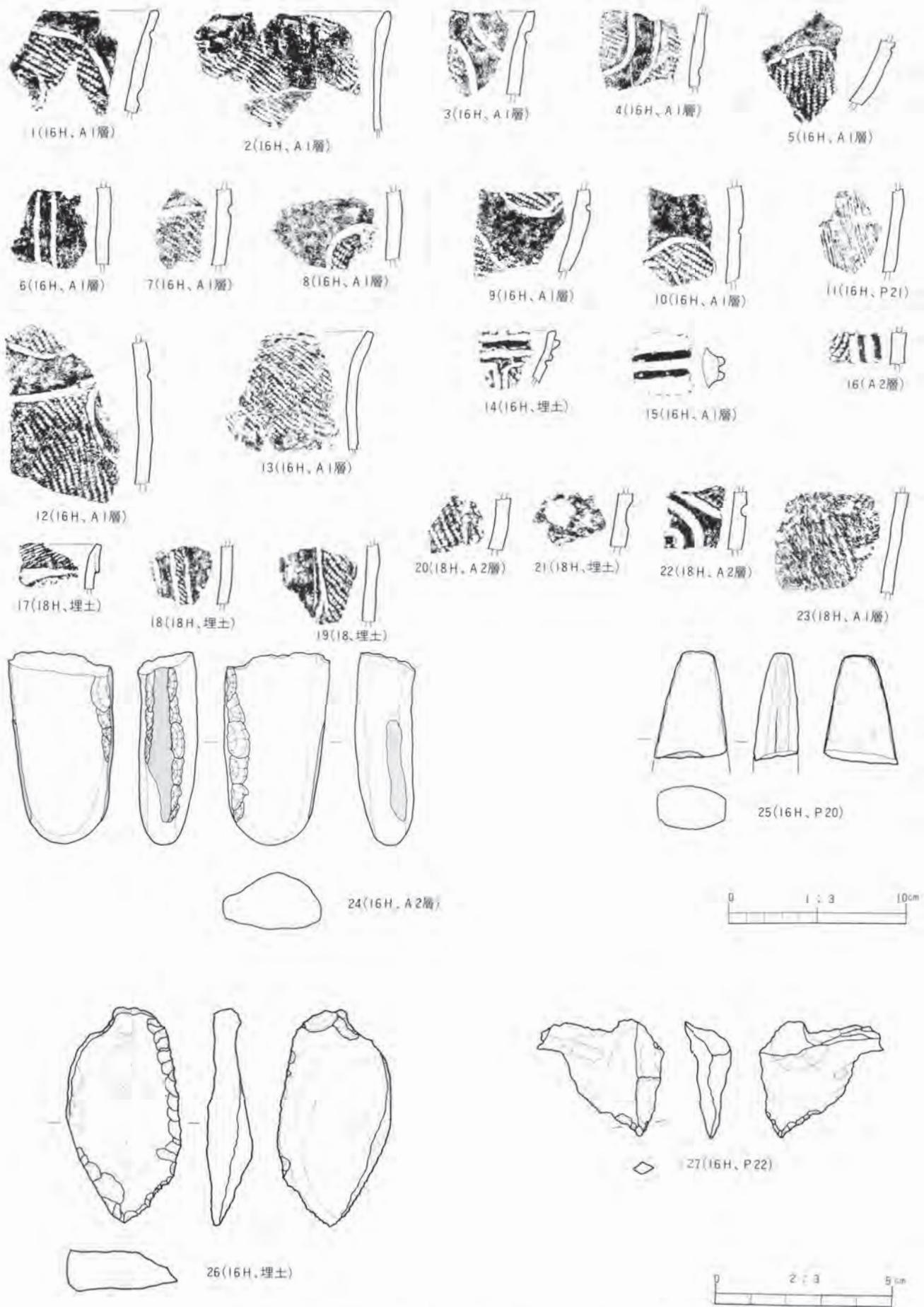
第4次調査区西端部に位置し、第18号竪穴住居跡に切られ、第17号竪穴住居跡を切る。第21号柱穴群とは隣接するが新旧関係は不明である。北西～南東方向で4.5m、北東～南西方向で1.8mを検出したのみで平面形、規模、主軸方向は不明である。壁はかなりなだらかで、壁高は0.2mを計る。

重複関係

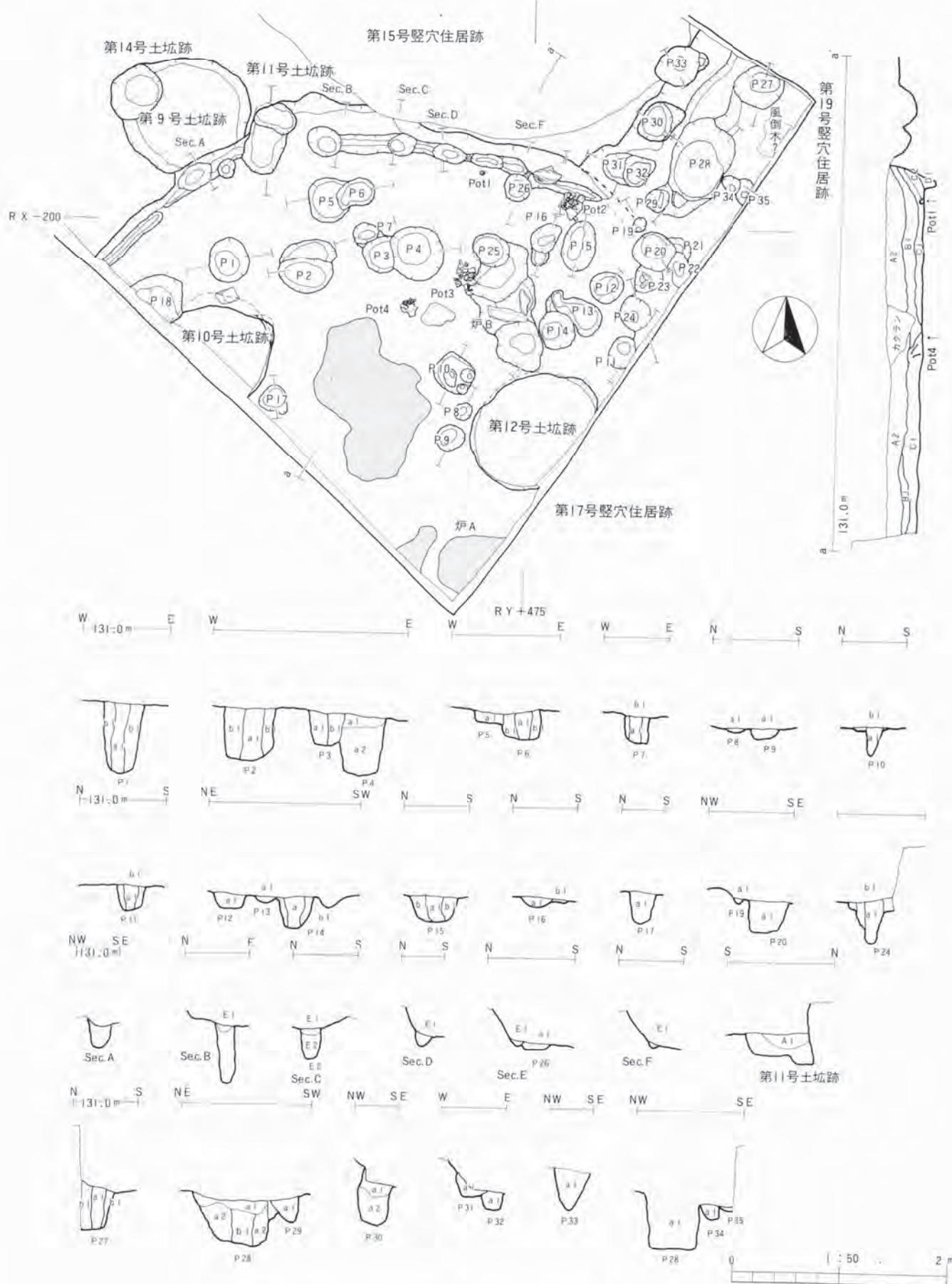
埋土はA層のみで、A₁層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を多く含む。やや柔らかくしまりがない。A₂層はA₁層より明るい褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を多く含む。固さは中程度でしまりがない。



第44図 白石遺跡第4次調査区土層断面図(2)



第45図 第16号竪穴住居跡、第18号竪穴住居跡出土遺物(1)



第46図 第17号竪穴住居跡、第19号竪穴住居跡、第9号～第12号土塙跡

床面はやや凹凸があるものの固くしまっている。

柱穴は、P₈、P₁₁、P₁₅、P₂₁とP₁₆に柱痕跡を確認している。前者はいずれも小規模であり、主柱穴に相当するのはP₁₆のみであろう。P₁₅は比較的深く主柱穴となる可能性がある。

遺物は大半が埋土中から出土したもので、特にA₁層に多い。第45図1、3～10、12第53図12～14は磨消技法により曲線的な文様を施すものだが、モティーフの全容は不明である。第45図11は条線文を施すもの、2、13は縄文のみを施すものである。14～16は隆沈線文するもので、大木8 b式に伴う。

第45図26は削器で一方の側縁に片面調整の刃部を持つ。27は尖端部にわずかな調整があり石錐かと思われる。

25は磨製石斧の下半を欠くものである。24は敲打磨面があり、これに剥離が伴う。もう一方の側縁には0.7m程度の磨面がある。

第17号竪穴住居跡

重複関係

第4次調査区南端部に位置し、第15号竪穴住居跡・第16号竪穴住居跡・第10号土塙跡・第12号土塙跡に切られ、第19号竪穴住居跡・第9号土塙跡を切る。第11号土塙跡は第17号竪穴住居跡の床面で検出したが、第11号土塙跡が新しいようである。

平面形は北壁の一部が張り出すものの円形または多角形を呈すると思われる。北西～南東方向で4.6m、北東～南西方向で3.5mを検出したのみで、規模、主軸方向は不明である。

壁はわずかに外傾するが直壁に近い。壁高は0.35mを計る。

埋土はA層、B層、C層、D層に大別される。A層は暗褐色～褐色粘質土を基本とし基本土より暗い暗褐色土塊を少量含む。A₁層は、やや柔らかくあまりしまりがないが、A₂層はA₁層より明るくやや固い。B層は、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊を多く含む。やや柔らかくしまりは中程度である。C層は褐色粘質土を基本土とし、やや柔らかくしまりのない層である。C₁層は暗褐色土塊をわずかに含むが、C₂層はやや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を比較的多く含む。D層は周溝の埋土で、褐色粘質土を基本土とするがあまりしまりがない。

床は平坦で固く、貼床は認められない。

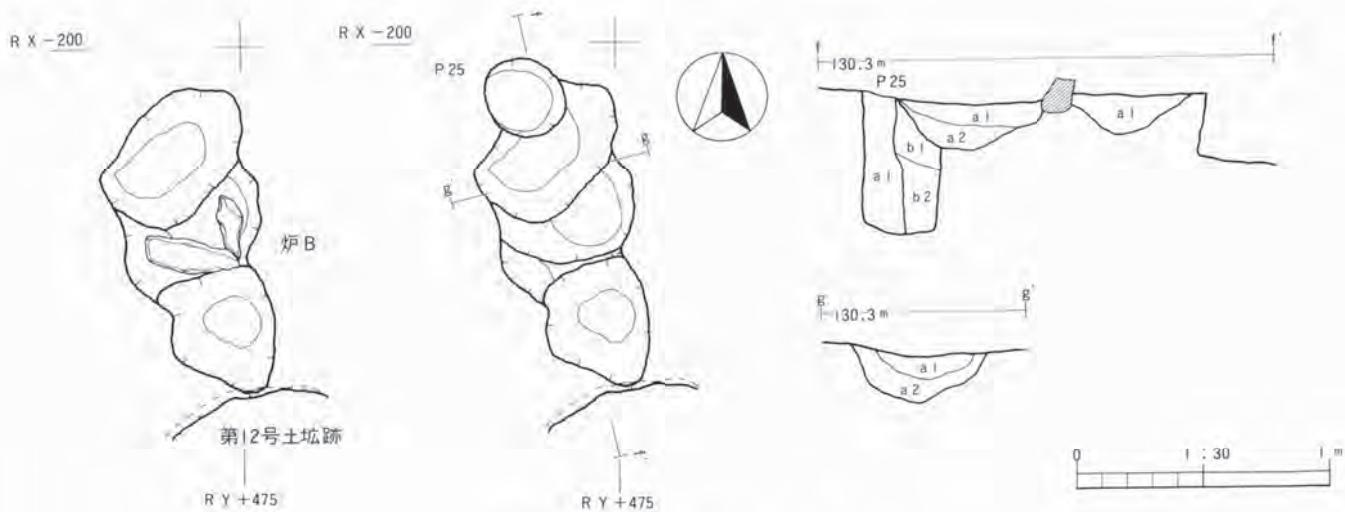
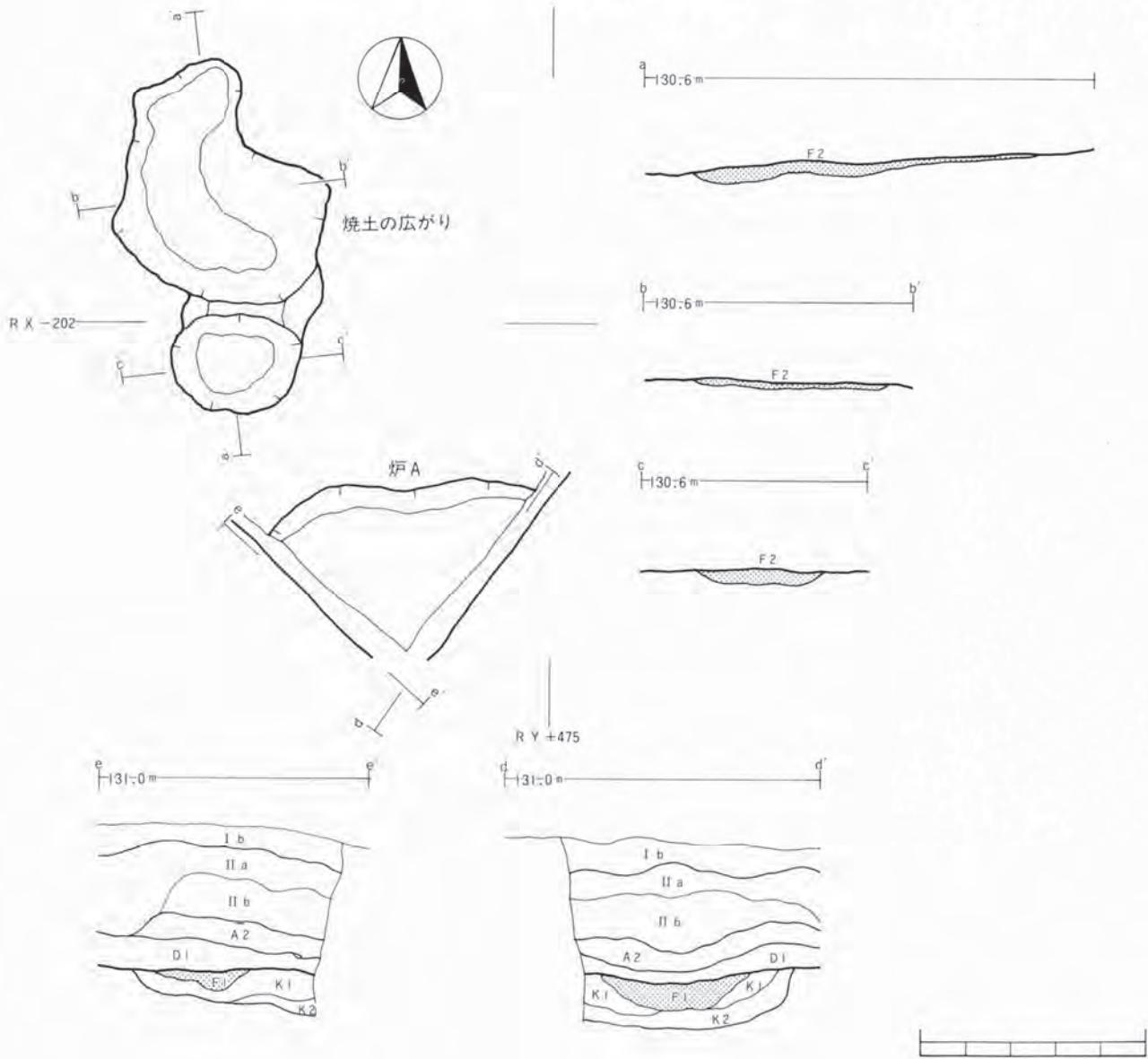
周溝

周溝は壁下に断続的にめぐり、幅10m、深さ10mほどで、所々に深く掘り下げたピットを配す。

柱穴

柱穴は、柱痕跡を確認したものが、P₁、P₂、P₅、P₇、P₁₀、P₁₁、P₁₃、P₁₅、P₁₆、P₁₇、P₂₂である。これらのうちP₁、P₂、P₅、P₁₆がやや大形であるが他のものは比較的掘り込みが浅い。主柱穴の配置は不明である。他のピットは掘り込みが浅く単層のものである。

P₁は柱痕跡としてa₁層と掘り方の埋土としてb₁層が堆積する。a₁層は褐色粘質土を基本土とし、明るい褐色土粒や暗褐色土塊を含む。柔らかくしまりのない層である。b₁層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。柔らかくしまりのない層である。b₁層上部から鉄石英や頁岩などの剥片27点、石核1点、チップ多数が出土したがこのうち鉄石英剥片接合資料の剥片11点と石核1点が接合している。また、これらの剥片類に伴って炭化物粒や哺乳類かと思われる焼骨片や魚骨（棘）などが出土している。自然遺物では種名を同定でき



第47図 第17号竪穴住居跡・炉

るものはなかった。

炉は2基あり、南端部のものを炉A、北側のものを炉Bとした。また、炉Aと炉Bの間の床面にも東西1.1m、南北1.5mの不整形に床面が焼けている。炉Aは地床炉であるが、一担床面を掘り下げた後、構築土（K層）をつめ、F層上面を炉床とする。F層は焼土層で、良く焼け固くしまっている。K層は明るい褐色粘質土層で、K₂層は暗褐色粘質土層である。

炉Bは炉床が壊され、炉石が抜きとられたもので、皿状のピットが3基並んだような掘り込みの中に焼成を受けた炉石が2個残っていた。埋土はa₁層が褐色粘質土を基本土とし、明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多く含むほか、炭化物粒や焼土粒を含む。a₂層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や焼土粒などを少量含む。いずれも柔らかくしまりがない。

遺物出土状況

遺物は床面からPot 1, Pot 2, Pot 4が出土した。埋土中では特にC層が多く、Pot 3などが出土している。

土器

第48図1は口縁部がやや外反し、体部中央に最大径を持つ深鉢である。口縁部にはわずかな波頂が4単位あり、波頂下には連続刺突を伴う円形の凹みが施される。波頂間に磨消技法によるU字形の縄文帯が4単位施される。また、体部下半の縄文帯と体部文様帯は沈線により区画されているが、縄文帯の上端は4単位の波頭状となる。2は口縁部の内湾する深鉢で、口縁部にわずかな波頂が4単位ある。波頂間に磨消技法によるU字形の縄文帯が4単位施される。また、体部下半の縄文帯の上端は4単位の波頭状となるが不整である。1, 2とも口縁部文様帯（無文帯）は区画されていない。

3は口縁部がわずかに外反する平縁の深鉢で、口縁部無文帯と、体部文様帯を沈線により区画する。体部には磨消技法によりT字形の無文帯を施すが、隣接するモティーフとの連絡や端部の反転によりモティーフの重層化あるいは複雑化がみられる。

4～15は磨消技法により施文されるものを一括したが、モティーフの全容は不明である。4, 6, 9などは刺突文が伴う。

16～19は地文のみを施すものである。

20～23は隆沈線により施文されるもので大木8り式に伴う。

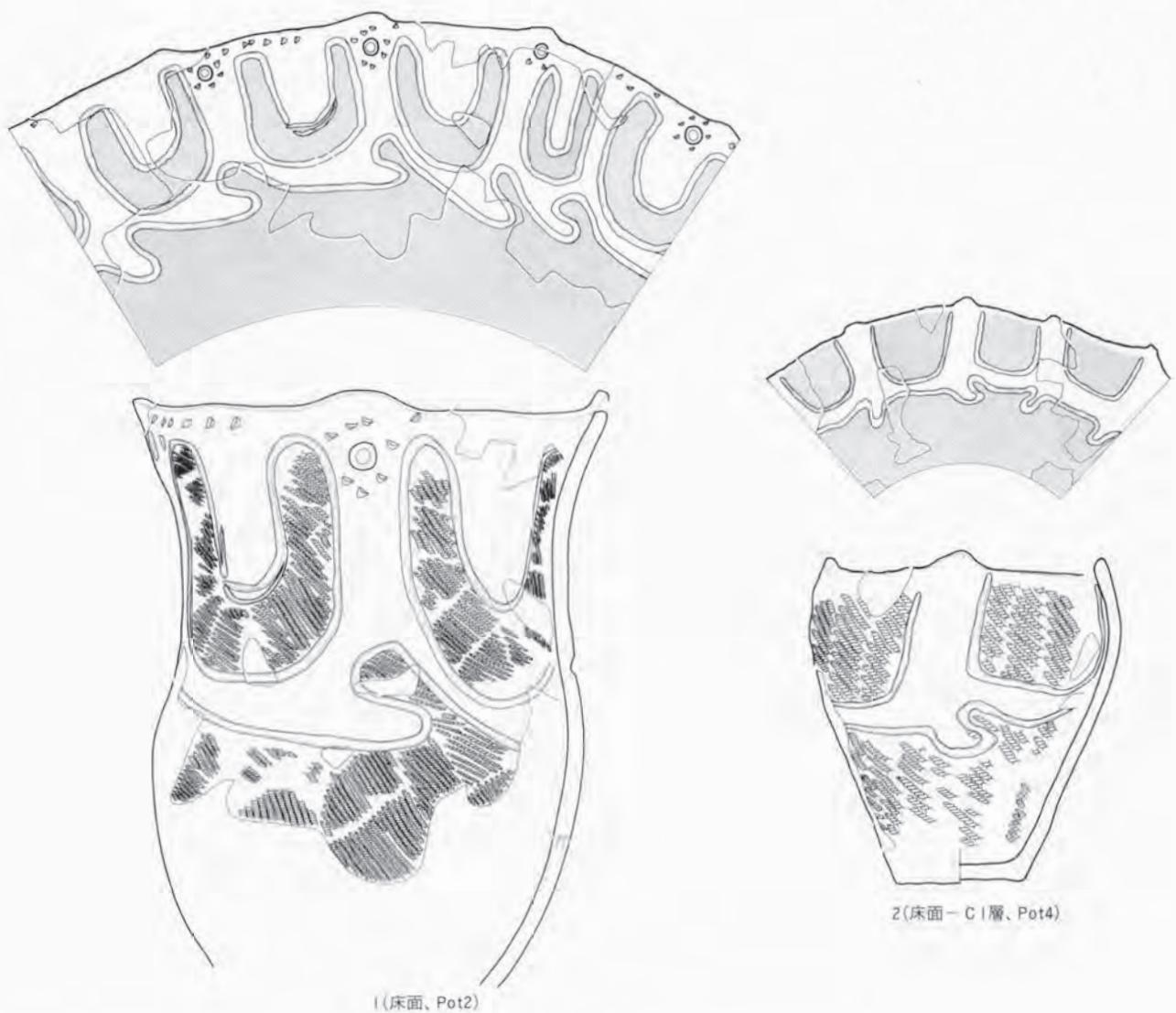
石器

第50図36, 37は石鎌で、いずれも先端部を欠く。36の基部調整は粗雑である。38は無柄凹基の三角鎌である。

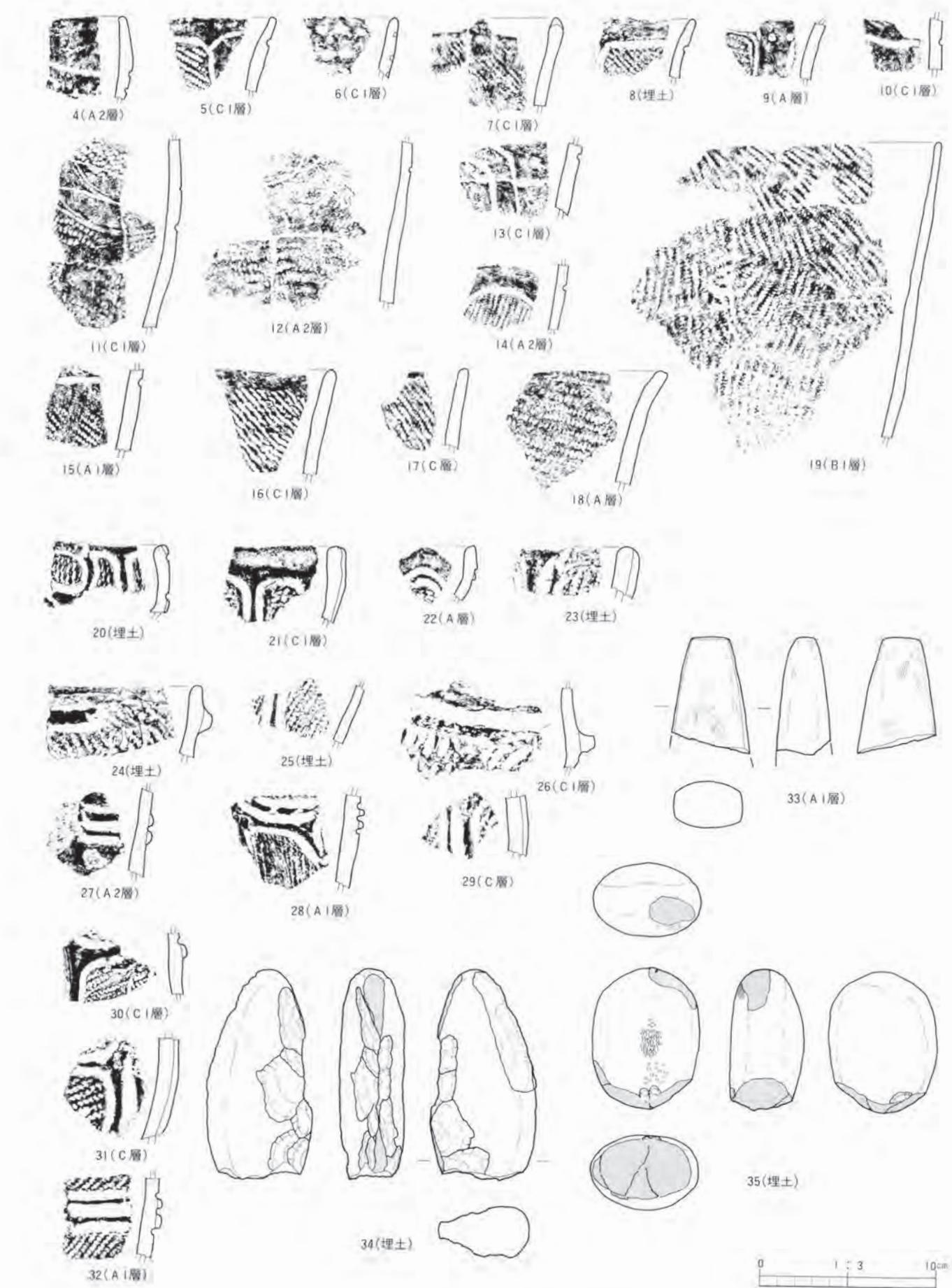
39は小形であるが搔器であり、下辺に鈍い角度の刃部を持つ。40, 41は使用痕のある剥片で、側縁部に微細な剥離がみられる。Pより出土した剥片接合資料については後述する。

第49図33は磨製石斧で下半部を欠失する。非常に丁寧に整形される。

34, 35は敲打磨石類である。34は、だ円形扁平礫の1側縁を使用するもので、大きな剥離が伴う。35は、だ円形扁平礫の両端部を使用するが、特に下端部の使用状況が著しく、小さく面取りされたような敲打磨面となっている。また、敲打磨面には使用時のものと思われる小剥離が伴っている。さらに側面にも敲打痕や擦痕が観察される。



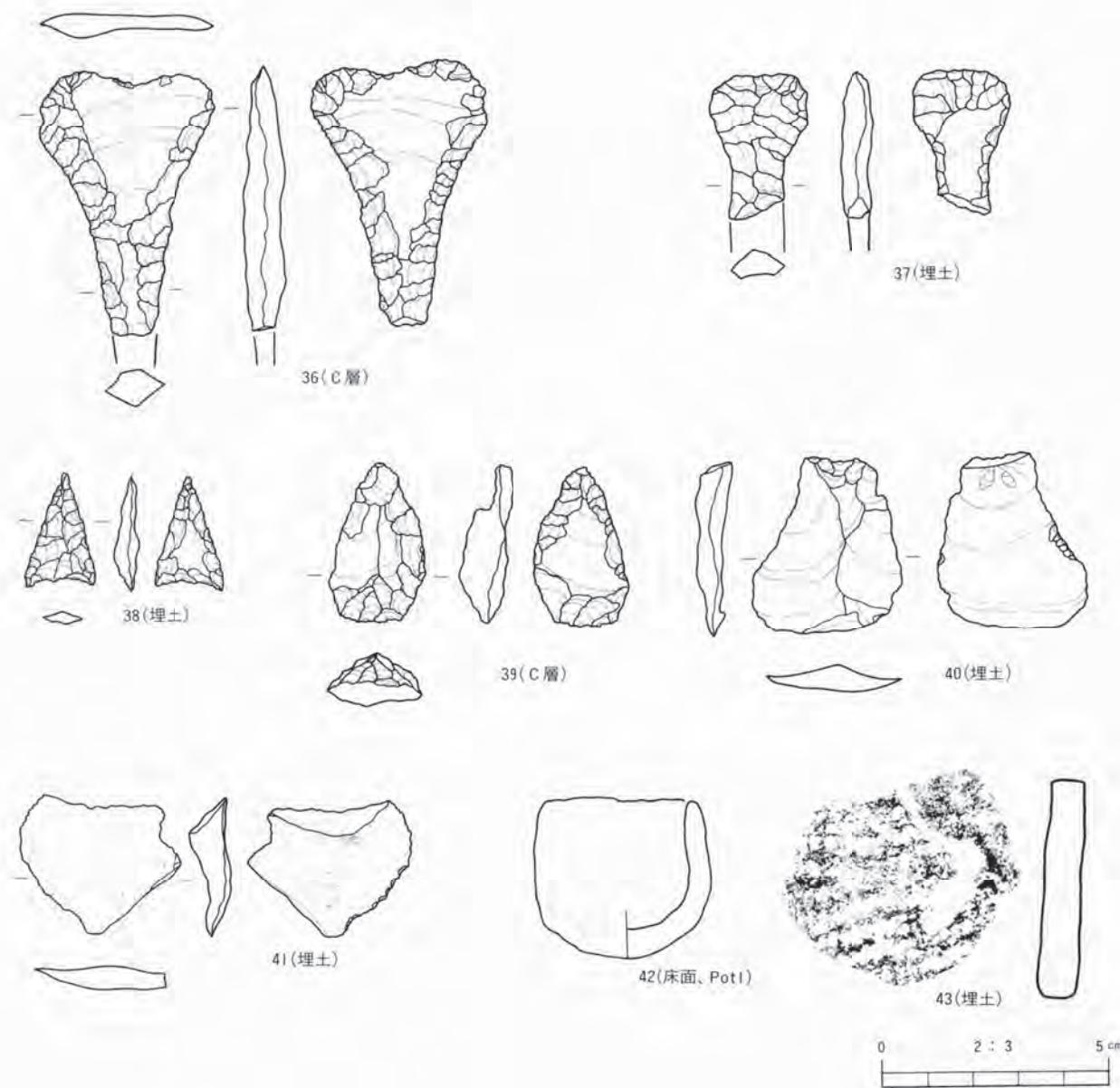
第48図 第17号竪穴住居跡出土遺物



第49図 第17号竪穴住居跡出土遺物(2)

第50図42は丸底のミニチュア土器である。外面に整形痕がある。土器内部の土ごと持ち帰り
篩分けしたが何も入っていなかった。43は土製円盤である。

土製品



第50図 第17号竪穴住居跡出土遺物(3)

第19号竪穴住居跡

重複関係

第4次調査区南半部に位置し、第17号竪穴住居跡に切られる。北東—南西方向で2m、北西—南東方向で1.75mを検出したのみで、平面形、規模、主軸方向は不明である。壁はなだらかで、中段にテラスを有し壁高0.25mを計る。

埋土はA層で、2層に細分される。A₁層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。A₂層はやや明るい暗褐色粘質土を含む。いずれも固さ、しまりともに中程度である。

床面は、やや固くしまっているが、貼床は認められない。

柱穴

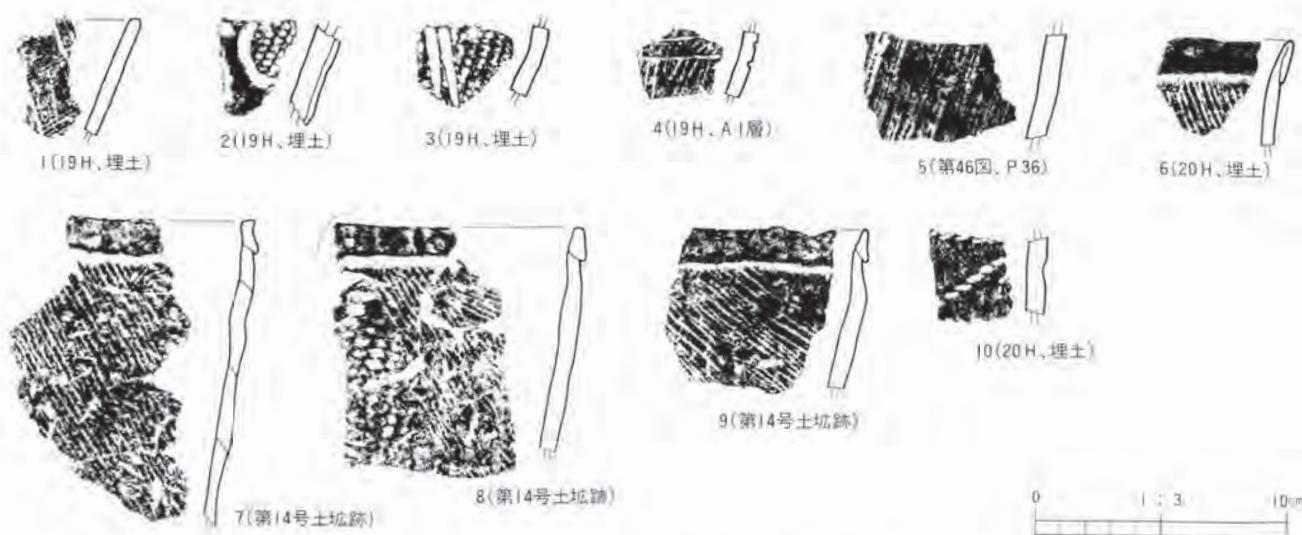
柱穴は、P₂が径0.7m、深さ0.4mで柱痕跡を持つ。また、P₃も径0.45m、深さ0.4mで柱痕跡を持つ。しかし、これらが主柱穴となるかは不明である。炉、周溝は検出されていない。

遺物は埋土中からわずかに出土したのみである。第52図2は降沈線文を施すもの、3は平行沈線文を施すものでいずれも大木8b式に伴う。1は条線文を、4は撚糸文を施すものである。

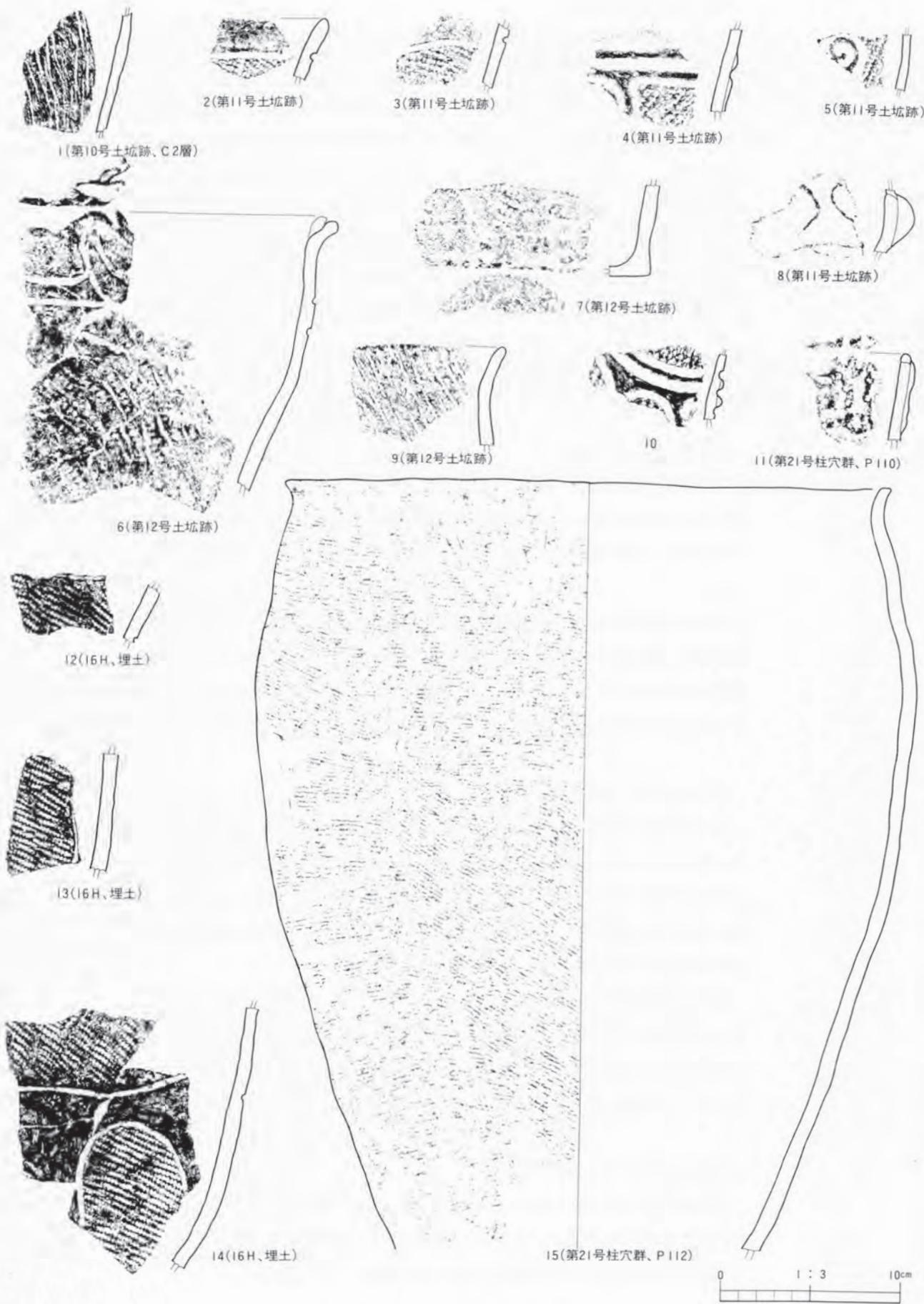
第9号土塙跡

第4次調査区南半部に位置し、第17号竪穴住居跡に切られる。開口部径1.1m、深さ0.35mを計り、断面形はピーカー状を呈する。

埋土はA層で、2層に細分される。A₁層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。A₂層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や黄褐色土塊を含む。いずれも固さは中程度だが、A₂層はしまりがない。



第51図 第19号竪穴住居跡、第20号竪穴住居跡、第14号土塙跡出土遺物



第52図 土塙跡・ピット出土遺物

第10号土塙跡（第46図）

第4次調査区南端部に位置し、第17号竪穴住居跡を切る。開口部径0.95m、底部径1.0mで断面形は胴張りのプラスコ状を呈する。

埋土はA層、B層、C層、D層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊、褐色土塊や粒化物粒を多く含むが、B層以下に比して暗い色調を呈する。A₁層は混入土がやや少ない。いずれもやや柔らかくあまりしまりがない。B層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。固さ、しまりとも中程度である。C₁層は焼土層であるが柔らかくしまりがない。投げ込まれたものであろう。褐色土塊や暗褐色土塊を多く含む。C₂層は暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊や焼土粒などを多く含む。固さは中程度でややしまりがない。D層は褐色～やや明るい暗褐色土を基本土とし、黄褐色土や暗褐色土塊を多く含むが、やや柔らかくしまりのない層である。

遺物は埋土中から出土したが少ない。第52図1はC₂層より出土したもので、撫糸文を施す。

第11号土塙跡（第46図）

第4次調査区南半部に位置し、第17号竪穴住居跡と重複する。第17号竪穴住居跡床面にて検出したが、周溝を切っており第17号竪穴住居跡より新しいようである。開口部径は東西0.4m、南北0.65m、深さ0.56mを計り、平面形は不整だ円形を呈する。北半部の底面は一段下がっている。

埋土はA層で2層に細分される。いずれも褐色粘質土を基本土とする柔らかくしまりのない層である。A₁層は暗褐色土塊を少量含み、A₂層は褐色土塊をやや多く含む。

遺物は埋土中から少量出土している。第52図2、3は磨消技法により施文されるもの、8は隆帶を貼り付けるものである。4、5は隆沈線により渦巻文などを施し、大木8b式に伴う。

第12号土塙跡（第46図）

第4次調査区南端部に位置し、第17号竪穴住居跡を切る。開口部径1.25m、底部径1.15m以上、深さ0.35mを計る。断面形はピーカー状で、一部プラスコ状を呈する。

埋土はA層、B層に大別される。A層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊をわずかに含む。B層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。やや柔らかくしまりがない。B₁層は褐色粘質土を基本土としている。

遺物は埋土中から少量出土している。第52図6は口縁部が強く外反する深鉢で、体部はゆるやかに膨らむ。口縁部にはわずかな波頂があり、斜に刻目が入っている。口縁部文様帶には、2本の平行沈線文による施文があり、磨消が伴う。モティーフが大木10式とやや異なり後期初頭に伴うものか。7は底部破片で、9は撫糸を施すものである。

第14号土塙跡（第32図、第46図）

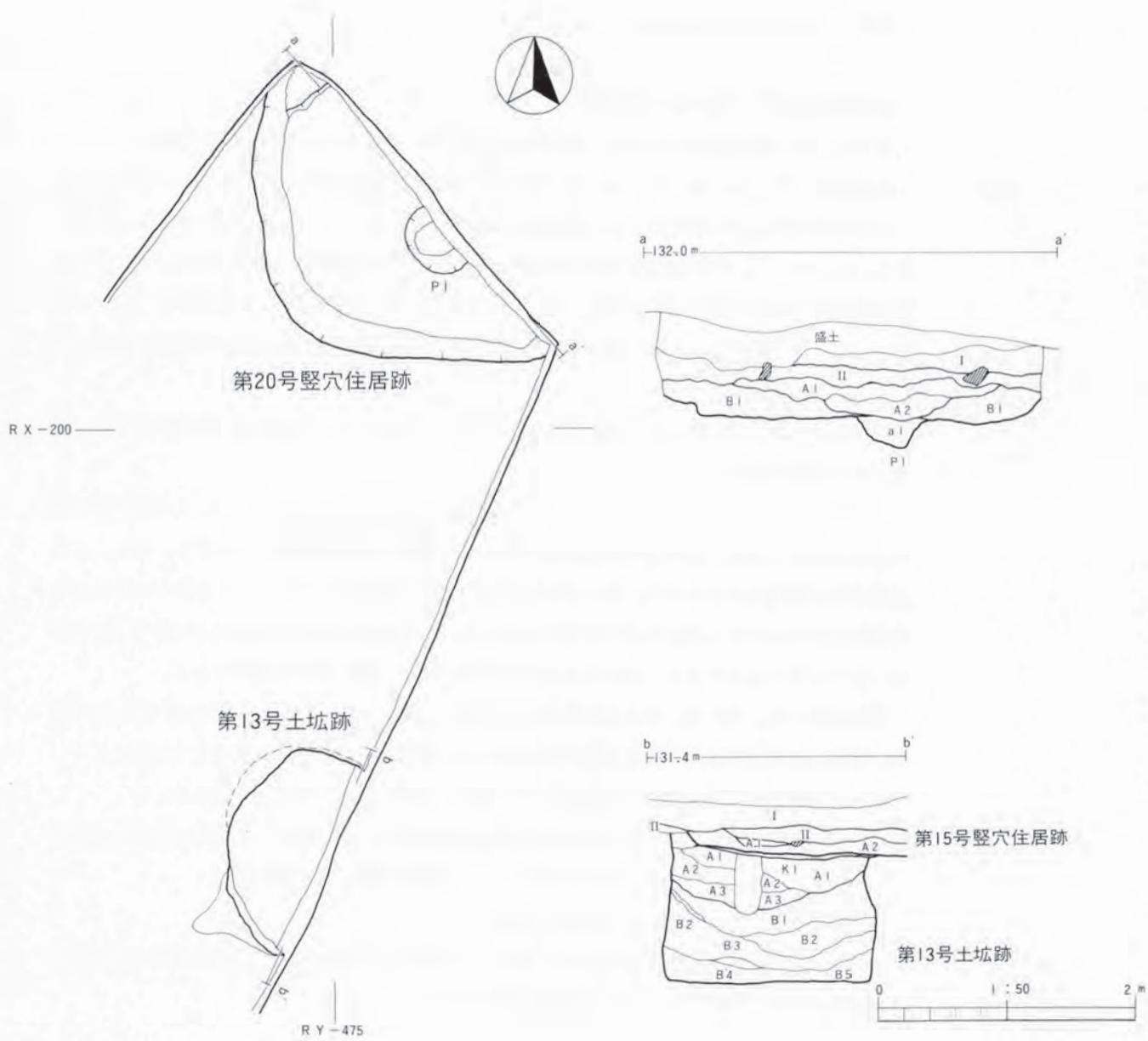
第4次調査区南半部に位置し、第16号竪穴住居跡・第9号土塙跡を切る。開口部径0.5m、深さ0.5mを計る柱穴状のピットで、しまりのない暗褐色粘質土が堆積する。第21号柱穴群などに伴う可能性が大きいが判然としないため土塙として分離した。

出土遺物は第51図7～9で、この3点は接合しないものの同一個体片である。口縁部を折り返し、体部には地文として燃りの細かい撚糸と燃りの粗い縄文を用いている。

第20号竪穴住居跡（第53図）

第4次調査区北端部に位置する。北西-南東方向に3.0m、北東-南西方向に1.4mを検出したのみで、平面形、規模、主軸方向は不明である。壁はややゆるやかに立ち上がり、深さは0.2mほどである。北西部でテラス状を呈する。埋土はA層、B層に大別される。A層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、固さは中程度でややしまりのない層である。A₁層は暗褐色土塊を多く含み、A₂層は褐色土塊を含む。B層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかく、ややしまりがない。

重複関係



第53図 第20号竪穴住居跡、第13号土塙跡

床面はやや柔らかく貼床はない。ほぼ中央部に開口部径0.3m、深さ0.1mのピットがある。埋土は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。固さしまりとも中程度である。

出土遺物は極めて少ない。第51図10は縄文原体圧痕文を施すものである。

第13号土塙跡（第53図）

第4次調査区北半部に位置する。開口部径1.6m、底部径1.6m、深さ1.15mを計る。断面形はビーカー状を呈すが、一部フラスコ状を呈する。

埋土はA層、B層に大別される。A層はやや明るい暗褐色～褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊を多く含む。下層ほど柔らかくしまりがなくなる。B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含むがあまり多くはない。いずれも柔らかくしまりのない層である。B₄層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。

遺物は縄文土器片が少量出土したが図示できるものはない。

遺構外出土遺物（第54図～第56図）

第3次、第4次調査区内の表土、攪乱層など遺構外から出土した遺物を一括した。

土器 第54図13、14、18、23、26、31、32、第55図84は縄文時代後期初頭～前葉に伴うものである。84は撲りの細い縄文を地文とし、沈線による曲線的なモティーフを施すもので、後期前葉に伴う。13、14、18、23は連鎖状文を施すもので、後期初頭の門前式に伴う。26は細い隆帶上に縄文を施すもので、後期初頭に伴う。31は隆起線を施すが、地文を施さずに器面を研磨する土器で、やはり後期に伴うものであろう。32は沈線により小さなS字文を縦位に連続するもので、後期初頭に伴う。

第54図1～10、15～17、19～22、24、25、27～30、33、34～57は縄文時代中期末葉の大木10式に伴うものである。

1、2、15～17、19～22、24、25、27～30は連続刺突文を施すものである。1は突き起し状の連続刺突文である。他のものは大半が隆起線状に円形の刺突を連続するもので、おそらくは連鎖状文の祖型なのである。34～37は磨消技法により曲線的なモティーフを描くものである。口縁部破片はいずれも横位の沈線で口縁部無文帯を区画しており、大木10式のなかでも主に中頃～後半に伴うものである。33は無文の小形土器であり、積上げ痕が観察できる。

第55図58～68、70～72、85は縄文時代中期中葉の大木8b式に伴うものである。58～68、70、71、85は隆沈線文により渦巻文や懸垂文を施す。72は沈線により有棘の渦巻文？を施す。

81～83は縄文時代中期前葉～中葉の大木7b式～大木8a式に伴うものである。

81は波頂部から垂下した隆帶上に円形の刺突を連続した施す。82は隆起線を小波状などに施す。83はやや小形の深鉢（キャリバー形？）で、縄文原体圧痕文を施す。

他のものは地文のみであり時期が不明である。

11、74、75は縄文を地文とするもの、76、80、86は撲糸文を施すもの、79は条線文を施すものである。77は底部破片であるが箒の葉の圧痕を有している。



0 1 : 3 10cm

第54図 遺構外出土遺物(1)

第55図78は磨製石斧で、非常に丁寧に整形されている。下半部を欠失している。基部にはわずかであるが使用時の敲打痕が認められる。

第56図87は木葉形を呈する石槍で上半部を欠く。石鎌に比して調整剥離がやや大きい。88、89は石鎌である。88は基部がやや丸味を帯びる三角鎌である。89は小形の柳葉形石鎌である。

90は石錐であるが尖端部から側縁にかけて調整されるが、基部はほとんど手がつけられていない。

91～93は石匙で、いずれも縦形である。91、92はわずかに屈曲した縦長のブレード状剥片を使用するもので、つまみ部の抉入以外はほとんど原形に近いものであろう。ただし、92は上から打撃されているのに対し、91は横からの打撃により得られてた剥片である。また、91は基部

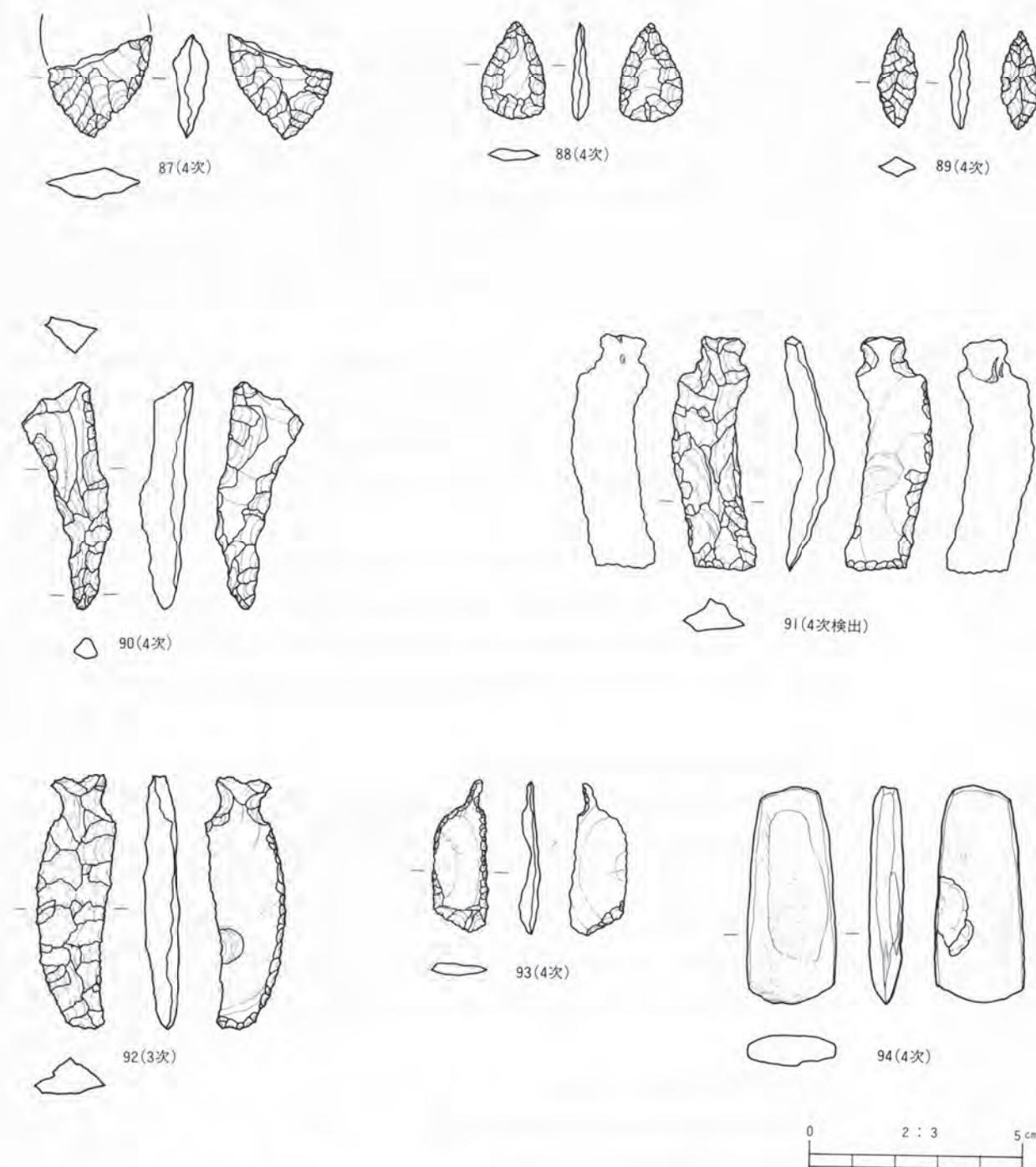


第55図 遺構外出土遺物(2)

の両面にピッチが付着している。93はやや小形であるがつまみ部があまりに細く前2者と同様に機能したかは疑わしい。

94は小形の石斧で、やや柔質の素材を用いたためにやや表面がざらついている。

石製品



第56図 遺構外出土遺物(3)

2. 崎山貝塚第4次調査

(1) 第1次～第3次調査の概要

崎山貝塚は、宮古市のコードLG14-2079、岩手県のコードLG04-2180として登録された周知の遺跡である。

貝層・自然遺物
包含層

第1次、第2次調査は貝塚の南斜面中央部において貝層や自然遺物包含層などの堆積状況等を確認することを目的として実施した。また、第2次、第3次調査に併行して南斜面のボーリング調査を実施している。これらの調査によると、南斜面には大小いつかの谷が入っており、この部分に貝層や自然遺物包含層が堆積している。保存状態の良好な層は谷頭にある。おそらく、これは当時廃棄された位置に最も近い状態であると思われる。更に斜面中部～下部にもわずかずつではあるが骨片や貝がら片などを包含する層があり、一部水田面にも達している。これら斜面中部～下部のものは上部の貝層や自然遺物包含層から流れ落ちたものである可能性は大きい。しかし、このような少量の自然遺物でさえも保存されるということは周辺の土壌が自然遺物を保存するに適した状態になっている裏づけであり、今後新たな自然遺物の集積が発見される可能性が指摘された。

第1次、第2次調査では、縄文時代前期を中心とする層から多くの骨角器類や自然遺物などが出土している。骨角類については、出土点数の少ない時期をうめる好資料といえる。また自然遺物では魚類の出土が特徴的で、特にイワシ類の出土量が注目された。

第3次調査は、地点を台地上の平坦面に移し、遺構の配置状況など集落の様子を探ることを目的とした。

集落跡

集落跡は、中央部に地山の高まりがあり、ここに立石や大小様々な土垣跡を検出した。この外側は地山が落込み、遺構が希薄となる。更に外側にはまた地山がみられ、小ピット、炉、堅穴住居跡などの遺構が検出されている。しかし、第3次調査で検出した遺構の大半は縄文時代中期中葉～末葉のもので、貝層、自然遺物包含層に伴う時期の遺構は検出されなかった。

(2) 調査の方法と目的（第57図、第58図）

本年度は第3次調査区の北東部に隣接する地点に調査区を設定した。ここでは第3次調査区同様集落跡の存在が予想されていたが、特に台地の末端部付近での遺構の広がりを確認することを目的とした。ただし、発掘調査は遺構の検出のみに留め、特に必要があるものだけを部分的に掘り下げることにした。

調査区は幅3mのトレンチをNS₁とN₂の間でE₃₉からE₄₆に、また、N₁₂とN₁₅の間でE₂₉からE₃₆にかけて、およびこれらに直交してE₃₉LineとE₄₆Lineに計4本設定している。

(3) 基本層序（第59図、第60図）

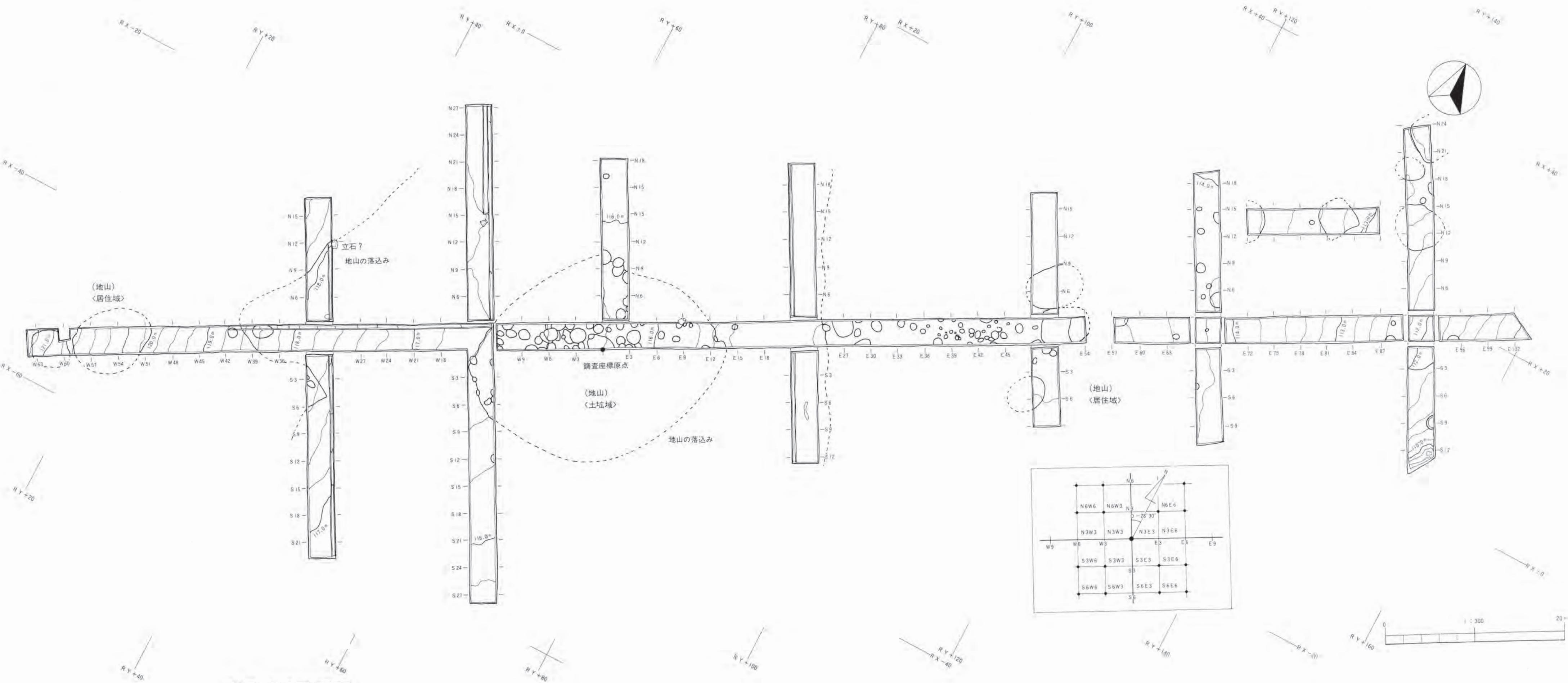
調査区内で確認された層は3層に大別される。

I層は表土であり次の2層に細分される。

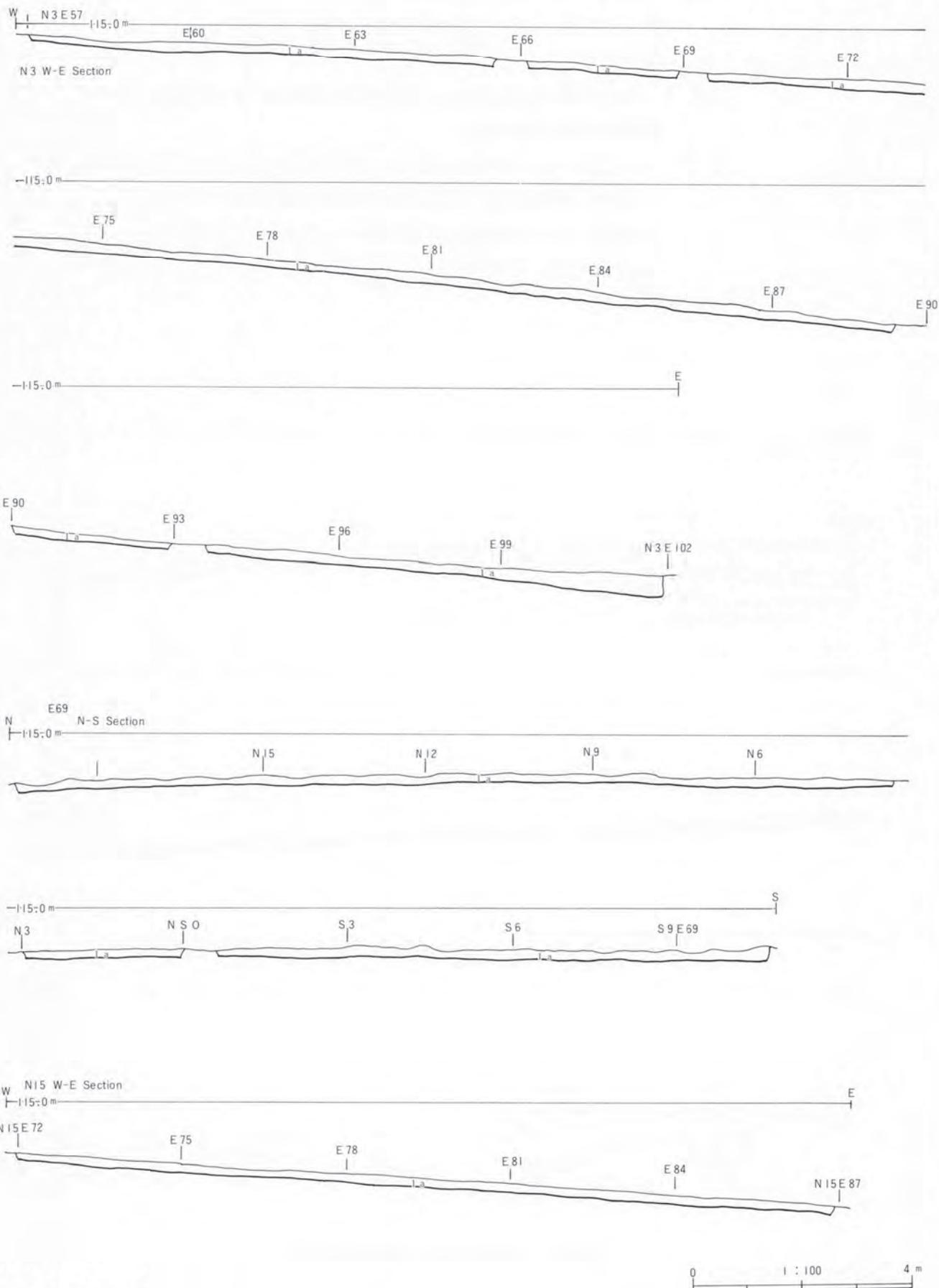
Ia層　　遺跡全体を覆う耕作土で、褐色粘質土を基本土としやや明るい褐色土塊などを含む。
やや固くややしまりがない。第3次のIa層に相当する。



第57図 嵐山貝塚周辺地形図



第58図 崎山貝塚遺構配置図

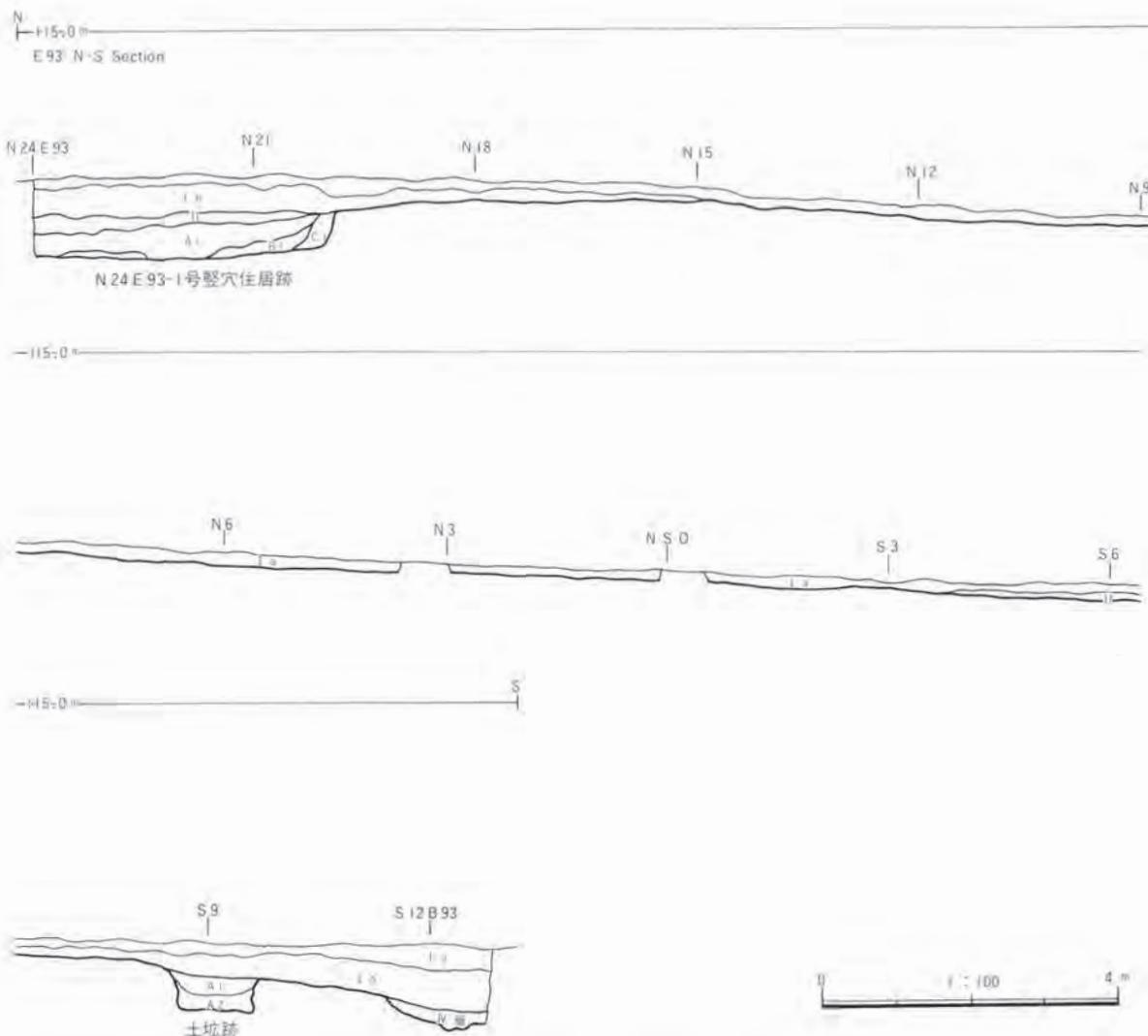


第59図 崎山貝塚第4次調査区土層

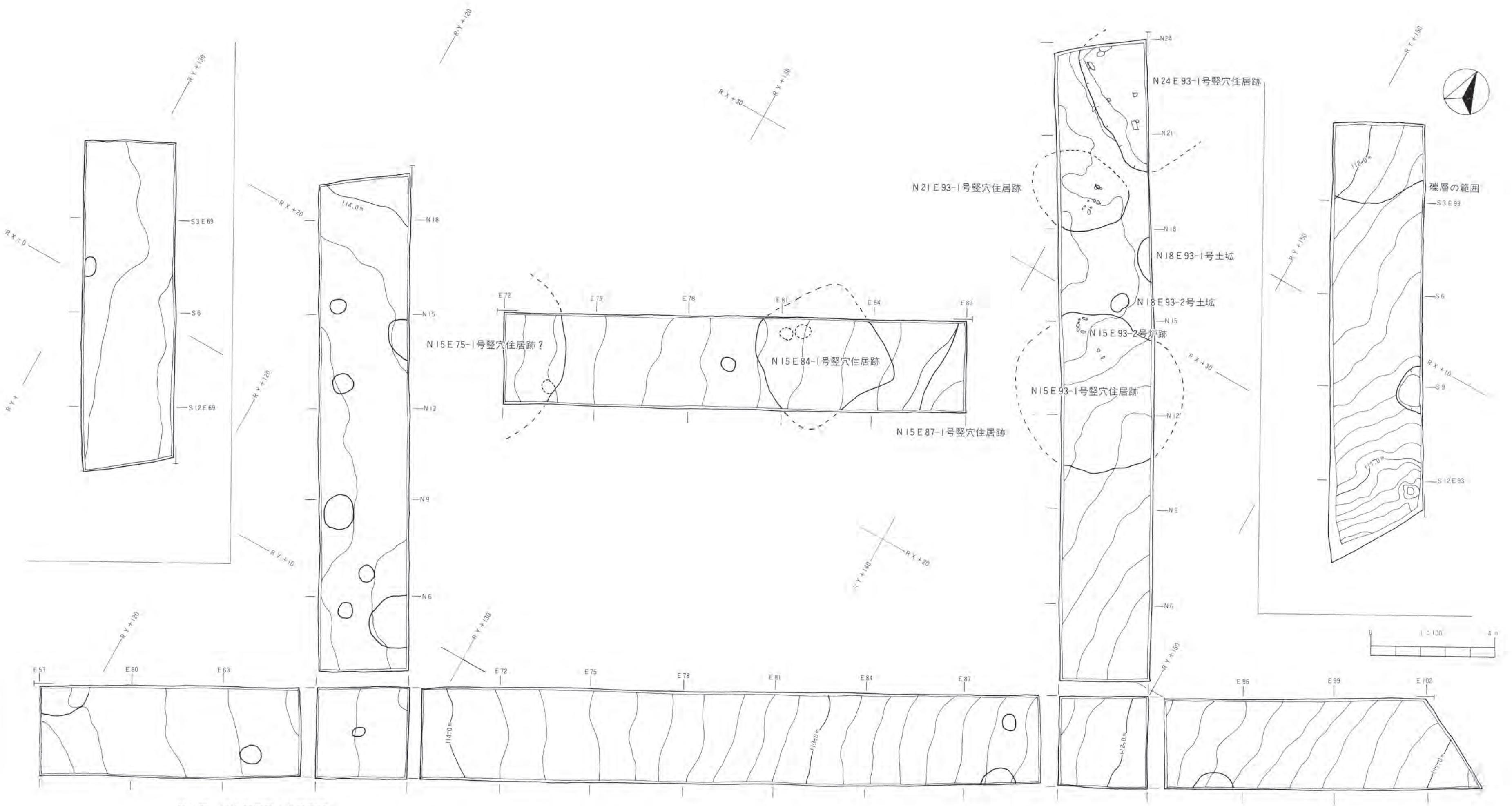
I b 層 I a 層よりやや暗く、褐色粘質土を基本土とし暗褐色土塊などを含む。固さは中程度でややしまりがない。台地平坦面の縁辺部付近に堆積し、第3次の I b 層に相当する。

II 層 暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。やや柔らかくややしまりがない。第3次の II 層に相当する。

IV' 層 E₆の S₁₂～S₁₆付近でのみ検出した。褐色粘質土を基本土とし暗褐色塊などを含む。やや固くしまり具合は中程度である。土器片を少量含む。IV' 層以下は礫層が堆積しているが、これらの層相面は凹凸が著しい。おそらく雨裂のような自然の作用によるものと思われる。第3次の IV 層に類似するが同時かどうかは不明である。



第60図 崎山貝塚第4次調査区土層



第61図 崎山貝塚第4次調査区

(4) 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は堅穴住居跡と思われるもの6棟、土坑跡（小ピットを含む）21基、石圍炉1基である。第4次調査区付近は中軸線（N S ± 0 Line）より北側に台地の頂部に集中しており、緩斜面上には遺構が少ない。

遺構の大半は検出のみに留めたため内容は不明であるが、一部土器などを伴うものもあるのでこれらを中心に記述する。

N₂₄E₉₂-1号堅穴住居跡（第61図、第63図）

N₂₄E₉₀グリッドを中心に検出した古代の堅穴住居跡である。埋土が他の遺構に比して極端に暗く遺構か谷などの自然地形か判断できなかったため、掘り下げるのこととした。

規模は南西壁が4.7mほどであり隅丸方形を呈するようである。壁はほぼ直壁で、深さ0.55mなどを計る。

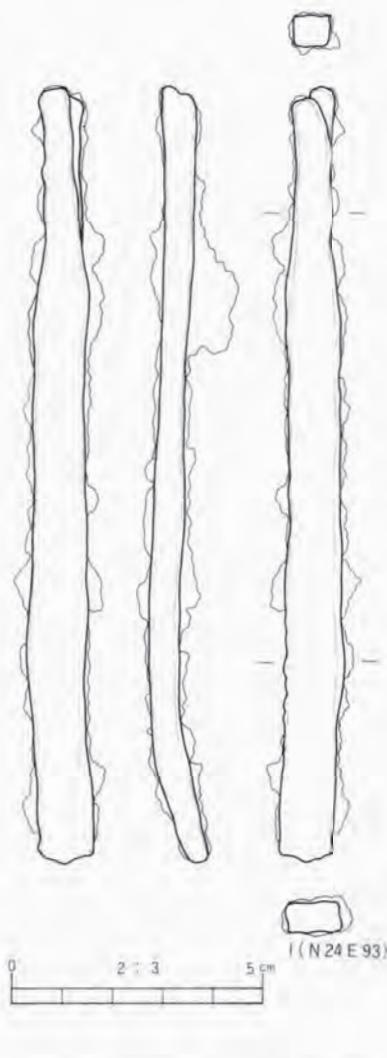
埋土はA層・B層・C層に大別される。A層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかくしまりがない。縄文時代中期の土器片を多量に含む。B層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかくしまりがない。A層との層相面付近から第62図の鉄器が出土している。また、縄文時代中期の土器片を含むがA層ほど多くはない。C層は壁際のみに堆積する層で、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。固さ、しまりとも中程度である。

床は平坦でやや固い。床面からC層にかけてやや大きな亜角礫が出土している。柱穴、かまどは調査区内にはない。

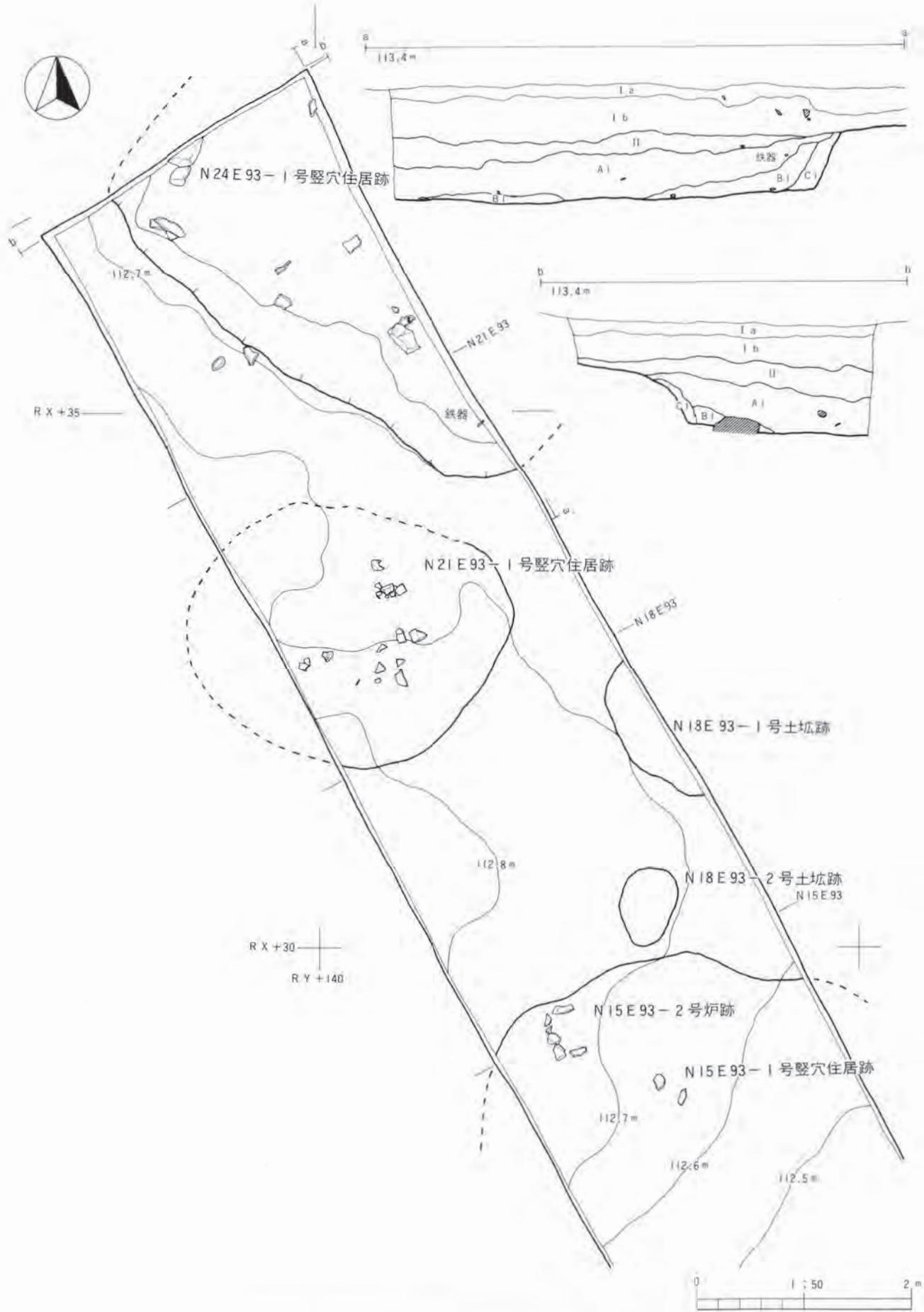
遺物はA層、B層から多くの縄文土器片が出土しているものの遺構に共伴するものではない。前述した鉄器のほか、埋土中から土師器がわずかに出土している。

第62図1は棒状（板状）の鉄器で、一方の端部をやや細くし、茎部のように作り出すが、刃部も無く用途不明である。

第64図2は土師器甕で、口縁部が強く外反し、体部が強く張り出す。口縁部の内外を横ナデにより調整している。3～6は土師器甕の体部破片で、いずれも外面をミガキにより調整している。



第62図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(1)



第63図 崎山貝塚第4次調査区北端部検出遺構配置図



第64図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(2) E 24 N 93-1号竪穴住居跡

第64図7～56はA層、B層から出土したものである。7～34、38～54は隆沈線文や沈線文により渦巻文や懸垂文を施すものなどで、大木8 b式に伴う。

35は隆帶状に刻目（刺突）を有するもの、36は沈線文を網目状に施すもの、37、55は原体圧痕文を施すもので、いずれも中期初頭に伴うものか。56はやや細い隆帶状に原体圧痕文を施し、円筒上層d式に伴う。

第68図107は石槍である。110は石鎌の基部破片である。113と117は石匙であるが、113は横形、117は縦形である。117は両面ともにピッチが付着している。114は削器で側縁を刃部とする。第67図104は磨製石斧であるが器面に敵打痕を残す。

N₂E₂-1号竪穴住居跡（？）（第61図、第63図）

N₂E₂グリッドを中心に検出した遺構で、竪穴住居跡と思われる。平面形は不整だ円形を呈するものと思われる。調査座標の南北方向でおよそ2.6mほどを計り、やや小形である。埋土中に粉碎された貝がらや獸骨片などを含む。検出面から遺物がまとまって出土している。

第65図61は体部上半が強く膨らむ深鉢で、口縁部上端の隆帶上に連続刺突文を施す。また、この隆帶上には粘土紐の貼付けによる円形文を4単位施すが、このうち1単位のみが大きく、小突起状となり、以下2条の隆帶が垂下する。他の円形文の下部には八字形の隆帶が垂下する。地文はL-R単節斜繩文を横方向に回転する。

57、59、60は61同様の連続刺突文を施す隆帶を張り付ける。59の地文には綾絡文を施文している。58は口縁部の隆帶上にも繩文を施すものである。62は波頂部破片、63はノ字形？の隆帶を施すもの、69は沈線文を施すものである。67、68は網目状撚糸文を地文とするものである。他のものは地文のみであるが、65、70などは口縁部を折り返している。これらの遺物はいずれも大木7 a式に伴う。

第68図112は削器と思われる。先端部が尖り、尖頭器様でもあるが薄い。

N₂E₂-1号竪穴住居跡（？）（第61図、第63図）

N₂E₂グリッドおよびN₂E₂グリッドにて検出した遺構で、竪穴住居跡と思われる。径5.2mほどの不整円形を呈するものと思われる。N₂E₂-2号炉跡に切られる。

検出面から第66図74～78が出土している。74は広口の壺形土器で、体部文様帶に磨消技法によりU字形の繩文区画を施す。また、この間には円形の繩文区画と孤状の隆起線を交互に配す。口縁部は無文帶となり、体部との境界に3条の隆起線をめぐらす。大木9式に伴う。

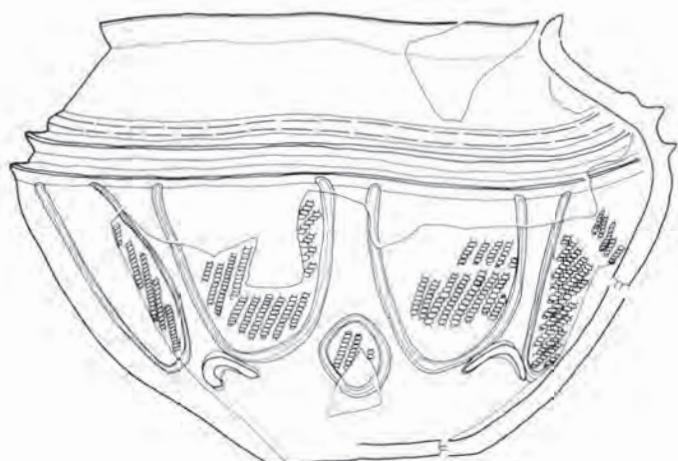
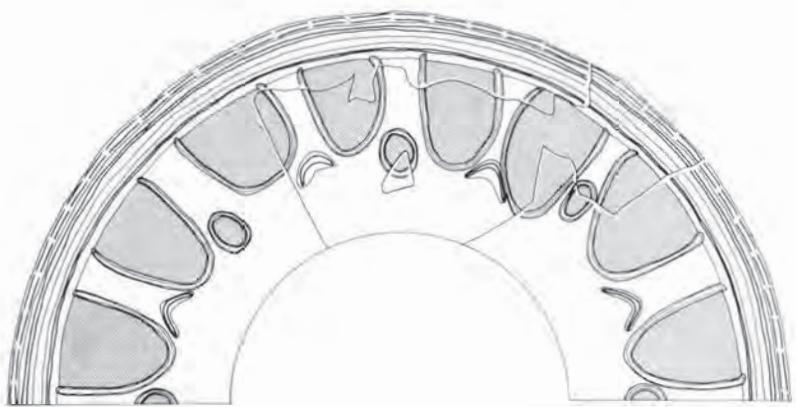
75、76は隆沈線により施文され、大木8 b式に伴う。77は胎土に植物纖維を含むもので、前期前半に伴う。78は体部下半～底部の破片である。

N₂E₂-2号炉跡（第61図、第63図）

N₂E₂グリットおよびN₂E₂グリットにて検出した。N₂E₂-1号竪穴住居跡より新しい。石門炉で、東辺は炉石が欠落している。抜きとり穴は確認できなかった。南北0.5m、東西0.3mを計る。



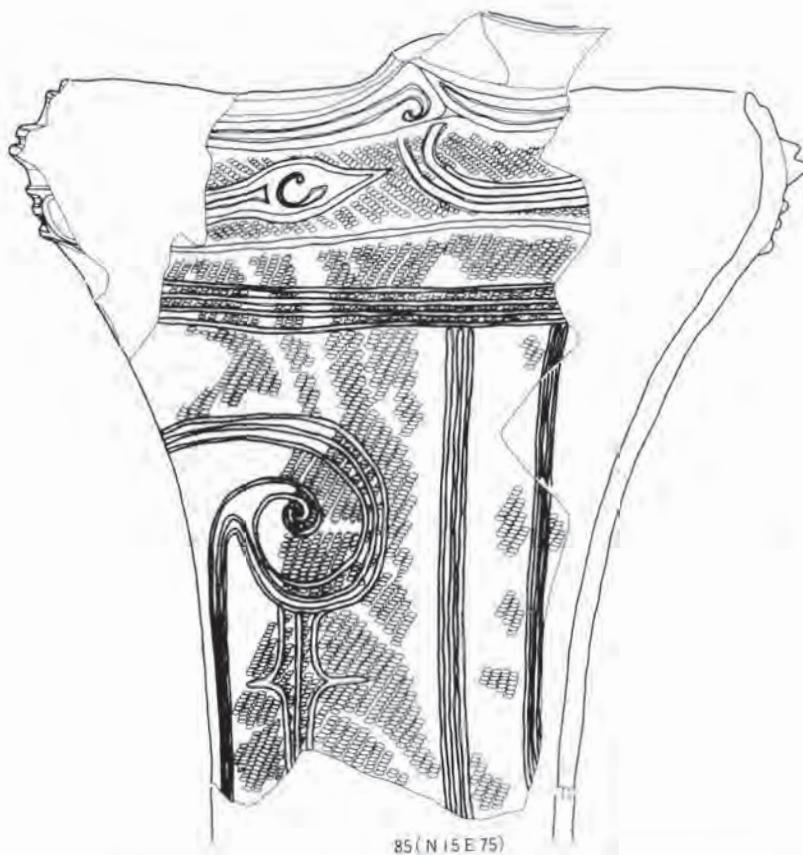
第65図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(3)
N 24 E 93-1号竪穴住居跡
N 21 E 93-1号竪穴住居跡



74 (N12E93)



78 (N15E93)



85 (N15E75)



79 (N15E75)



80 (N15E75)



81 (N15E75)



82 (N15E84)



83 (N15E87)



84 (N15E87)

0 1 : 3 10cm

第66図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(4)

N15E93-1号竪穴住居跡、N15E75-1号竪穴住居跡
N15E84-1号竪穴住居跡、N15E87-1号竪穴住居跡

N₁₅E₇₈—1号竪穴住居跡（?）（第61図）

N₁₅E₇₈グリッドに検出した。東西2mを検出したのみで、平面形、規模は不明である。

検出面から第66図79～81、85が出土している。85はキャリバー形深鉢で、口縁部に把手を有するが欠落している。口縁部文様帶には隆沈線により有棘渦巻文を施すが開放的である。体部文様帶には平行沈線文により大渦巻文などを施すがやはり開放的である。79、81も同様にキャリバー形深鉢であり隆沈線による施文などがみられる。83は沈線上に連続刺突文を施す。これらは大木8b式に伴うがやや古手である。

N₁₅E₈₄—1号竪穴住居跡（?）（第61図）

N₁₅E₈₄～E₈₆グリッドにかけて検出した竪穴住居跡と思われる遺構である。1辺が3.8～3.9mほどの隅丸方形を呈するものと思われる。

出土遺物はわずかである。第66図82は沈線により渦巻文を施す。

第68図108は石鎌であるが、木葉形で肉厚である。

N₁₅E₈₇—1号竪穴住居跡（?）（第61図）

N₁₅E₈₇グリッドに検出した竪穴住居跡と思われる遺構である。平面形、規模とともに不明である。

出土遺物はわずかである。第66図83、84はいずれも隆沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。

土塙跡についてはE₈₈～E₉₀Line付近にやや集中する傾向があるものの詳細は不明であるために説明を省略する。

(5) 遺構外出土遺物（第67図）

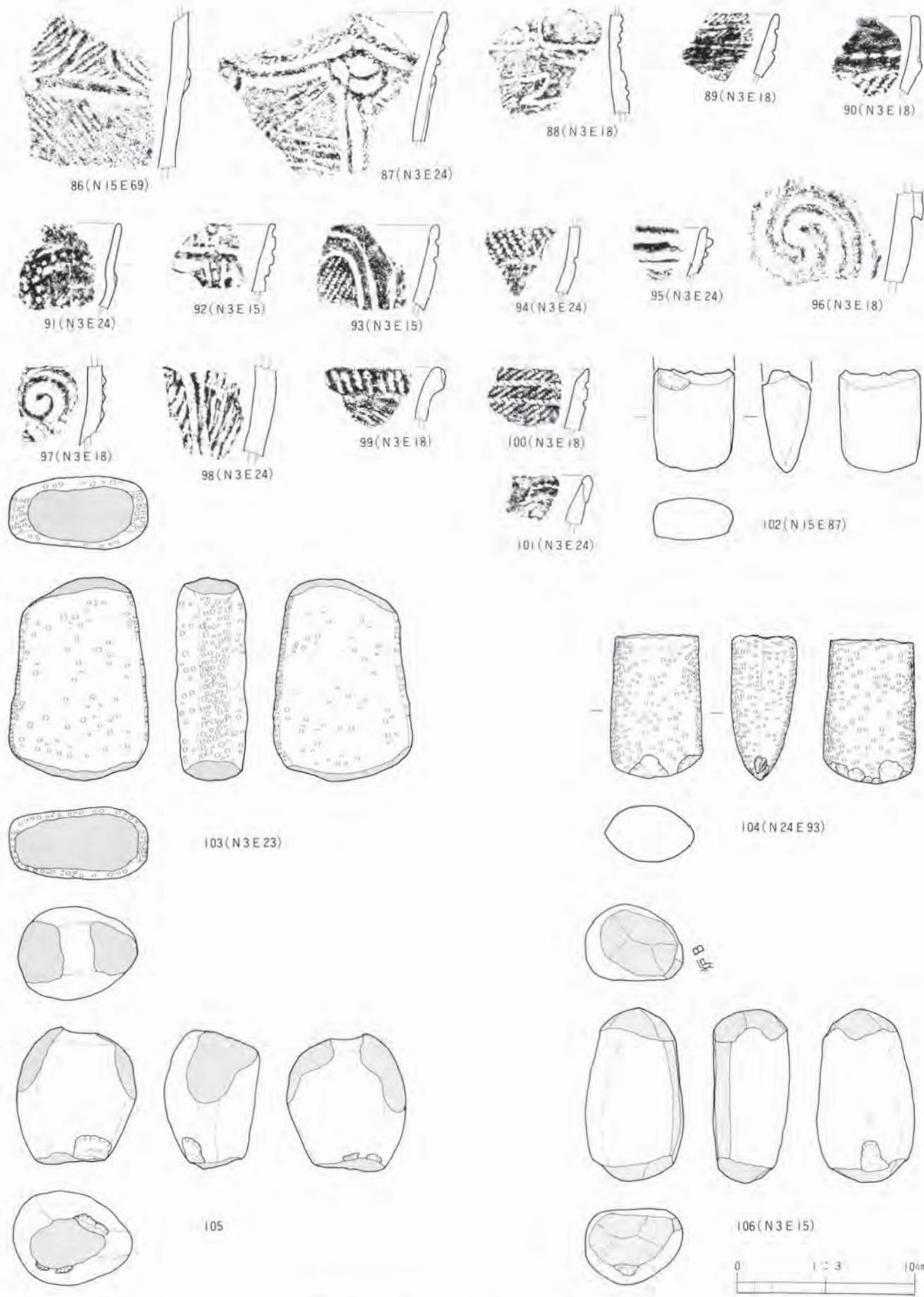
第67図87～89は縄文時代後期に伴うものである。89は波状口縁を呈し、縄文を伴う隆帶により区画され、区画内部に沈線や原体圧痕による施文がみられる。

90～92は刺突文を施すもので、縄文時代中期後半に伴うものであろう。93、94は磨消技法により施文され、大木9式～大木10式に伴う。86、95～98は隆沈線や沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。99～101は縄文原体圧痕文を施し、中期前半に伴うものであろう。

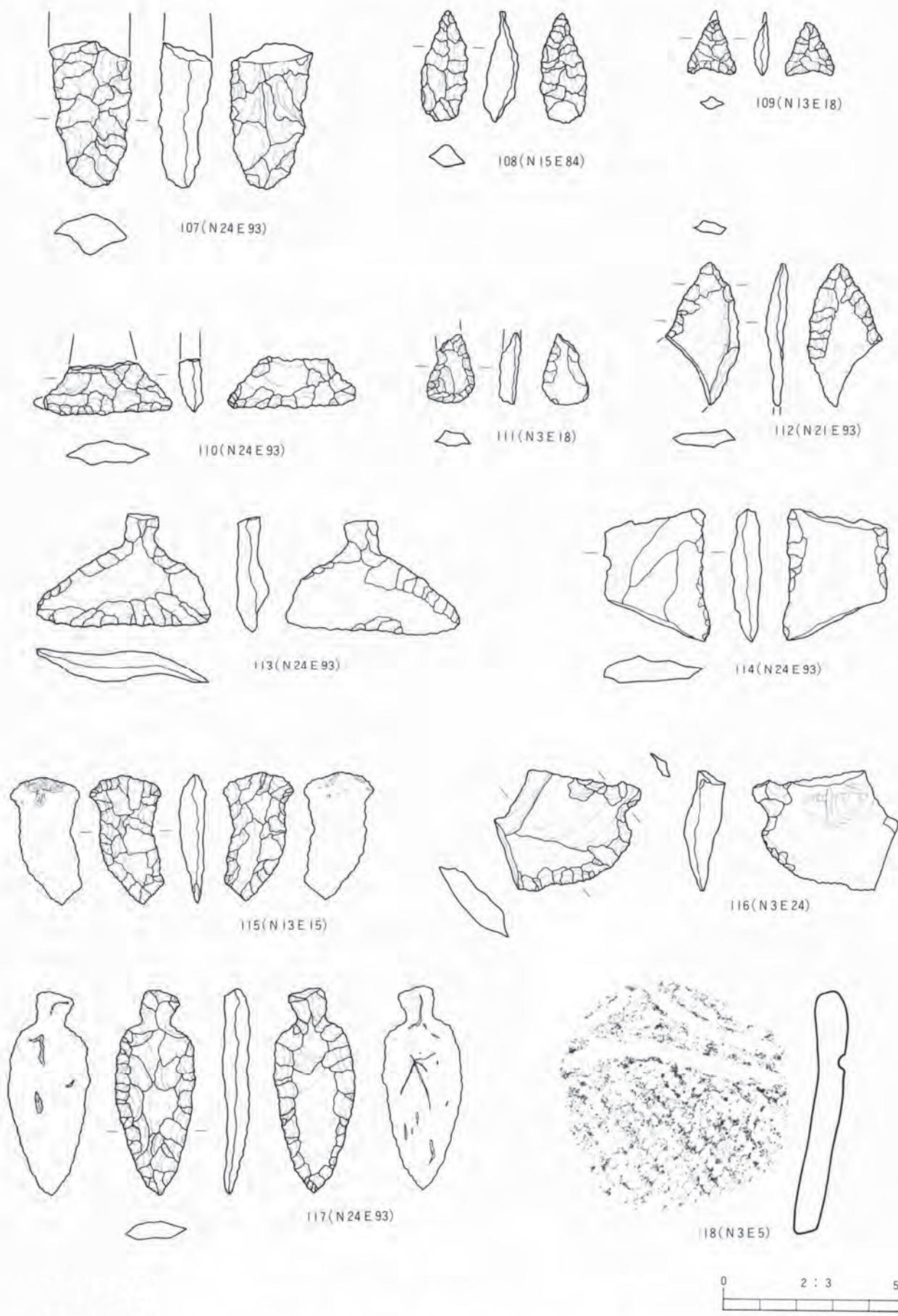
第68図109は石鎌である。111は小形の搔器かと思われる。115は縦形石匙で、基部にピッチが付着している。

第67図103、105、106は敵打磨石類で、いずれも縦長の扁平礫の両端に機能磨面を有する。103は側面に敵打痕が伴う。105は使用時のものと思われる剥離がみられる。106は小さく面取りされたような機能磨面を有する。

第68図118は土製円盤であるが、磨消技法による施文がみられ、大木9式かと思われる土器片を使用している。



第67図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(5)



第68図 崎山貝塚第4次調査出土遺物(6)

3. 剥片接合資料について（第69図、第70図）

白石遺跡第17号竪穴住居跡の柱穴P₁の掘り方から魚骨片や炭化物粒などとともに26点の剥片が出土している。これらは頁岩や鉄石英などを素材とするもので、母岩別に分類すると6個体くらいに分けられそうである。このうち鉄石英の剥片が12点あり1点を除き接合している。また、同一母岩の石核が同じ第17号竪穴住居跡の埋土C₁層の床面に近いレベルから出土しており前述の剥片と接合している。さらに、接合はしていないが鉄石英の剥片が第8号竪穴住居跡の埋土と第15号竪穴住居跡の埋土からそれぞれ1点ずつ出土しているが、これらも同一母岩である可能性がある。

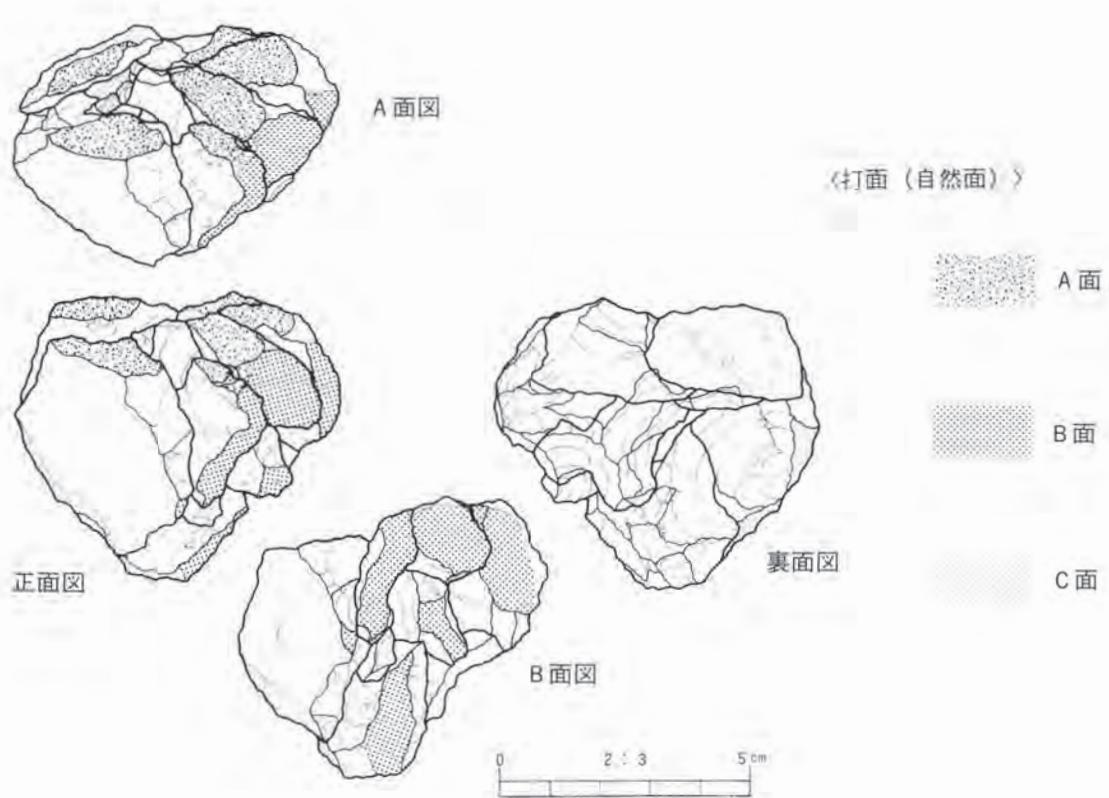
接合資料は原石面の残存率が比較的高く、原石はやや扁平の隅丸三角形を呈する。計測値は縦6.1m、幅6.7m、厚さ3.9mとやや小形である。

原石の主な打面は3面あり、A面、B面、C面と呼称した。いずれも自然面であり、A面とB面を中心に剥片がとられている。

剥片の剥離作業は技法としては極めて単純で、ほとんど打面は作らずに原石面をそのまま打撃する。最初の打撃はC面になされ、次にA面に移り、さらにB面へ移り、最後にA面へもどっている。この工程を第70図で説明する。小さな剥離は一部省略した。

第1-1工程（第70図1）C面でやや大き目のC-1 flakeを剥離させた後にA面に打点を移し、A面左上に加撃しA-1 flakeを剥離させる。C-1 flakeは残存しない。

第1-2工程（第70図2）A面左端に打点を変え、小さな剥片A-2 flakeを剥離させた後、



第69図 第17号竪穴住居跡出土剥片接合資料実測図



第70図 第17号竪穴住跡出土剥片接合資料剥離作業過程図

0 2 : 3 10cm

順次打点を右側へ移しながら小さな剥片A-3～A-6 flakeを剥離させ最後にA面右端よりA-7 flakeを剥離させる。A-2～A-6 flakeは残存しない。

第1-3工程（第70図3）打点をA面左側へ移し小さな剥片A-8、9 flakeを剥離させる。

第1-4工程（第70図4）打点をA面右側へ移しやや大き目の剥片A-10、11flakeを剥離させる。

第2-1工程（第70図5）打点をB面に移し、B面図右上に加撃しやや大き目の剥片B-1、2 flakeを剥離させる。打点はB-2 flakeに2点あり、一度の打撃で剥離しきれず再度加撃したようである。

第2-2工程（第70図6）打点をB面図左下に移しB-3 flakeを剥離させる。

第2-3工程（第70図7）B面ほぼ中央で小さな剥片B-4 flakeを剥離させる。B-4 flakeは残存しない。

第3-1工程（第70図7）A面ほぼ中央に打点を戻し小さな剥片A-12flakeを剥離させる。A-12flakeは残存しない。

第4-1工程（第70図7）再度B面に打点を移し、B面左下に加撃し小さな剥片B-5 flakeを剥離させる。

第4-2工程（第70図8）B面左下端に加撃し小さな剥片B-6 flakeを剥離させる。B-6 flakeは残存しない。

第5-1工程（第70図8）またA面に打点を移し、A面ほぼ中央に加撃しA-13flakeを剥離される。この後、やや左側に打点を移しA-14flakeを剥離させる。A-14 flakeは残存しない。

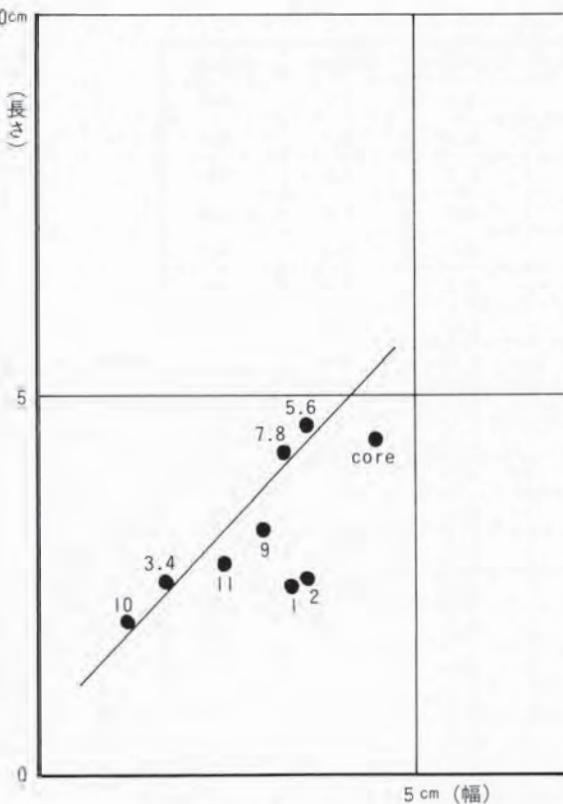
第6工程（第70図9）石核の剥離面を打点として2点の剥片がとられる。

以上であるが、基本的には各打面での剥離作業は打点を左右ジグザグに移動させながら進んでいく様である。この剥離作業によって得られた剥片は大きさ、形態ともに不均一であり、剥片の長幅比もまばらな分布を示している。

最後にこれらの作業によって得られた剥片の使用状況であるが、現存する剥片で刃部の調整剥離を施しているものはA-1 flakeとA-8・9 flakeの2点のみである。

A-1 flakeは削器で、両側縁の主要剥離面にわずかな調整剥離を有する。

A-8・9 flakeは搔器で、一方の側縁に調整剥離を施し鈍い角度の刃部を作り出す。なお、A-8とA-9は、この調整後に折損している。



第70図 接合剥片長幅比

4. 扁平円礫について（第72図～第11図）

今年度の調査で、白石遺跡および崎山貝塚から多量の浜石が出土している。これらは過去の調査においても比較的多量に出土する例が多くあったが、いずれも使用痕、加工痕、調整痕などの痕跡が器面に残っていないために自然石として調査報告からは除外していたものである。

但し、使用痕などの痕跡のあるものについては石器として報告してある。

白石遺跡第3次調査で、第10号竪穴住居跡のほぼ床面上に長径5～6cm程度、重量100～160g程度を中心とするやや小さ目の浜石が20個集積していた。今までにあまり例を見ない出土例であったために、今回この浜石に注目してみることにした。

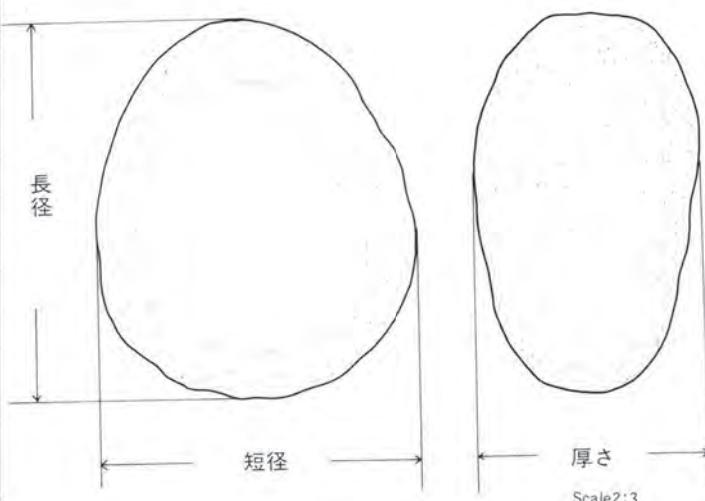
白石遺跡などから出土する浜石は、形態が円形～だ円形を呈し、長径、短径に比して厚さがやや小さな値となるものが多く、扁平な円礫となるものが多い。また、重量は10g程度から2kg以上までとばらつきがある。

石材はやや白い色調を呈する花崗岩系統のものと、暗緑色を呈する安山岩系統のものの2種類が中心となり、やや密で硬質のものが主体となる。表皮は極めて平滑で、風化しているものは無い、このような浜石は崎山地区のみならず、周辺の海岸に普通に分布しており容易に採集できる。しかし、崎山地区の遺跡周辺の基盤は安山岩が多く、これが風化し粘土質となり地山層を形成している。これらの層は原地山層と呼ばれているが、この層に含まれる礫は角礫～亜角礫が一般的でいずれも表皮が風化している。従って、基盤岩～地山層に含まれる礫とこの浜石は明確に区分される。また、遺跡内の未攢乱層から多量に出土しているということは、こ

れらの浜石が、縄文時代の人々によって何らかの目的により遺跡内に持ち込まれたものと言える。

この自然礫を海岸に自然状態に存在する浜石と区別するために、また、形態や重量にばらつきがあるものの最も一般的形態である第10号竪穴住居跡床面一括出土資料に代表させて、以後は扁平円礫と呼称する。

No.	長径(長さ)cm	短径(幅)cm	厚さcm	重量g
1	5.7	5.2	2.9	120
2	6.3	5.7	3.1	160
3	5.9	5.4	3.9	150
4	6.0	5.0	3.2	140
5	5.6	4.7	4.0	140
6	6.0	5.1	3.3	150
7	5.4	4.4	2.8	110
8	5.8	5.7	2.9	140
9	6.6	5.4	2.8	150
10	5.7	5.5	2.5	110
11	5.7	5.1	2.7	120
12	5.4	5.1	3.3	130
13	5.7	5.3	2.7	120
14	5.6	4.9	3.5	140
15	5.5	5.4	3.6	160
16	5.3	4.7	3.0	100
17	6.1	4.8	2.9	120
18	2.5	1.9	1.6	10
19	4.2	3.9	1.7	40
20	5.2	4.5	3.6	130



第1表 第10号竪穴住居跡一括出土扁平円礫集計表

第72図 扁平円礫実測図（第1表No.11）

宮古市内の遺跡で扁平円礫が遺跡内に持ち込まれて使用される状況としては、遺物として使用される場合と遺構の一部として使用される場合が確認されている。

前者は敲石、磨石、凹石、敲打磨石類や礫器（チョッパー）などの石器として使用されたもので、いずれも明瞭な使用痕や調整痕がある。

後者は最も一般的のが炉石の一部に使用された例で、これ以外には集石や配石など的一部分に使用された例がある。しかし、炉石の場合については扁平円礫のみで炉を構成する例は無く、角礫や亜角礫で構成した炉の一部に扁平円礫がまじる程度で、大半の石器炉は角礫や亜角礫のみで構成され、扁平円礫を使用しない例のほうが多いと言える。また、集石や配石などの場合も同様に扁平円礫のみを使用する例は無く、角礫や亜角礫に扁平円礫が混入する程度である。

このように扁平円礫が遺物や遺構の一部として使用される例は少なく、ほとんどの扁平円礫は土器片や石器などの他の遺物同様に遺跡内に一見無秩序に散乱しており、使用痕も無いまま自然礫の状態で廃棄されている。

更に、遺跡間による隔差であるが、過去の調査例では白石遺跡・崎山貝塚・大付遺跡（以上崎山遺跡群）、鍬ヶ崎館山貝塚・重茂館遺跡群・千鶴遺跡などの沿岸部の遺跡には多く集中する傾向があり、逆に内陸部の高根遺跡（山口）などでは敲打磨石類や礫器（チョッパー）などの石器として使用されたもの以外にはほとんど扁平円礫は出土していないようである。

ここでは、遺跡内に持ち込まれた扁平円礫の長径と重量に着目し、何らかの規則性が見出せるか否かを、遺跡間の比較により検討してみることとする。

次にこの扁平円礫の分析についてであるが、計測方法については第72図に示したが、ものによっては球形に近い形状のものもあるため、最も数値の大きい計測点を長径とし、これに直交する計測点で数値の大きいほうを短径、小さいほうを厚さとした。

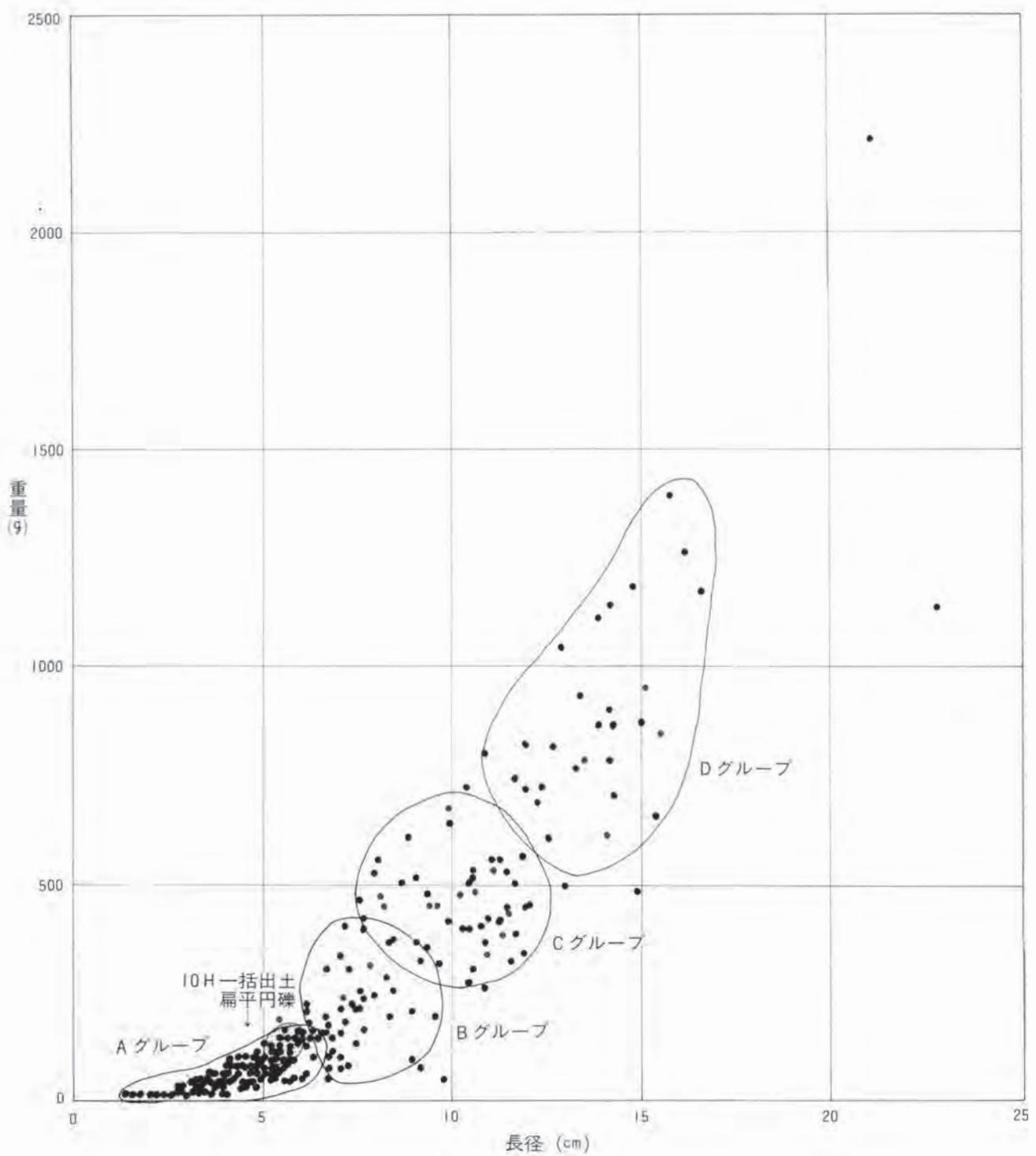
分析の対象とした扁平円礫は白石遺跡第3次、第4次調査区内から出土したものすべてと崎山貝塚第4次調査区内から出土したものすべてであるが欠損品は除外している。前者はおおむね縄文時代中期末葉（大木10式）～後期初頭に伴うもので、後者は縄文時代中期（ほぼ大木7a式～大木9式）に伴うものである。更に対比資料として平成元年度に調査を実施した鍬ヶ崎館山貝塚出土資料のうち縄文時代中期（ほぼ大木8a式～大木8b式）の遺構に伴うものも対象とした。

第73図は白石遺跡出土の扁平円礫352点を計測し、縦軸に重量を、横軸に長径をとって図化したものである。扁平円礫を黒のドットで表現している。また、このうち、敲石や敲打磨石などの石器として使用されたものは赤いドットで表現している。また、第10号堅穴住居跡の床面から一括して出土した扁平円礫は赤いアミで表現している。白石遺跡から出土した扁平円礫は重量で1,400g、長径で17cm以内にほぼ収まっている。更に、分布の粗密などからいくつかのグループに分けられそうである。

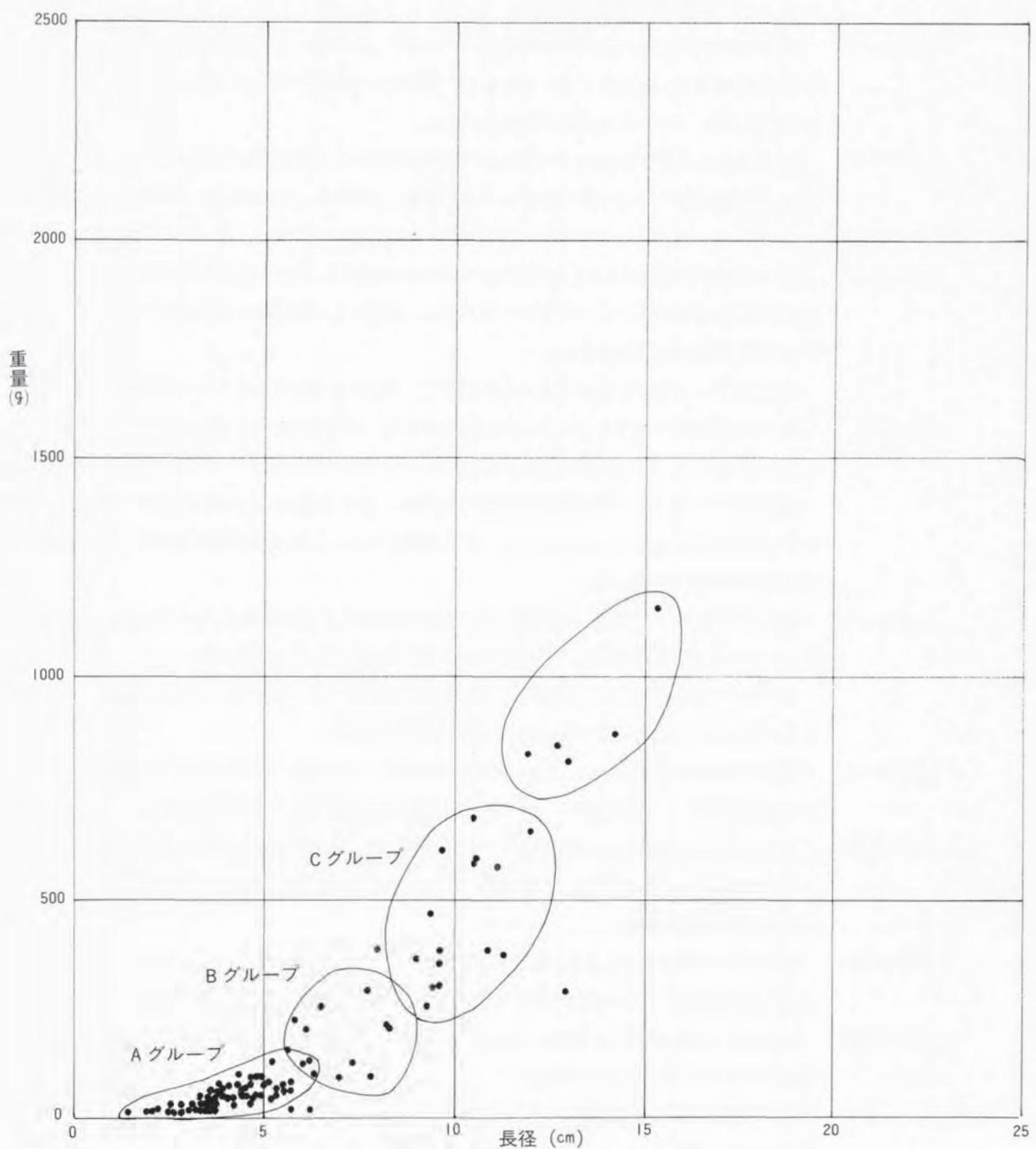
重量ではほぼ200g未満、長径では6.8cm未満に密集する一群をAグループとした。長径2cm未満の非常に小さなものまで含まれるが、ほぼ2.5cm～6.8cmのものが多い。第10号堅穴住居跡の床面一括出土資料はこの一群のやや上位のランクに含まれている。Aグループでは石器として使用されるものはほとんど無い。

白石遺跡

Aグループ



第73図 白石遺跡出土扁平円礫



第74図 崎山貝塚出土扁平円礫

Aグループより数値の大きなものをB～Dグループの3群に分けたが、Aグループほど集中せず、やや散満で且つ連続的である。

Bグループ 重量が180g付近を中心とし50g～400gの範囲で、長径が8cm付近を中心とし6cm～9.8cmの範囲に分布する一群をBグループとした。石器として使用されたものを含み、数値の小さいものが敲石で、大きいものが敲打磨石類である。

Cグループ 重量が500g付近を中心としほぼ250g～700gの範囲で、長径が10cm付近を中心とし7.5cm～12.5cmの範囲に分布する一群をCグループとした。石器として使用されたものを最も多く含む一群であるが、ほとんどは敲打磨石類や敲石などである。

Dグループ 重量が900g付近を中心としほぼ530g～1450gの範囲で、長径が14cm付近を中心とし11cm～17cmの範囲に分布する一群をDグループとした。石器として使用されたものを4点含むがやはり敲打磨石類や敲石などが多い。

以上Dグループより数値の大きいものは稀で、石器として使用されたものは無い。

崎山貝塚 次に崎山貝塚より出土したものは第73図に示した。白石遺跡よりも出土点数はやや少なく、115点を計測した。白石遺跡同様に扁平円礫を黒で、石器を赤で表示したものが第74図である。

崎山貝塚から出土した扁平円礫は重量で1,200g、長径で16cm以内にはほぼ収まっている。更に分布の粗密などからA～Dの4グループに分類される。これは基本的には白石遺跡の分布状況に類似するものと言える。

Aグループ 重量でほぼ150g未満、長径でほぼ6.5cm未満に密集する一群をAグループとした。長径で2.5cm～6.5cmに特に集中する。石器として使用されたものは含まれていない。

Aグループより数値の大きなものを白石遺跡同様にB～Dグループの3群に分けたが、やはりAグループほど集中せずやや散満で連続的な分布を示す。

Bグループ 重量がほぼ200gを中心とし50g～360gの範囲で、長径がほぼ7.5cmを中心とし5.6cm～9cmの範囲に分布する一群をBグループとした。石器として使用されたものはふくまれていない。

Cグループ 重量がほぼ500gを中心とし220g～720gの範囲で、長径がほぼ10gを中心とし8cm～12.5cmの範囲に分布する一群をCグループとした。石器として使用されたものを3点含むが、いずれも敲打磨石類である。

Dグループ 重量がほぼ980gを中心とし750g～1,200gの範囲で、長径がほぼ13.5cmを中心とし11cm～16cmの範囲に分布する一群をDグループとした。石器として使用されたものは含まれていない。

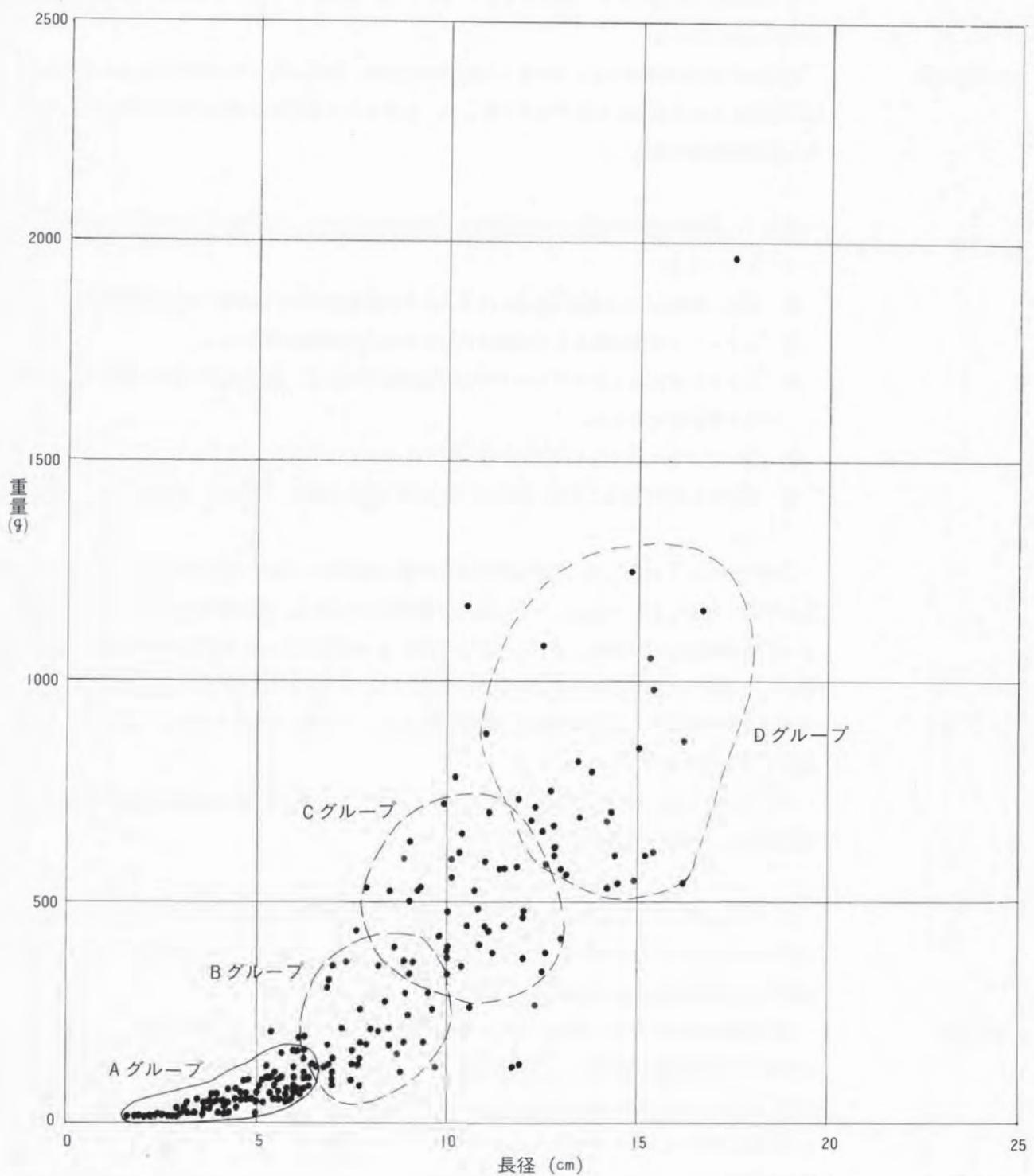
鍬ヶ崎館山貝塚 最後に鍬ヶ崎館山貝塚より出土したものを第74図に示した。381点を計測したが、古代の遺構に伴うものなどは除外してある。

白石遺跡や崎山貝塚同様に数値の小さいグループをAグループとし、これより大きいものをB～Dグループとした。これは、基本的に前述の2遺跡に類似している。

Aグループ 重量でほぼ180g未満、長径でほぼ6.6cm未満に密集する一群をAグループとした。長径で2.5cm～6.6cmに特に集中する。石器として使用されたものは含まれていない。

Bグループ 重量が200gを中心としほぼ50g～450gの範囲で、長径がほぼ8cmを中心とし6cm～10.1cmの範囲に分布する一群をBグループとした。石器として使用されたものを3点含むが、いずれも敲打磨石類である。

Cグループ 重量がほぼ500gを中心としほぼ280g～760gの範囲で、長径がほぼ10.5cmを中心とし7.7cm



第75図 鍬ヶ崎館山貝塚出土扁平円礫

～12.9cmの範囲に分布する一群をCグループとした。石器として使用されたものを2点含むが、いずれも敲石である。

Dグループ

重量がほど900gを中心とし500g～1300gの範囲で、長径がほぼ14.5cmを中心とし11cm～18cmの範囲に分布する一群をDグループとした。石器として使用されたものを7点含むが、いずれも敲打磨石類である。

以上、3遺跡の扁平円礫は非常に類似した出土状況を呈しているが、これを整理しておくと次のようになる。

- ① 重量、長径とも最も数値の小さいAグループに分布が集中しており、最も出土点数が多い。
- ② Aグループでは石器として使用されるものは基本的には含まない。
- ③ Aグループより上位のグループでは連続的な変化及び、散満な分布ながらB～Dグループの3群が想定される。
- ④ B～Dグループは各々石器として使用されたものを少量ふくんでいる。
- ⑤ 重量で1,450g以上、長径で18cm以上の扁平円礫は稀で、石器として使用されたものもない。

これらから言えることは、扁平円礫はある一定の規格のもとに、複数の目的で遺跡内に持ち込まれたようである。つまり、一定の規格とは重量で1,450g、長径で18cm未満であり更にいくつかの段階に細分される。また、複数の目的とは（今回分析した3遺跡のみに限定し）B～Dグループについては敲打磨石類、敲石、磨石、凹石、礫器として使用されたものを含むために、これらの石器との関係を考慮する必要があるが、Aグループについては、これらの石器とは全く無関係であると言える。

つまり、Aグループの扁平円礫はこれらの石器の敲く、磨る作業や凹石の機能部（凹部）の形成に対して十分な重量や厚さを持っていない。

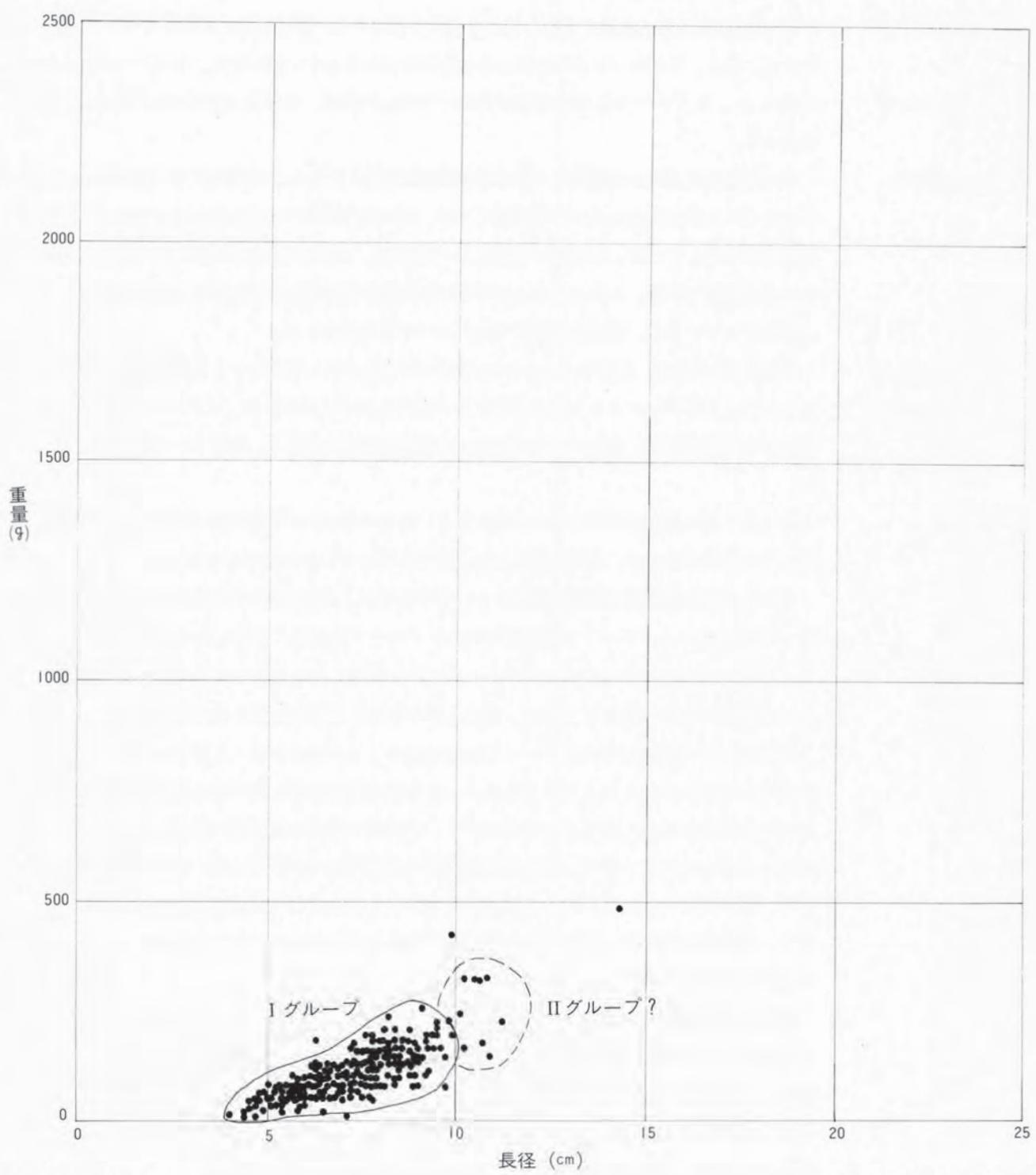
ここで、Aグループの扁平円礫が何らかの道具（あるいはその一部）として遺跡に持ち込まれたものだとしたら、白石遺跡、崎山貝塚、鍬ヶ崎館山貝塚の3遺跡での石器組成でいずれも欠落している礫石錘に相当する可能性が最も高いように思われる。

礫石錘

宮古市内の遺跡からは、現在のところ礫石錘の出土は皆無と言って良い状態である。周辺の状況では、野田村根井貝塚、大槌町崎山弁天遺跡でも礫石錘は出土していない様である（註1）。また、陸前高田市内の遺跡では全く出土しない例と、わずかに出土する例があるとのことで、いずれにしろあまり多くは出土していない様である。（註2）。一方、岩手県内陸部では極めて多量の礫石錘を出土する遺跡の存在が知られている。これらの多くは北上川と共に注ぐ支流の流域に分布している。このうち鳩岡崎遺跡と蔵内遺跡の2遺跡に対して、白石遺跡などと同様な分析を試みた。

鳩岡崎遺跡

鳩岡崎遺跡は北上川最大の支流和賀川と北上川の合流点付近に立置する遺跡であるが、昭和48～50年度の調査では縄文時代前期末～中期初頭の集落に伴い多量の礫石錘が出土している。報告書に実測図や一覧表として記載された408点について図表化したものが第76図である。これによると鳩岡崎遺跡の礫石錘は重量で330g未満、長径で4cm～11cmに集中しているが、ほ



第76図 鳩岡崎遺跡出土礫石錘

ば2つのグループに分類できる。

I グループ

重量で280g未満、長径で4cm～10cmの範囲に集中する一群があり、これをIグループと呼称する。また、Iグループより上位にやや散漫な分布を示す一群があり、これをIIグループと呼称する。IIグループは重量では120g～330gの範囲、長径では9.5cm～11cmの範囲内に収まる。

蔴内遺跡

蔴内遺跡は北上川の支流零石川のほぼ中流域に立置しており、縄文時代の“鯨”跡や足跡の検出のほか大形土偶の出土などで著名である。縄文時代後期～晚期の集落跡などに伴い多量の礫石錐が出土している。報告書に実測図や一覧表として記載された453点について図表化したものが第77図である。これによると蔴内遺跡の礫石錐は重量で500g未満、長径で3cm～12.5cmに集中しているが、鳩岡崎同様2つのグループに分類できる。

I グループ

II グループ

重量で180g未満、長径で3cm～7.8cmの範囲に集中する一群があり、これをIグループとする。また、Iグループより上位に集中する一群をIIグループとする。IIグループは重量では100g～500gの範囲、長径で7cm～12.5cmの範囲内にほぼ収まる。IIグループよりも点数が多い。

ここで、2つの遺跡の礫石錐を比較すると、蔴内のほうがやや数値の大きなIIグループに集中している点を除けば、ほぼ類似した出土状況を呈していると言えそうである。

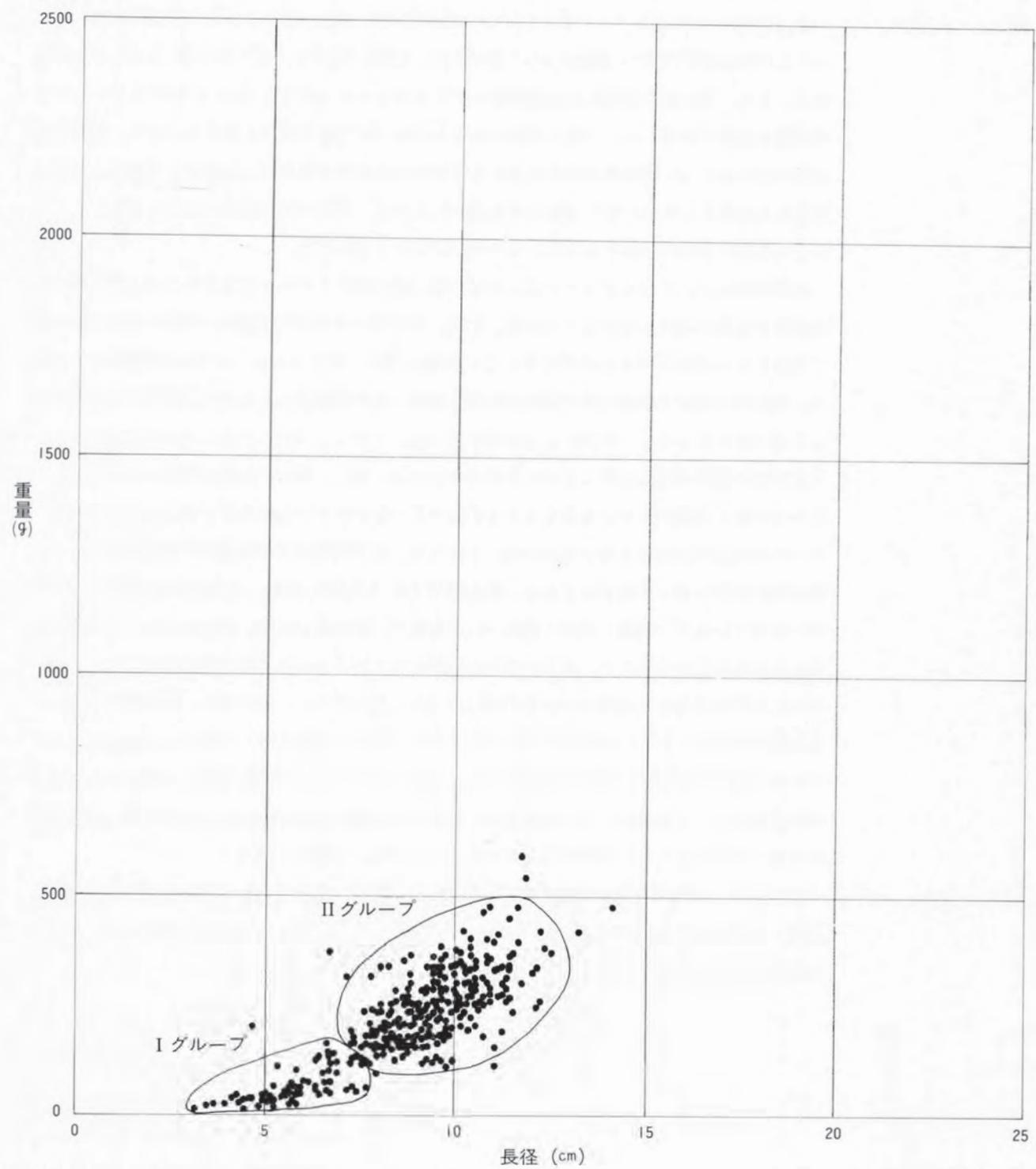
これらの礫石錐と扁平円礫の関係についてであるが、白石遺跡と鳩岡崎遺跡を比較してみると、白石遺跡のAグループと鳩岡崎遺跡のIグループは極めて類似した分布状況を呈しており、また、同様にBグループとIIグループもやや類似しているようである。ただし、両者ともに礫石錐が扁平円礫よりも重量、長径ともやや大きな数値となる点で相違している。

以上の点から扁平円礫のAグループは礫石錐のうち小形のもの（Iグループ）にはほぼ相当する可能性が大きいと言えそうである。つまり礫石錐は前述した様に内陸部の大河川流域に分布する遺跡から多く出土する場合が多く、小河川の流域や山間部の遺跡から多数出土した例はあまり知られていない。同様に宮古地方の扁平円礫も海岸部に近い遺跡での出土点数が多く、海岸線から離れるに従って出土点数が少なくなるという点で礫石錐に類似している。また、形態的には端部に紐をかけるための剥離等があるか無いかだけの差異で、重量や礫自体の形状は極めて類似している。

最後に扁平円礫や礫石錐の用途であるが、まづ、礫石錐に関しては從来から漁撈に関する錘と考えるのが一般的だったようで、岸上鎌吉は『pre-historic Fishing in Japan』のなかで、石錐、土錐とも漁撈具のなかの錘であろうとし、石錐を2形態に、土錐を3形態に分類し、岸上時代の漁撈具との比較しているが個々について用途の限定はしていない。また、この時点で岸上は礫石錐を“切れ目のある石錐”の中に入れ分類している。（註3）。

以後、礫石錐が他の錘に比較し大形すぎることに注目し、礫石錐以外の錘を漁網錘とし、礫石錐のみを分離する方向へ向かう。渡辺誠はこうした流れを受けながら縄文時代の網漁業などの集大成を試みているが、やはり礫石錐は漁網錘からは除かれている（註4）。ただし、一部の礫石錐については漁網錘として使用された可能性を否定していない。

鳩岡崎遺跡や蔴内遺跡の礫石錐は2つのグループに分類されることは既に述べたが、このうち重量の小さいIグループは全体的に切目石錐の重量よりやや大きいものの、切目石錐にはほぼ類似した重量のものを多く含んでいる。また、IIグループについては切目石錐より明らかに重



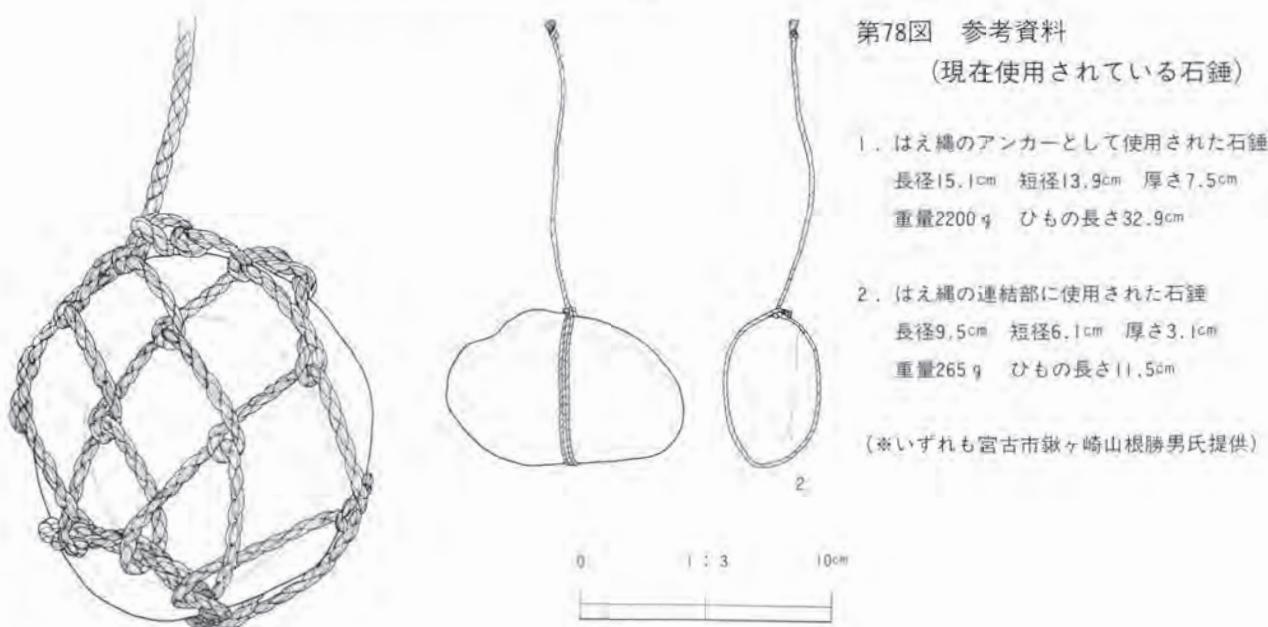
第77図 莢内遺跡出土礫石錐

い。このことから、I グループについては切目石錘同様漁網錘であった可能性を否定できないように思われる。II グループについては網漁業以外の漁に関係する錘の可能性と、I グループとの形態的類似性から漁網錘として使用された可能性の両者を考慮する必要があるものと思われる。また、礫石錘を編物を編む際の錘とする意見もある（註5）。確かに小形のものはその可能性を否定できないが、大形で重量のあるものについては不適当と言える。更に、編物を編む際の錘はおそらく縄文社会の中で本来は普通的に存在すべき石器（石器として認定されない場合もあるかもしれないが）であろうと思われるので、遺跡毎の出土量の多寡はともかくとして全く欠落する場合が多々あるというのもおかしいと思われる。

扁平円礫についてはA グループとしたものが、礫石錘の I グループとしたものより以上に切目石錘の重量に近似しているといえる。また、重量が10 g～100 g程度の小形のものをより多く含むことも切目石錘などの漁網錘とした石錘に近い。B～D グループの扁平円礫については、敲打磨石類などの使用痕や調整痕の残る石器として使用されるものや石臼炉の炉石などとして使用されるものを一部含むことは既に述べた。しかし、これらはほんの少量であるため、大方は別の目的で遺跡に持ち込まれたものと言える。また、市内でも海岸線からやや離れた遺跡からの出土点数が少ないと言うこともやはりB～D グループも何らかの漁撈に関係する錘であった可能性が指摘できると思われる。ところで、扁平円礫のような自然礫を漁撈具とした想定は既に先学によって成されており、例えば岸上は「（前略）現在、石の錘は依然として広く用いられている——刺網・曳網・釣糸・いかりなど。錘を用いる際、漁師は適當な形と大きさをした小石や石を集めたり、あるいはその目的によくかなうように石に多少細工をする。網や釣糸には切れ目あるいは溝のついた石錘はめったに使われない。網の場合、自然の小石はそのまま使われるか、あるいはわらに包んでロープにつなぐ。曳網には、一般に人工を加えた石、すなわち円錐形とか角錐形の石が使われる。1.5～2.4 kgぐらいの重さの大きな石はいかりのために使われる。この場合、手ごろな大きさの自然石あるいは人工を加えた石を選び、木の部分にうまく適合するよう多少手を加えることがよくある。（後略、註7）」

これは岸上時代の漁具と縄文時代の錘を比較し、暗に用途を想定してみせたものであるが、石錘・土錘が漁撈具であろうとはしながらも結局は個々の錘について用途を想定せず、わずかに網漁業の存在を示したに過ぎない。

第78図 参考資料
(現在使用されている石錘)



また、楠本政助は『(前略) 湾内(仙台湾)の遺跡には打ち欠きなどの加工の痕跡を認めない大小さまざまの自然石が散見できる。錘として利用するためには当然紐をかけねばならないが、現在使用されている石錘など必ずしも糸かけのためのスリットなどを必要とする訳ではないので、我々が遺物として扱っていない自然石中に、錘に利用されたものの大半が含まれている可能性が高い(後略、註8)。』とし、本論と同様に明らかに漁撈具であると想定している。

現在宮古湾周辺でも自然石を石錘として使用する例が多くあるので、第78図に主なものを示した。1は網目状にした紐で礫を包み込んでしまうもので、やや大形の礫を使う場合に用いられる方法のようである。はえ縄のアンカー以外に養殖棚の錘など様々な場面で最も頻繁に使用されている。2は扁平な礫の短軸方向を紐でしばっただけの単純なものである。おそらく小形の礫はほとんどこの方法で使用されたものと思われる。

以上長々と駄文を連ねたが、本項では遺跡に持ち込まれた扁平円礫をAグループとB～Dグループの大きく2つに分けて、前者を漁網錘として、後者については漁網錘も含めた漁撈に関する錘として使用されたものと想定してみた。しかし、これ以外の用途に使われた錘である可能性を否定はしない。

今後は漁撈を前提にして各々のサイズがどのような錘として使用されたのか探る必要があると思われるもののその実証は極めて困難であると言える。

最後に、岩手県内では北上川流域に分布する礫石錘と沿岸部に分布する扁平円礫(錘)の2者が各々別々に分布しているらしいことが想定されたと言える。扁平円礫(錘)の分布は仙台湾付近から三陸沿岸南部の陸前高田市、三陸沿岸中部の宮古市までを確認したが、更に三陸沿岸北部の野田村や久慈市周辺へまでも分布している可能性がある。一方、礫石錘は北上川流域を北上し、更に馬淵川流域を北上し八戸市周辺へも確実に分布している。特に八戸市長七谷地貝塚では縄文時代早期後葉の竪穴住居跡などに伴って礫石錘が出土しており注目される。

これら2つの石錘の分布状況が持つ意味や各々の発展あるいは流入した経移について、特に漁業との関り合いを中心に検討する必要があるかと思われるが、資料を蓄積した上で再度論ずることにしたい。

< 註記 >

註1 熊谷常正ほか『根井貝塚発掘調査報告書』岩手県立博物館 1987

草間俊一ほか『崎山弁天遺跡』大槌町教育委員会 1974

註2 陸前高田市立博物館佐藤正彦氏の御教示による。

註3 小田野哲憲『岸上謙吉:日本先史時代の漁撈』 岸上謙吉著、川上和子訳、岩手県立博物館 1984 1985

註4 渡辺誠『縄文時代の漁業』雄山閣 1937年ほか

註5 鈴木道之助『図録石器の基礎知識 III』柏書房 1981

註6 炉石や配石遺構に用いるために遺跡内に持ち込まれた礫と、錘として使用するために持ち込まれた礫は重量や扁平率などで差異が出るものと思われるが、前者のデータが手もとに無く、比較することはできなかった。

註7 註3と同じ

註8 楠本政助『仙台灣における先史狩漁文化』矢本町史第1巻 1973

＜参考引用文献＞

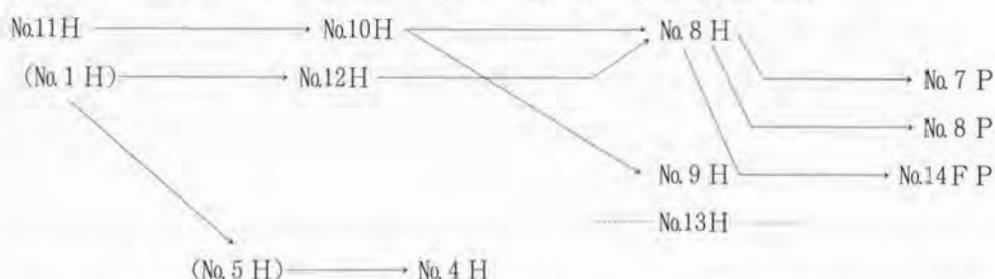
1. 相原康二『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XV-1、2 (江釣子村鳩岡崎遺跡)』岩手県文化財調査報告書第70条 1982
2. 工藤利幸ほか『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市莉内遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第32集 1982
3. 市川金丸ほか『長七谷地貝塚』 青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集 1980
4. 栗村知弘ほか『長七谷地遺跡発掘調査報告書 長七谷地2、7、8号遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集 1979
5. 草間俊一ほか『貝鳥貝塚』岩手県文化財愛護協会 1971

III 調査のまとめ

白石遺跡第3次調査・第4次調査

第3次調査区は、白石遺跡のほぼ中央に位置し、第2次調査区に隣接する。第2次調査区同様に多くの遺構が密集し、重複していた。これらの新旧関係を模式化すると次のようになる。

(Hは竪穴住居跡、Pは土塙跡、F Pは炉跡とする。また()内は第2次調査)



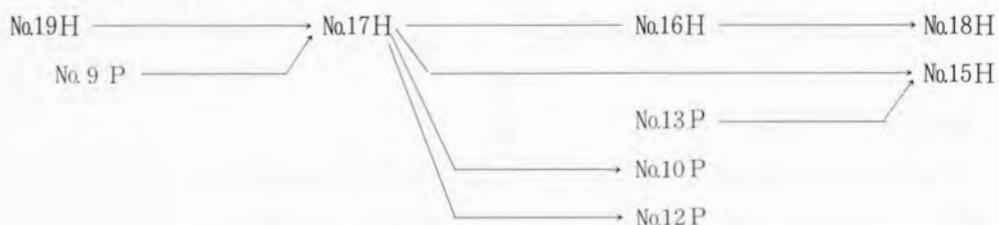
これらは、第2次調査区同様に比較的短期間のうちに構築～廃棄がくり返されたものである。特に第11号竪穴住居跡と第10号竪穴住居跡の重複では、第11号竪穴住居跡の炉の上に直接構築土をつめて第10号竪穴住居跡の炉を構築している点や第11号竪穴住居跡の床面を共有している点などから、第11号竪穴住居跡の廃棄直後に炉を埋め戻したのみで第10号竪穴住居跡を構築している。両者の関係は立て替えあるいは拡張のようなものだった可能性があるものの遺構全体を精査したわけではないので確定できない。

これに対して第10号竪穴住居跡と第8号竪穴住居跡や第9号竪穴住居跡の重複は別個の遺構どうしが切り合ったものである。

第3次調査区内の竪穴住居跡のうち伴出遺物により時期のわかるものは、第10号竪穴住居跡・第8号竪穴住居跡・第9号竪穴住居跡・第4号竪穴住居跡であり、ほぼ丹羽の大木10式第II段階に相当するものである。

一方、土塙跡はこれらとは時期を異にしているようである。

第4次調査区内も同様に狭い調査区内に多くの遺構が重複していた。これらの新旧関係を模式化すると次のようになる。



これらの遺構の存在時期は他の地点に比してやや幅があり、第17号竪穴住居跡の床面が丹羽の大木10式第I段階に相当し、埋土の遺物が大木10式第II段階に相当する。第16号竪穴住居跡は大木10式第II段階に相当する。

また、第15号竪穴住居跡は炉の埋設土器に連鎖状文が施文されており、更に炉床上に敷かれていた土器は方形区画内に充填縄文による縄文帶を施文している。これらの土器は縄文時代後期初頭に伴うものである。

次に炉についてであるが、今回の調査でも主体となるのは複式炉である。各々の住居跡毎に形態を異にしており、各部位（I部～III部）の組み合せにより次のように分類される。

A 1類 < I部>石匂炉 + < II部>石匂炉 + < III部>前庭部 No.9 H

A 2類 < I部>地床炉 + < II部>石匂炉 + < III部>前庭部? No.10H

B 1類 < I部?>地床炉 + < II部>斜位土器埋設炉 + < III部>立石、礫埋設 No.15H

C 1類 < I部>地床炉 + < II部>地床炉 + < III部>前庭部? No.11H

A類は石組複式炉に相当する。A 1類は石匂炉を2つ連絡したものであるのに対し、A 2類のII部は石組された炉となっている。B類は斜位土器埋設複式炉に相当する。C類はI部とII部に明瞭な段差があり、各々で独自に火が燃やされていたようである。複数の燃焼機能を持ち複式炉の範疇に入れるべきであるものの未命名である。

B 1類については複式炉として分類したものの炉全体の精査が終わっていないため、来年度の調査終了後に再度報告する。

遺物については、特に土器があまり出土量は多くないものの遺構ごとにSetとなっているものもあるので来年度の調査終了後に分類、整理してみたい。

石器については一応ひととおりの器種が出土しているものの石錐と打製石斧などが欠落しており、前者については全く使用痕のない扁平円礫が代用されている可能性を指摘した。また、他の同時期の他の遺跡と同様に、磨石、敲石、敲打磨石類、石皿などの石器類がやや多い点が指摘できるようである。

最後に第17号竪穴住居跡出土の剥片接合資料であるが、県内の出土例と比較してもやや小さな原石を使用している感がある。技法については前述したように打面調整などを行わず、自然面をそのまま打面とし、両端部を交互に打撃し剥片を得るという粗雑で単純な剥離技法であると言えるが、他の接合資料も基本的にはこれに類似するレベルなのではないかと思われる。

大体10式期ではこれらの剥片接合資料が発見されることが時折有り、例えば竪穴住居跡の周溝やピットの中から一括して出土するものについては剥片貯蔵とされることがある。しかし、今回の出土例は主柱穴の掘り方内部ということもあり貯蔵形態とは異なる。しかも、炭化物粒、焼骨片、魚骨などが共伴しておりこれらとともに掘り方を埋め戻す際に一括して廃棄されたものと考える方が自然であろうと思われる。

崎山貝塚第4次調査

本年度の調査は前年度に引き続き台地上の平坦面での遺構検出を試みた。検出した遺構は前年度ほどバラエティーが無く、大半が竪穴住居跡と土壙跡のようで、第3次調査区東端部の居住跡が第4次調査区まで広がっており、更に先端部までも続いているものと思われる。

大半の居住跡は縄文時代中期に伴うと思われるものの、1棟だけ平安時代と思われるものを含んでいた。今のところ、この遺構が遺跡の存続した下限を示すものとなっている。

また、第4次調査区内は表土直下がほぼ地山面であり第3次調査区のように地山の起伏がみられない。この様な差異が何故存在しているのか来年度以降に探る必要がある。同時に、北斜面の遺物包含量や貝層のあり方および個々の遺構の存続時期や性格などを探るという課題も残されており、こうしたものの積み重ねにより貝塚の有りようをより具体化し保護につなげて行

く必要があるものと思われる。

<参考引用文献>

1. 鈴木優子ほか『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書V』岩手県文化財調査報告書第49集
1980
2. 高橋文夫ほか『都南村・湯沢遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集 1978
4. 中村良幸「複式炉について」『考古風土記・第7号』鈴木克彦 1982
5. 中村良幸『観音堂遺跡・第1次～第6次発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財報告第11集
1986
6. 丹羽茂「東北地方の複式炉」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編 1976
7. 丹羽茂「大木武士器」『縄文文化の研究 4 縄文土器II』雄山閣 1981
8. 目黒吉明「住居跡の炉」『縄文文化の研究 8 社会・文化』雄山閣 1982

写 真 図 版

第1図版



白石遺跡第3次調査区全景（最終時）



白石遺跡第3次調査区全景（最終時）

第2図版



白石遺跡第3次調査区全景（使用時）



白石遺跡第3次調査区全景（使用時）

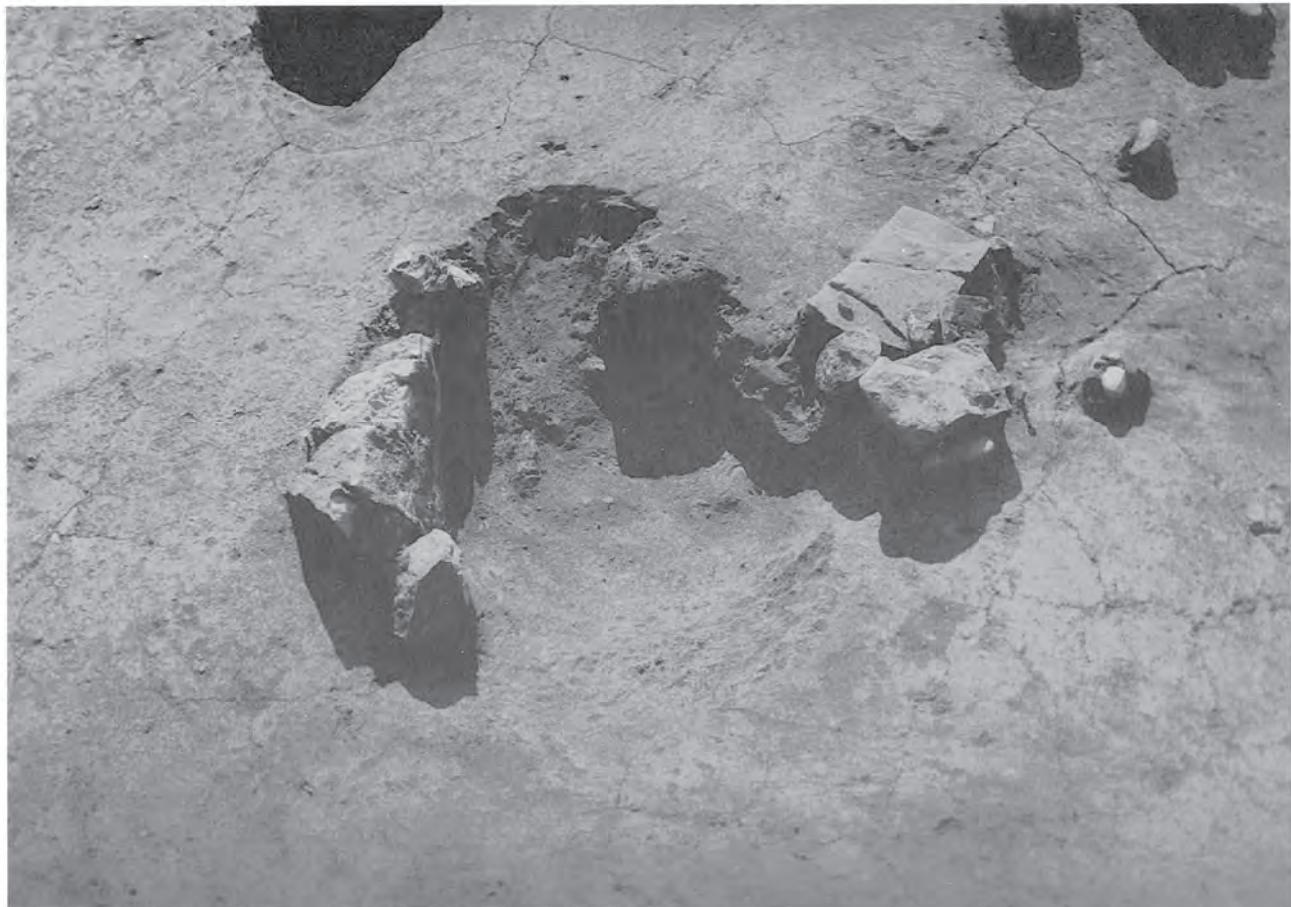


第4号竪穴住居跡



第4号竪穴住居跡

第4図版



第4号竪穴住居跡・炉（使用時）



第4号竪穴住居跡・炉（構築時）

第5図版



第9号竪穴住居跡



第9号竪穴住居跡・堆積状況

第6図版



第9号竪穴住居跡・炉



第9号竪穴住居跡・炉

第7図版



第8号竪穴住居跡・礫出土状況



第8号竪穴住居跡・堆積状況

第8図版



第8号竪穴住居跡・炉



第8号竪穴住居跡・炉構築状況

第9図版



第8号竪穴住居跡・遺物出土状況



第8号、第10号、第11号竪穴住居跡

第10図版



第8号、第10号、第11号竪穴住居跡・炉



第10号、第11号竪穴住居跡・炉堆積状況

第11図版



第10号、第11号竪穴住居跡・炉構築状況



第8号竪穴住居跡・P9・P10堆積状跡

第12図版



第11号竪穴住居跡・扁平円礫出土状況



第7号、第8号土塙跡



第7号土塙跡・堆積状況



第13号竪穴住居跡・炉

第14図版



白石遺跡第4次調査区全景



第15号竪穴住居跡

第15図版



第15号竪穴住居跡・炉構築状況



第15号竪穴住居跡・炉埋設土器

第16図版



第15号竪穴住居跡・堆積状況



第15号竪穴住居跡・炉床上遺物出土状況

第17図版



第16号竪穴住居跡・堆積状況



第17号竪穴住居跡・堆積状況

第18図版



第16号、第17号竪穴住居跡



第17号竪穴住居跡・遺物出土状況



第17号豎穴住居跡・炉、床面の状況



第17号豎穴住居跡・炉堆積状況

第20図版



第20号豎穴住居跡



第19号豎穴住居跡

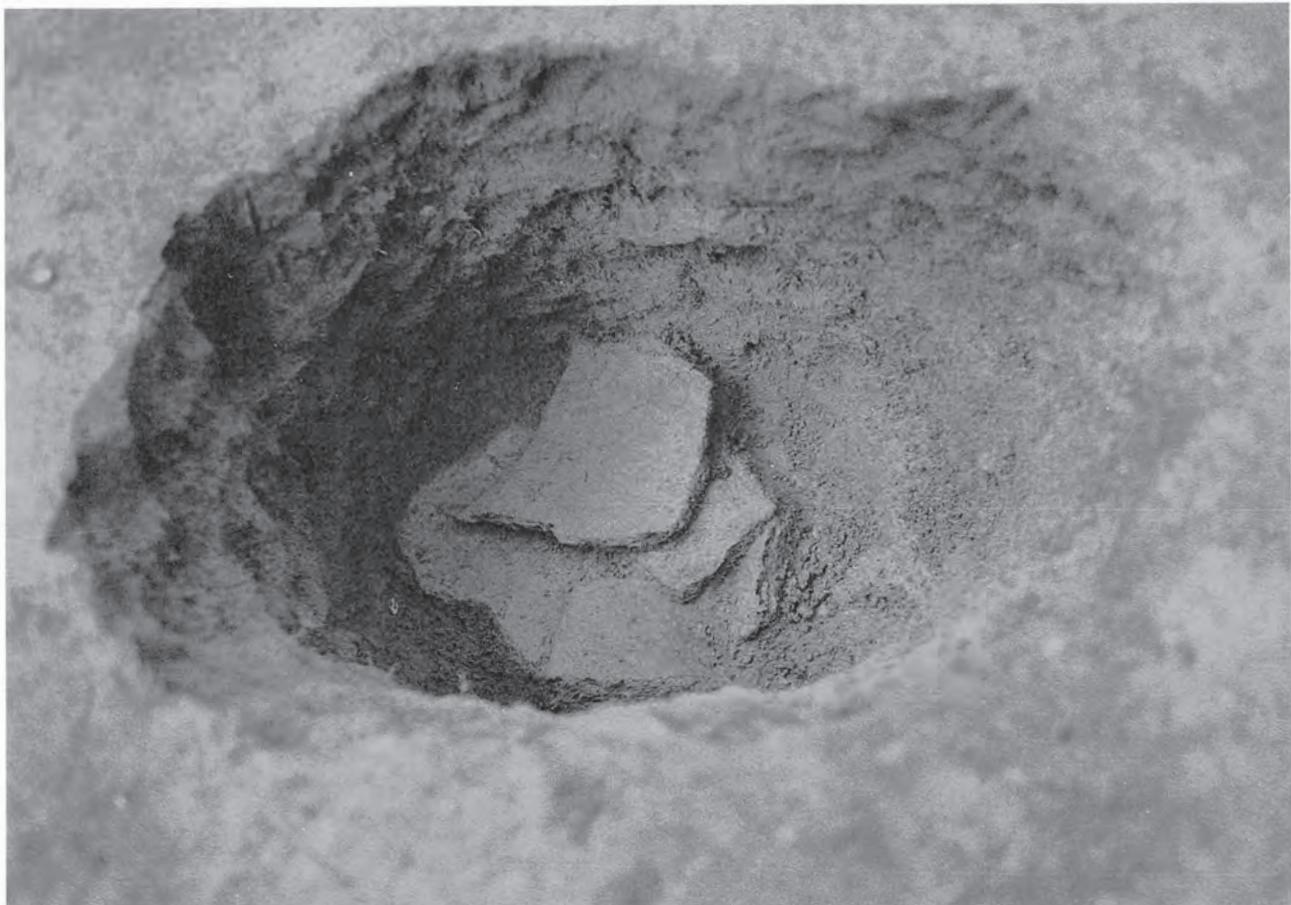


第13号土塙跡、堆積状況



第10号土塙跡、堆積状況

第22図版

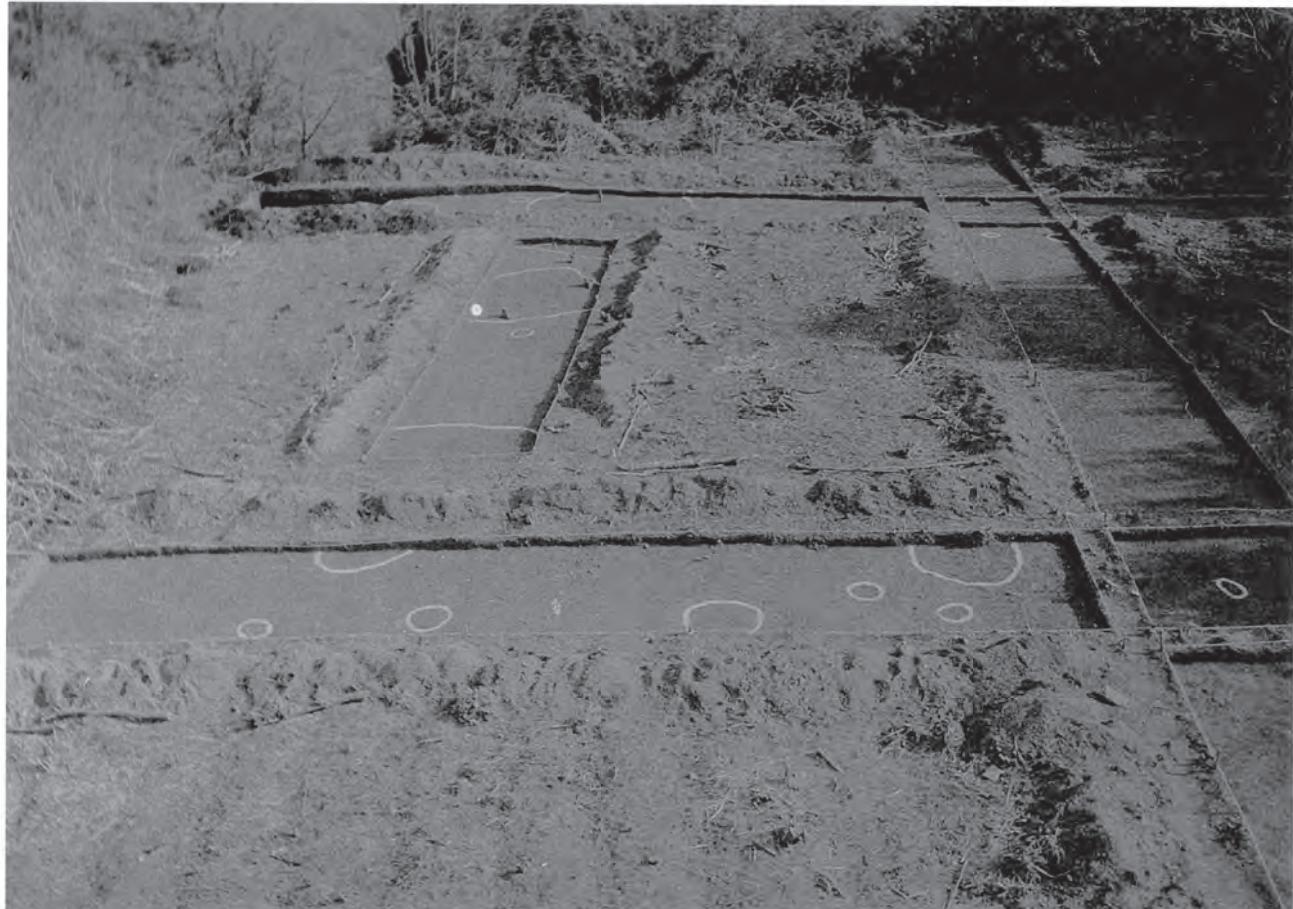


第15号竪穴住居跡 P 19遺物出土状況



第21号柱穴群 P 112遺物出土状況

第23図版



崎山貝塚第4次調査区全景



調査区全景

第24図版



遺構検出状況



遺構検出状況



遺構検出状況



遺構検出状況

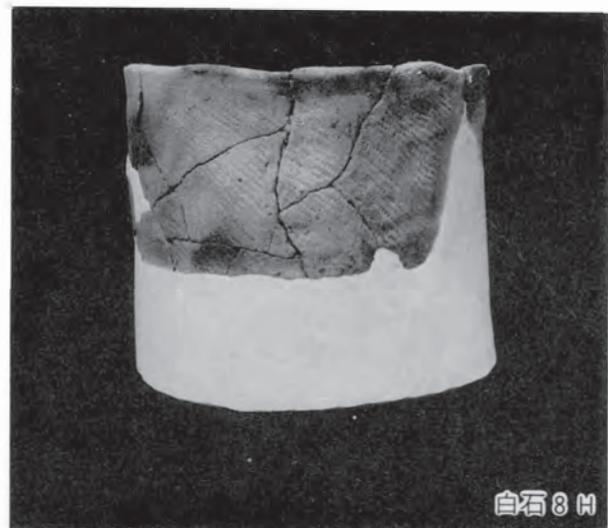
第26図版



N 24 E 93— I 号竪穴住居跡



N 21 E 93— I 号竪穴住居跡

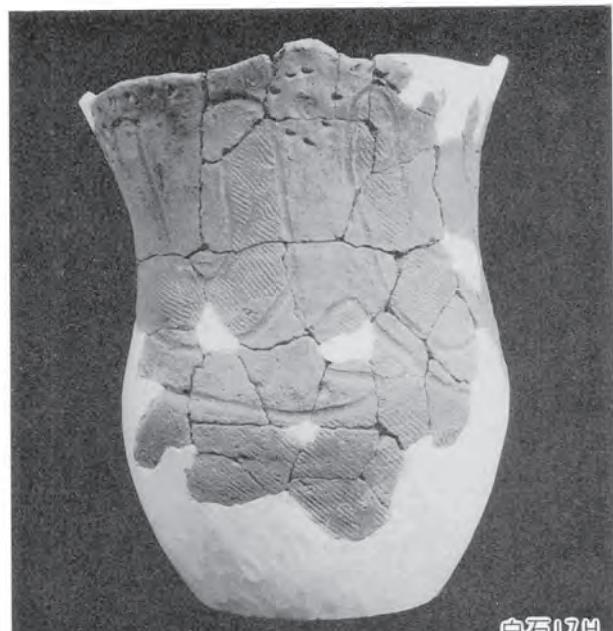


出土遺物（Ⅰ）

第28図版



崎山N 21 E - 93H



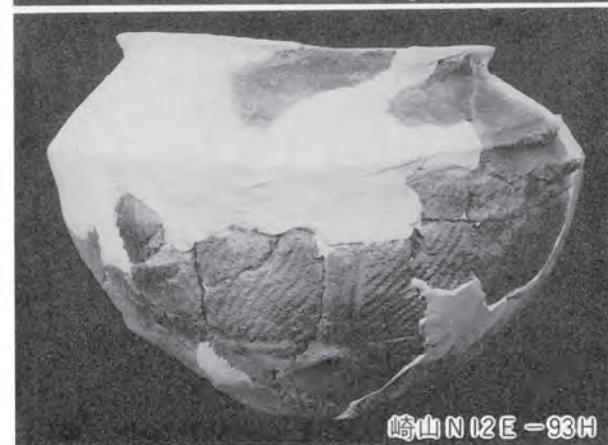
白石17H



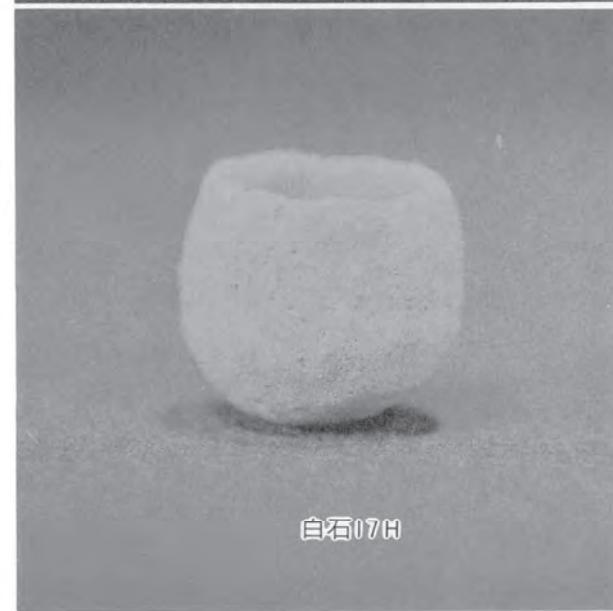
崎山N 15 E - 75H



白石17H



崎山N 12 E - 93H



白石17H

出土遺物 (2)

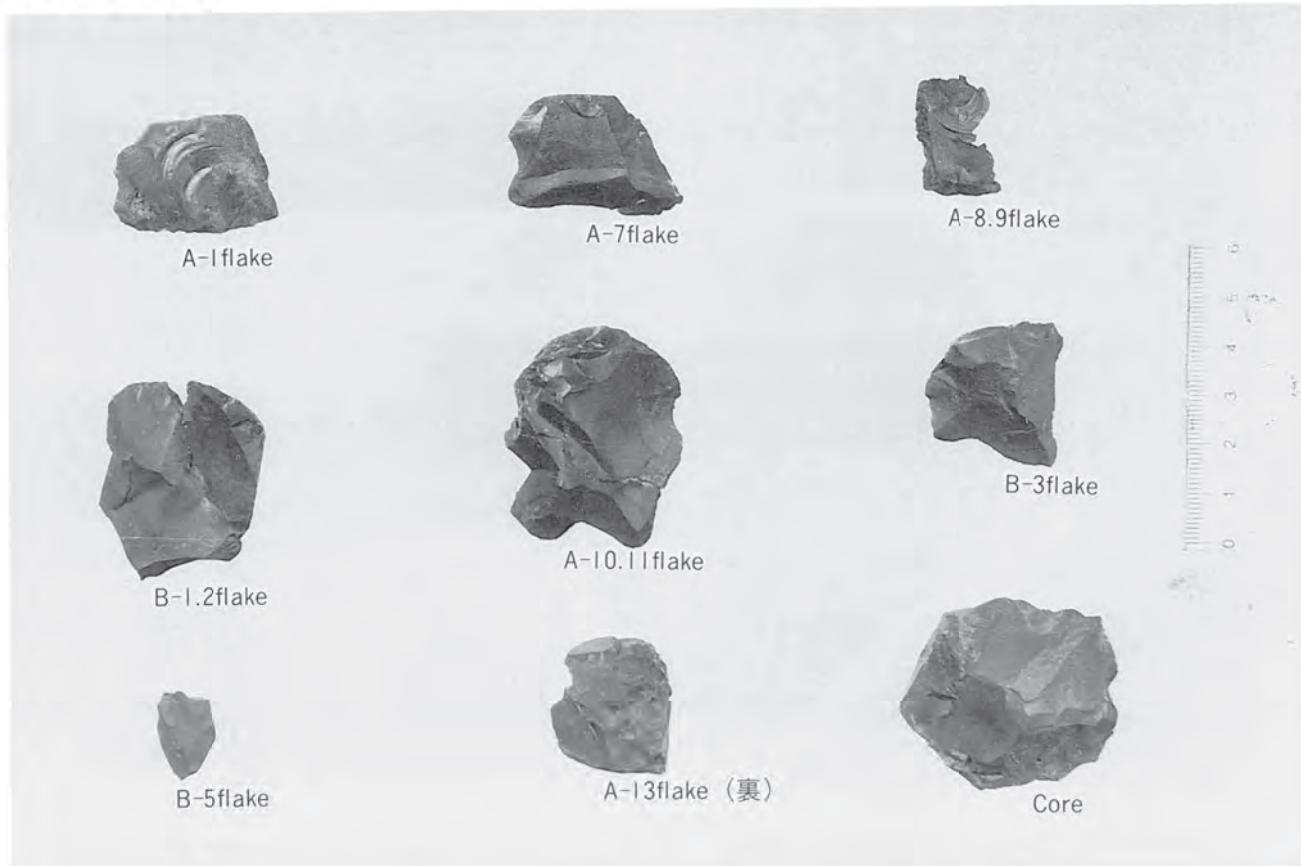


剥片接合資料（接合時）



剥片接合資料（接合時）

第30図版



剥片接合資料（剥片一表）



剥片接合資料（剥片一裏）

宮古市埋蔵文化財調査報告書23

崎山遺跡群Ⅳ

—平成元年度発掘調査概報—

1990.3

発 行 岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印 刷 株式会社 文 化 印 刷
宮古市大通2丁目5の2